

## 第六章 菩薩講を構成する各組の歴史と現状

### 1 はじめに

「当麻寺二十五菩薩来迎会式（聖衆来迎練供養会式）」（以下、「練供養」）は中将姫の命日に合わせて行なわれる行事として、葛城市をはじめ、周辺地域の人びとに親しまれている。

この練供養は、本堂（極楽浄土）から娑婆堂に長い橋が架けられ、観音菩薩・勢至菩薩、二十五菩薩が極楽浄土から娑婆堂に中将姫の像を迎えにいき、極楽浄土へ導く、来迎引接の様子が表現されている。この観音菩薩・勢至菩薩及び二十五菩薩の面を被る人びとは、誰でも良いという訳ではなく、當麻寺のある葛城市當麻地域を中心として、葛城市新庄地域周辺、香芝市、橿原市など広域に及んでいる。それぞれの地域で面を被る役を担っている菩薩講（組）を構成しており、現在、各組の人数は二名から十名前後の人びとによって構成されている。現在は、當麻組・勝根組・今在家組・竹内組・長尾組・木戸組・疋田組・忍海組・薑組（以上、葛城市域）、磯壁一組・磯壁二組・磯壁三組・畑一組・畑二組・狐井組・五位堂組（以上、香芝市）、観音寺組・田中組（以上、橿原市）、西南院・中之坊・奥院・念仏院・護念院（以上、當麻寺塔頭）によって構成されている〔図 菩薩講の分布〕。

菩薩講は、練供養（平成三十一年より従来の五月十四日より四月十四日に変更）の当日に二十五菩薩の面を被ることになっているが、練供養の少し前に実施される「練り初め」と称する集まりの際に、くじ引きによって、観音菩薩・勢至菩薩・普賢菩薩以外で、どのような菩薩等の役の面を担うかを決定することになっている。この「練り初め」は、従来、四月二十九日に実施されていたが、平成三十一年より三月に変更された。

菩薩講がいつ結成されたかは詳らかではないが、練供養の際に講員が装束・

面と交換する「札」や菩薩の「輪光」の刻名より、菩薩講は元禄六年（一六九三）には存在していたと考えられる。

この菩薩講は、護念院が発行した名簿（昭和四十年代に発行されたと考えられる）などから何度かの変遷を経ていると考えられる。また、昭和五十年頃の調査<sup>1</sup>によれば、當麻組・染野組（三組あり）・今在家北組・今在家南組・勝根組・木戸組・竹内組・疋田組・西辻組・忍海組（以上が葛城市）、五位堂組・磯壁組（三組あり）・狐井組・畑組（以上が香芝市）、観音寺組・田中組（以上が橿原市）、中之坊組（當麻寺塔頭）、細田組（大阪府内を中心とした信者で構成されている）、信徳組（南郷組の後を引き継いだ大阪府下の寺院で組織）の組が担っていたことが分かっている。

### 2 各地域の菩薩講の諸相

葛城市・香芝市・橿原市にまたがる菩薩講の名称等については先の「表 菩薩講の変遷」にあるとおりである。

現在、二十三組（護念院・當麻寺塔頭を含む）の菩薩講があり、練供養行事の維持・継承の一助を担っている。各講の全体的な特徴として、①平均して五六名の講員によって維持されている組が多い、②代々の世帯主を中心に、練

表 菩薩講の変遷

昭和40年代		現在	
五位堂	今在家南組	五位堂	今在家
磯壁	今在家北組	磯壁一組	
磯壁	観音寺	磯壁二組	観音寺
磯壁	田中	磯壁三組	田中
畑	疋田	畑一組	疋田
畑	西辻	畑二組	西南院
南郷	木戸	薑	木戸
狐井	忍海	狐井	忍海
染野	竹之内		竹内
染野	細田	勝根	奥院
染野	大阪紫雲講	長尾	念仏院
勝根	中之坊		中之坊
村方	護念院	當麻	護念院

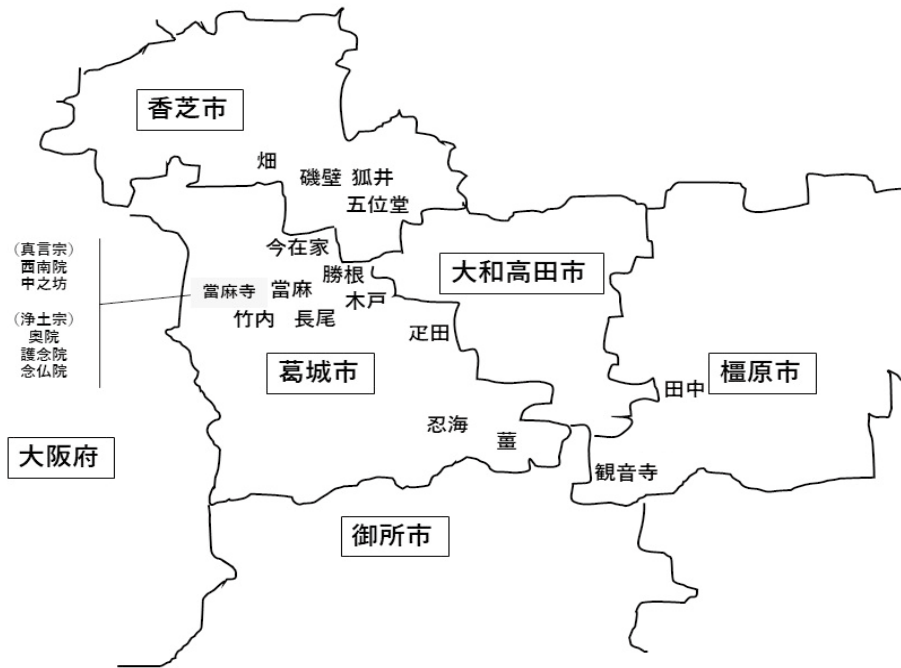


図 菩薩講の分布

供養に関わる世襲制がとられているところが多い、③當麻寺は浄土宗・真言宗の塔頭から成り、練供養を中心的に担っている護念院は浄土宗寺院であるが、菩薩講の講員は浄土宗とは限らない、ことがあげられる。

以下、各地域の菩薩講について述べていきたい。

#### 當麻組

當麻組は、近鉄南大阪線當麻寺駅周辺、駅をはさんで東側、當麻寺のある西側一帯の広範囲にわたる。

當麻組は、練供養の当日、他の講とは違い、進行にも深くかかわっている。

當麻組は、當麻集落の数軒の家によって、維持・継承されている。練供養行事を中心となって担っている護念院の檀家もあれば、當麻寺塔頭の他寺院の檀家もいるなど、宗派は特に限定されておらず、長男が継承に関わっている場合が多い。

講の費用については、年末に護念院檀家（年番）が寺の初穂料を集めに回る時に菩薩講の経費も併せて集めることになっている。

講の集まりについては、必要に応じて定期的に集まっている。特に練供養行事の前（練りぞめの約一ヶ月前）に打ち合わせの為に集まっている。

當麻組が持っている面の数は三つある。當麻区はもとも一つの講であった。昔は練供養行事を担う青年・壮年の男性が多く、面を被る役を取り合っていたという。それほど面を被る役が大変名誉なことであった。

しかし、近年は様ざまな事情から、なかなか決まらなくなってきた。このような事情から、大字當麻の十二院内の地域を三つの班（①北の門院内から上院内、②中院内から大橋院内、③地藏町院内から一丁目院内）に分け、それぞれが、責任を持って面を被る役を担ってもらえるように改革した。現在では、三つが集まって話をしているという。

また、當麻組は二十五菩薩の先頭をいく観音菩薩・勢至菩薩・普賢菩薩の三役を担う組でもある。

観音菩薩・勢至菩薩の役を担っている者は現在、四名おり、隔年で担当している。

これまで、當麻在住のK氏、N氏が担ってきたという。この役は六十歳を定年として退き、後継者に引き継いでいる。この役は、誰でも良いというわけではなく、皆に認められるような人に携わってほしいという周囲の願いもあり、そういった人が選ばれるという。

他の菩薩面とは違い、動きを伴うため、非常に体力を必要とする。そのため、この役を任されているものは、長時間の動きや、面を長時間被ることの体力維持、体力作りを心掛けているという。

観音菩薩・勢至菩薩の面を被る年の練り初め前には、各自で自主練習に取り組むほか、護念院境内で住職と練習に励んでいる。

當麻組は「練り初め」や当日の準備にも携わる。また、練供養の少し前になると、面を被る各講の対象者に対し、菩薩役の心づもりをしてもらうために、研修会を実施している。これについても、當麻組、護念院住職を中心に対応している。

練供養当日は、随行者の紋付袴の着付けを補助してくれるボランティアも入っているが、面を被る者の着付けなどは當麻組も加わっておこなう。また、面をつける際は、當麻組の者が主体となつて行なっている。

また、當麻組は、面を被る人の都合がつかない組や、当日の急病者があつた



写真1 面を事前に試す様子



写真2 練習の様子



写真3 練初めの様子

場合の為に、交代要員を準備しておくなど、広く心配りも行なっている。

なお、現在の練供養の衣装は、前護念院住職が菩薩講員に呼びかけ、布地を広く寄附してもらい、当地の女性たちの手によって製作された。練供養が終われば、その都度、補修などをしていくという。当地の女性たちは、護念院の壇家でもあり、「練り初め」や「施餓鬼」などの精進料理などを準備するなど、深く関わりがある。

なお、道が舗装されていないころの練供養の当日には、参道の川ざらいを行なっていたという。

#### 勝根組

勝根は近鉄南大阪線當麻寺駅より北方にある地域である。

勝根組は葛城市勝根に在住する八軒を中心に構成されている。この八軒は、「昔よりずっと組に入っている家筋」だという。起源をいつごろまで遡ることができるのかは、史料等がないため詳らかではないが、講員の話によれば江戸

時代には講に入っていたという。講員の軒数に増減はなく、ずっと維持されてきているという。この八軒が輪番で面を被る当番を担っている。

勝根地域には、西尊寺（真宗興正派）という寺があるが、講員の中には、この寺の門徒もいれば、護念院の檀家の家もあるという。以前は、農業を生業としている家も多かったようであろうが、現在の講員の職業は、農業のほか、繊維業（靴下製造）、学校の教員など様々まであるという。近隣の二上山では四月に弁当を持参し山に登る「ダケノボリ」という風習が行なわれているが、この行事についても参加しているなど、農耕儀礼も濃厚に残されている地域である。

勝根組として練供養に関わる行事や、定期的集まる機会などは、特にないという。講員同志の家が近く、何か話をする必要があるれば、個々で用事を済ませることができるからである。勝根組に関わる古文書等は特にないが、組が独自に所有している木札が伝わっている。これは、護念院が「練り初め」で渡す木札と形が似ているもので、面を被る年に木札を預かり、無事に練供養が終了すると、次の当番に回している。

面を被る年になると、該当する家の者が、面を被る者と随行する者、いずれも男性二名の予定を確保する必要がある。当主が自ら面を被る場合もあるが、その息子や親戚、縁者などが被る場合もあるなど、特に決まりはなく、年により様々まである。



写真4 勝根組の木札

### 今在家組

今在家組は、近鉄南大阪線の當麻駅の北側に位置する。

今在家組が、いつの頃からあるかは定かではないが、もともとは北組（六軒）と南組（六軒）に分かれ、それぞれ一つずつ面を持っていた。五年前位に面を返し、北組と南組を一つにした。現在は、九軒の家でまわっており、北組と南組が関係なくなってから入った家もあり、兼業農家が多い。

宗派は、浄土宗と門徒（浄土真宗）である。話者のI氏が関わるようになったのは四十年くらい前からで、兄弟や親戚にも面をかぶってもらった。初穂料は、昔は、當麻から集めて来たという。

五月十四日の練供養当日には、門前にモクスガニが売られていた。また、当地にはダケノボリの習慣があり、四月二十三日は二上山に登った。

### 竹内組

竹内組の所在する葛城市竹内は、近鉄南大阪線磐城駅の南西方に位置する。元々、講は六軒の家で維持・継承されてきたが、現在は三軒によって維持されている。現在の講員の話によれば、講を構成していたのは、村の旧家や有力な家が担っていたのではないかという。実際に、菩薩講に入っているということは、「一種のステータスのようなものであった」と聞いているためである。しかし、講の来歴を記した資料などが無い為、詳しい事は不明である。講員は、浄土宗・浄土真宗など、宗派を問わず講に入っている。



写真5 今在家組の木札

講の集まりなどは特になく、講の中で面を担う順番を適宜決めて、護念院に行くことになっている。

近年、各家が面を被つてくれる親戚・縁者を確保する等の負担が大きく、課題となっていた。そのため、平成三十一年からは、竹内の中で、地元の住民が一丸となって担っていくという。

### 長尾組

長尾組のある長尾は、近鉄南大阪線磐城駅より南方に位置する地域である。

長尾組が構成されてから、およそ三十年位が経過する。平成に入った頃に当時、副区長をしていたN氏が他の二軒（同じ姓で、主屋と新宅の関係）にも声をかけ、合計三軒で維持・継承してくことになったという。当地には、浄土寺（真宗興正派）があり、講員はこの寺の門徒である。

組としての年間行事は特にないが、護念院より練供養関係の通知が届くと、菩薩面を被る順番に当たっている当番が初穂料を徴収して回るようになっていく。結成されてから、年数も経過していないこともあり、引き継いでいる書類などはないという。

### 木戸組

木戸組は、近鉄南大阪線磐城駅の東方に位置する。木戸組において引き継いでいる史料はないため、いつ頃に成立した講かは詳らかではない。

現在の講員は三軒で構成されているが、昭和五十年頃までは五軒の家で構成されていた。講員は、本家筋の家が中心で、田地を所有している家が多かったという。庄屋をつとめたことのある家筋や現在農家や商売（繊維業・靴下製造）を営んでいる家関わっているという。三軒で続けていくのは難しいため、今後は、大字として面を被るようにしていこうという話も出ている。講員の宗派

は浄土真宗など様々である。

講員が集まる機会はないという。輪番で当番（菩薩面を被る順番）が回ってくるため、講員は、四月二十九日の練り初め（平成三十一年より日時が変更された）に間に合うように、初穂料を当番の家を持っていくことになっている。講員の中には、昭和五十年頃まで「タイムレンゾ」の日には、親戚を呼び、餅をついた家もあったという。また、「ダケノポリ」の習慣などもあったという。

### 疋田組

疋田組のある地域は近鉄南大阪線尺土駅から南方に位置する。

当地において代々引き継いでいる史料はないため、いつ頃に成立したか定かではない。しかし、当地の講員の話によれば、高祖父の代（江戸時代）から講員であった事を伝え聞いていることから、少なくとも江戸時代には疋田に講が存在していた可能性がうかがえる。疋田は北と南に分かれており、それぞれに講に入っていたという。

現在の講員は四軒であるが、多い時は十軒の講員が入っていたという。

疋田には浄土宗寺院（北疋田に檀家が多い）と浄土真宗寺院（南疋田に門徒が多い）があり、講員はいずれかの寺院の信仰が篤い。

講員が集まる機会というのは、特に設けていないという。例年、護念院から練供養の通知が届くと、当番（菩薩面を被る順番に当たっている家）は初穂料を講員宅に集めに回る。また、各講員は、当番の年をあらかじめ分かっている為、当番の年の一月か二月になると菩薩面を被ってくれる人を探す家が多いという。

### 忍海組

忍海組は近鉄忍海駅の西、葛城市歴史博物館の周辺にある集落である。

忍海組は、このあたりに在住する四軒によって維持・継承されている。忍海の講の成立については、詳しい資料が伝わっていない為、不明な点も多いが、もともとは六軒で維持されていたという。現在は、御所に在住している人も入っているというが、もともと忍海に在住していた人であるという。講員は、浄土宗を信仰している。

O氏の記憶では、祖父が長く講の責任者のような立場で、初穂料などを集めていたといい、それを子どもだったO氏が手伝っていた。現在は、当番の家が初穂料を集めている。講で集まる機会は特にないという。

講員は、輪番で当番があたる。当番の年には初穂料を集め、面を被る役目の人を確保する。面を被る人は、家族や親戚、知り合いなどに声をかけるとい

う。  
O氏の家は、平成三十年に当番が回ってきた。これまでも、親戚・縁者に声をかけ、自身も練供養に面を被ったり、随行として関わってきたが、該当年は、孫が遠方よりかけつけ面を被ったという。

#### 薑組

薑は近鉄忍海駅より東方にある地域である。

薑組は、葛城市薑を中心とした四軒の家で構成されているが、薑に限らず、葛城市や御所に居住する家によって組が成り立っている。

現在の菩薩講のどの組よりも成立年数は浅く、組が結成されて十年ほどになるという。薑組を取りまとめているT氏と護念院の先代住職は古くからの知り合いであるといい、継続が難しくなった菩薩講に、新たに組を組織して支えてほしいという相談が寄せられたという。そこで、T氏や近隣に住む人をはじめとする友人のグループが、練供養の保存・継承を応援していこうと結成された。

薑組は年一回、講員が集まる機会を設けている。例年、三月から五月の牡丹が咲く頃を目安としてT氏の自宅が集まっているという。

#### 磯壁一組

磯壁一組は、近鉄南大阪線の二上神社口駅の東側に位置する。

磯壁一組が、いつごろからあるかは定かではないが、もともと六軒だった。昭和三十年頃に二軒が入れ替わったが、六軒は維持されていた。面をかぶる者がいない等の理由で、だんだんと遠慮する家が増え、現在は二軒となっている。時期は分からないが、話者のT氏によると、磯壁三組に三軒分の権利を譲ったと伝え聞いているという。六軒だった頃は、「忠八組」と呼ぶことがあった。話者のT氏の家はもともと醬油屋をしていた。

これまで面をかぶったのは夫、息子、娘婿や加守(葛城市)の親戚などで、練供養の当日は、手を合わせてくれる人がいるので自分が仏様になったように感じるといふ。古い面は小さいが、つけると少し浮くので呼吸が楽であったが、新しい面は顔にびったりなので、呼吸がしづらいと聞いたことがあるという。

当地に伝わる「ダケノポリ」には、巻き寿司などを作った。練供養当日の五月十四日には親戚の人などが集まり、食事する習慣があった。

#### 磯壁二組

磯壁二組は、近鉄南大阪線の二上神社口駅の東側、近鉄大阪線下田駅の南方に位置する。

磯壁二組が、いつ頃からあるかは資料が伝わっていないため定かではない。もともとは六・七軒で維持・継承されていたというが、その詳しい内容については伝わっていない。現在は五軒によって維持されている。いずれも、当地にのこる古い家筋(旧家筋)であるという。講を構成する家の宗派は浄土宗であ

る。

話者のN氏（昭和七年生まれ）は、少なくとも祖父の代から練供養に関わっており、十回以上は当日の行事に携わっているという。

現在、五軒で講をまわしていることから、五年に一度は、面を被る順番がめぐってくるという。順番が回ってきた時には、親、兄弟、親戚、知り合いなどを声をかけ、面を被る役、その随行者の願いをするという。

講員は、定期的に集まるということはないという。順番については、N氏が二十年ほど前に独自の回覧板を作成し、それを回している。

当地にもダケノボリの風習は残っており、弁当を作って近くの親戚に持参した記憶があるという。

### 磯壁三組

磯壁三組は、近鉄南大阪線の二上神社口駅の東側に位置する。

磯壁三組は、もともと南郷伊六組といって、磯壁・南郷・穴虫の人たちで構成されていた。その後、昭和四十一年に組替改正がなされ、現在の磯壁三組になった。現在、六軒で維持・継承されており、話者のM氏のイットウは三軒となっている。なおM氏の曾祖父の頃に分家が講に入るために磯壁高谷忠八組（現在の磯壁一組）の「株」を買ったという記録が組に残っている。

六軒の宗派は、一軒が門徒（浄土真宗）で残り五軒は、浄土宗である。講員は、荒物屋、サラリーマンや兼業農家などをしている。

M氏が練供養に関わりはじめたのは二十歳くらいからで、面をかぶりたいという親戚の手引きを何度か行ない、平成二十九年の練供養で初めてかぶった。昔は、親戚から面をかぶりたいといわれることが多かった。

子どもの頃、レンゾの日は、学校が休みで、當麻寺門前に出た出店でカニ（モクスガニ）を買って帰ったりした。「ダケノボリ」の習慣があり、おいなりさ

んや巻き寿司を二上山へ持っていった。

### 畑一組

畑一組のある地域は、近鉄南大阪線二上山駅付近に位置する。

畑一組がいつ頃からあったかは、史料等が残されていないため、詳らかではない。五軒で維持・継承されていたが、平成二十九年前後に、一軒が講を辞退したため、四軒で構成されていたことがある。その後、加入や辞退があり、現在は四軒で構成されている。講の辞退・新たな加入については、他の講員の承認があれば可能になった。そのため現在は、畑と隣接する集落の一軒で構成されることとなっている。

講員は兼業農家が多く、また、浄土宗の檀家や浄土真宗の門徒により構成されている。引き継いでいる資料も特になく、講員が一同に集まる事もない。講員はあらかじめ、トヤがあたる年を把握しているため、護念院より練供養の案内が届くと、練り初めに間に合うように他の講員宅に初穂料を集めに回り、寺に納めることになっていた。しかし、それ以前は、畑一組、畑二組の初穂料を取りまとめる家が畑二組にあつたため、その家にお願していたという。しかし、五、六年前からは、各トヤが集めに回り、平成三十一年からは、トヤに当たった家が順番で費用のすべてを負担する事になったという。

トヤの年になると、該当する家の者が、面を被る者と随行者、いずれも男性二名の予定を確保する必要がある。当主が自ら面を被る場合もあるが、その息子や親戚、縁者などが被る場合もあるなど、特に決まりはなく、年により様々であるという。

### 畑二組

畑二組のある地域は、近鉄南大阪線二上山駅付近に位置する。

畑二組がいつ頃からあったかは、史料等が残されていないため、詳らかではない。現在は、畑と隣接する穴虫にある計四軒で維持・継承されている。しかし、昭和四十年代頃に作成されたと考えられる名簿では、六軒の氏名が記されている。このことから、時代の経過とともに、何らかの理由で講員が減少したと考えられる。

講員は寺の宗派に関係なく構成されている。引き継いでいる資料も特になく、講員が一同に集まる事もない。

練初めには、各講から初穂料を納めることとなっているが、以前は、畑一組、畑二組の初穂料を取りまとめてくれる家が当組にあったため、その家にお願いでいたという。しかし、五、六年前からは、各トヤがそれぞれに集めに回っているという。

初穂料を取りまとめてくれる家があった頃は、どのような家が講員であるのか良く分からないという人が多くあったというが、近年は名簿を作成し、それに準じてトヤがまわっているという。

講員はあらかじめ、トヤがあたる年を把握しているため、護念院より練供養の案内が届くと、練初めに間に合うように他の講員宅に初穂料を集めに回り、寺に納めることになっていた。しかし、四年ほど前からは、トヤの人が全員分を一括で寺に納めることにしたという。

トヤの年には、該当する家の者が、面を被る者と随行する者、いずれも男性二名の予定を確保する必要がある。当主が自ら面を被る場合もあるが、その息子や親戚、縁者などが被る場合もあるなど、特に決まりはなく、年により様ざまであるという。

## 狐井組

狐井組は、近鉄大阪線下田駅から東方に位置する。

狐井組の成立時期については、史料等が伝わっていない為、詳しいことは分かっていない。講員は、現在六軒から構成される。

現在、狐井組の長老にあたるA氏はおおよそ五十年前程前に親戚に勧められて加入したという。また、近年、一軒が講を辞めたが、新たに一軒加入している。このように、一時期減少の危機もあったというが、他の講員に承認され、加入する事例があるなど、六軒を維持している。

講員は、かつて庄屋をつとめたことのある家筋や代々農業を営んでいた家などが多い。講員は浄土宗の檀家が多いという。

狐井組として、集まる機会は特にないという。現在、A氏が菩薩講の取りまとめ役を担っており、例年、初穂料を各家に集めにまわり、当番に預けているという。

当地には、四月に「ダケノポリ」の風習があったという。隣接する五位堂の駅近くの池の堤で巻寿司や稲荷寿司を皆で食べたという。

「タイムレンゾ」が終わると農作業が忙しくなる為、練供養の日は、つかの間の休日でもあったという。この日にはヨモギ餅に餡をつけたものを「苦の餅」と呼び、親戚にも配ったという。

## 五位堂組

五位堂組のある地域は、近鉄大阪線五位堂駅から南方周辺に位置する。

五位堂組が結成された時期については、史料等が残されていないため、うかがい知る事ができないが、明治三十九年頃の講員の名前が記された木札が残されているため、少なくとも、その頃より講の存在があったことがわかる。また、この木札により、講員は当番などの順番を認識していたと考えられる。

木札によると、もともとは五軒で構成されていたようであるが、現在、二軒の講員によって維持・継承されている。木札に書かれた、家の存在については、



現在何い知ることができなくなっている家がほとんどとなっている。

講員は、もとは農家で、浄土宗の檀家や浄土真宗寺院の門徒により構成されている。

講の年間行事については特になく、講の事で話し合いが必要であっても、家が近い為、すぐに話をすることができるといふ。また、練供養の知らせが護念院より届くと、初穂料を二軒分とりまとめて、当番の家が練初めの際に納めに行くという。

当番の家では、面を被る者とその随行者の計二名の確保を行なう。当人や、その家族や親戚、縁者などに都合をつけてもらい、練供養の当日を迎えることとなっている。

五位堂では「タイムレンゾ」の日にはボタ餅を作って親戚に配っていたという。また、練供養当日には、當麻寺門前に茹でたモズクガニが露店で売られていて印象に残っているという。

また、練供養に直接関わりはないが、当地でも「ダケノボリ」の風習があったという。昭和四十年〜昭和五十年頃には四月二十三日は、皆の休日日で、近くの土手などで巻寿司を食べながら休日を通じたという。

### 観音寺組

観音寺組は檀原市観音寺町を拠点とする講である。観音寺町は御所市と隣接しており、JR玉手駅の北東に位置する。



写真6 五位堂組の木札

観音寺組は、檀原市観音寺町と御所市、葛城市にまたいで講員を構成している。もともとは九軒で構成されていたというが、近年、休会する家や会費のみを支払っている家などがあり、現在は六軒の家で構成されるようになった。

講員は浄土宗の檀家が多いという。呉服屋などを営む家もあったというが、現在では勤めに出ている人が多いという。

観音寺組には、阿弥陀二十五菩薩来迎図の掛軸や講の歳入・歳出を記した帳面などが箱に入って残されている。

観音寺組は、毎年一回、集まる機会がある。毎年、三月の中ごろ（彼岸の前）に観音寺の組で集まり、阿弥陀二十五菩薩来迎図の掛軸を床の間に掛け、年長者を先達として「浄土勤行集」と「般若心経」を唱え拜んでいる。拜んだ後、



写真8 観音寺組に伝わる掛軸  
(阿弥陀二十五菩薩来迎図)



写真7 観音寺組 講の様子

本膳で食事をしていたというのが、近年では改革が進み、昆布茶、コーヒー、饅頭などでもてなしているという。この日に、講員たちは、護念院に納める初穂料を持ち寄ることになっている。

この行事の接待をする家が、その年の練供養の当番として、面を被るための段取りを行なう家となる。家の者が面を被る場合もあれば、興味を持っている親戚、縁者などが被る場合もあるという。

平成三十一年は、練供養会式が四月に開催されることに伴い、これまで三月に開催されていた講の行事は、前倒しで行なわれることになった。

平成三十一年は二月二十四日に行なわれた。午後一時頃に、講員の家に集まり、少し談話したのちに、床の間の阿弥陀二十五菩薩来迎図に向ってお経を唱えた。行事は約一時間程度で終了となった。

#### 田中組

田中組のある、檀原市田中は近鉄檀原神宮前駅より東方に位置する。

田中組の成立時期などが分かる史料が残されていないが、詳しいことは分かっていないが、講員のS氏によると、ある時期に、護念院と関わりがあった当地出身の者がいたという縁で講に入るようになったという。当初は三軒で講を回していたと講員は想像しているが、現在は六軒で維持・継承されている。この六軒は田中地域に古くからある家筋の家や、現在は、笛堂（葛城市）に在住する家がこの講に加入して



写真9 庚申講の様子

いるという。

講員は各自が面を被る年をおおよそ把握しており、当主が自ら面を被る場合や、その親戚・縁者などが被る場合がある。

講員が集まる機会は特に設けていないという。しかし、当地には、いくつかの庚申講が伝承されており、そのうちの一つの講が、この田中組の講員とほぼ一致している。この庚申講は定期的集まりを持っているため、何か話があれば、この機会が、折に触れ話をすることができるといふ。

#### 西南院

西南院は當麻寺を構成する塔頭の一つである。西南院は平成三十一年には當麻寺事務所としての役割を担っている。

西南院の年中行事としては、修正会、春秋の彼岸、施餓鬼、蓮華会（中之坊と隔年で担当）などがある。信徒総代が三名いるが、これらの行事は寺で行なうという。また、西南院は大師堂の管理及び、ここで行なう施餓鬼法要や、その準備についても、中之坊と交代で担当している。

練供養については、事務所を担当する寺として、打ち合わせの中心的役割を担うほか、雨天時の対応の決定などを担う。平成三十一年四月の練供養では、天候が良くなかったため、事務所として、護念院との協議がなされ、対応が求められた。

西南院も菩薩面を一面、担当している。面を被る者の基準は特になくないとい



写真10 蓮華会（供物）

い、知り合いなどに声をかけているという。

### 中之坊

中之坊は當麻寺塔頭のひとつで真言宗である。

寺の行事としては、毎月十六日の観音菩薩の月法要、一月の護摩法要、六月の大祭が大きな行事となっている。

當麻寺の練供養の当日は、西南院と隔年で楽人の手配を行なう。また同じく西南院と隔年で、本堂において、七月二十三日の蓮華会を執り行うことになっており、本堂に供える供物の準備を行なっている。

西南院や奥院などが面を担うようになったのは、いまから十年〜二十年位前であるというが、中之坊は、以前より、面の権利を持っていたという。

現在では、中之坊が兼務している置恩寺（葛城市寺口）の人びとに面を被ってもらっているという。このような形になって、十四〜十五年位が経過するという。例年、練供養には置恩寺の総代もしくは区長が面を被る事になっているという。なお、置恩寺には、四月二十五日（現在は二十五日に近い日曜日）に会式があり中之坊の住職が法要を執り行っているという。

### 奥院・念仏院

奥院は當麻寺を構成する塔頭の一つである。明治頃には浄土宗の大和本山として壇林（修行する場）の場であった。奥院は、同じく當麻寺塔頭で現在は念仏院の住職も兼ねており、練供養においては、二つの寺の役割を担当している。

練供養の際には、稚児の受付などを担うほか、通行止めなどの告知、音響設備を担当している。また、浄土方の楽人の手配を行なう。稚児の申し込みは一ヶ月前から行なっているという。

奥院の年中行事は法然上人の御忌法要、速夜、施餓鬼、春秋の彼岸法要であ

る。奥院には檀家総代が三名いるが、先述した行事の準備は基本的に寺で行なうという。

また、念仏院の行事として善導忌法要、施餓鬼などがあるという。念仏院にも檀家総代がいるが、寺で準備を行なうという。

練供養の面については、奥院は念仏院と合わせて、二面を担当している。依頼する基準は特に設けておらず、知り合いに声をかけたりするという。また、奥院には奉讃会があり、そこにも声をかけているという。

### 護念院

正式名称は當麻寺紫雲山護念院。當麻寺塔頭の浄土宗寺院である。

中将姫棲身旧跡として古くから信仰を集め、練供養会式に出る中将法如尼坐像を祀っている。練供養会式に用いられる菩薩面、菩薩装束、菩薩持物、菩薩光輪等の一切を管理し、菩薩講の取りまとめを行っている。

地域に関わる行事は、一月の初寄りに始まり、春秋彼岸会、練り初め、練供養、地藏盆、施餓鬼法要などである。

住職の代替わりに伴い、菩薩講員の意識の高揚と継承のため、様々な取組を行っている。菩薩講當麻組は、観音菩薩・勢至菩薩役の所作の継承のために、練供養会式の数ヶ月前から護念院に度々集まって練習をしている。

新菩薩面で会式を勤める事となった平成十七年からは、菩薩面の着脱と菩薩装束の着付け研修会も行うようになった。平成三十年からは、初めて菩薩役を勤める者に対しても研修会への参加を呼びかけ、実際に面をつけたり、会式を迎える日までの心づもりを学んだりする機会を設けている。

また、菩薩講各組の代表が集う寄り合いを、年に一、二回程度開いている。寄り合いでは各組の現状と課題を共有し、次世代への継承のための知恵を出し合っている。



写真11 地藏盆



写真12 護念院の施餓鬼法要

練供養開催日の変更については、平成二十九年三月の菩薩講員寄り合いでの話し合いを受け、當麻寺の協議を経て、平成三十一年より、練供養会式の日程が一ヶ月早められ、四月十四日に勤めることとなった。

練供養会式当日には、護念院の檀家は、朱印、塔婆書きなども含め、様々な手伝いを担う。また、住職の知り合いの浄土宗僧侶が、東京、大阪、神戸、京都から出仕したり、裏方として菩薩講員の縁のあるボランティアが来たりもしている。これらは、住職が取りまとめ、全体で練供養当日の流れを共有し、会式の運営がスムーズにいくようにしている。

また、當麻寺の練供養を広く周知し、理解を深めていただけるよう、講話・講演などの依頼があれば、護念院住職が中心となり、時には菩薩講員も共に出席しているという。

### 3 おわりに

以上のように、菩薩講の現状について述べてきた。

菩薩講は地域で庄屋をつとめた家など、地域に昔から続く家筋によって継承されてきた。

各組の人々は、年一回行なわれる練供養のために、組の維持・継承をしている。年間の集まりを持たない組が多くあるなかで、地元の組として練供養に深く関わっている當麻組のように、集まる機会を設けている組も見受けられた。

いずれの組も、菩薩講として面を被る事は大変名誉なことであるという。しかし、講員として中心的に動いている者は高齢化しており、費用や人的負担から次の代にスムーズに引き継ぐことが難しく、次世代への継承が課題としてあがっている組もある。すでに、染野や西辻にあった講が解散してしまった。

一方で、これまで、各地域の家が担っていたものを、集落全体として維持・継承していきたいという転換を図った地域もある。

近年、練供養は参拝者ではなく観光客が多くなってきたという印象が当地の人びとの感覚としてあるようである。

維持・継承の方法をはじめ、練供養までの準備の流れなどは、時代により変化している。しかし、練供養の諸準備を中心的に担っている當麻組や護念院、そして各組は行事を後世に伝えていく工夫を重ね、受け継いでいる。

\*

菩薩講の調査は、平成三十・三十一年度において上田喜江と猪岡叶英が共同で担当した。本章の執筆は、當麻組・勝根組・竹内組・長尾組・木戸組・疋田組・忍海組・薑組・磯壁三組・畑一組・畑二組・田中組・西南院・中之坊・奥院・念仏院を上田が担当し、今在家組・長尾組・木戸組・磯壁一組・磯壁三組を猪岡が担当した。また五位堂組・狐井組・観音寺組は上田と猪岡が、護念院は当院住職と猪岡が共同で執筆を担当した。なお、本章に掲載した表は上田、図は猪岡が作成した。写真は上田の撮影であるが、写真5は吉村君子の提供になる。その他、本章全体は上田が執筆・編集を担当した。

1 『当麻寺来迎会民俗資料緊急調査報告書』(元興寺仏教民俗資料研究所編、国書刊行会、一九七五年)

2 菅麻寺護念院HP (<http://tainadera-gonenin.or.jp/introduction/about-gonenin/>) ※参照。

(写真 上田喜江、文責 上田喜江・猪岡叶英)

## 第七章 當麻寺と當麻区の年中行事

### 1 當麻寺と當麻区の組織

**當麻寺** 當麻寺は、推古天皇二十年（六一二）に用明天皇の皇子である麻呂子親王が兄にあたる厩戸皇子（聖德太子）の指揮のもと、河内国山田郷に一寺を建立し、そこに丈六の弥勒仏を安置し、萬法藏院禪林寺を創建したことにほじまるとされる。そののち、麻呂子親王の孫にあたる當麻国見が役小角練行の地に遷し、天武天皇九年（白鳳九年）（六八二）に起工、同十六年に金堂、講堂、千手堂、東西両塔などが完成し、百済の惠灌僧正が導師となって、諸堂諸仏の供養を修し、寺号を當麻寺とあらためたことが同寺のはじまりとされている。

当初は三論宗であったが、空海の参籠により、真言宗となったとされる。また鎌倉時代には法然の弟子であった証空が、當麻曼荼羅に傾注し、當麻曼荼羅が新興の浄土宗によって広められていった。応安三年（一三七〇）には浄土宗の総本山である知恩院が奥院を建立し、當麻寺は真言宗、當麻寺奥院は浄土宗となり、現在まで二つの宗派が共存している。現在真言宗の中之坊、西南院、松室院、不動院、竹之坊、浄土宗の念仏院、護念院、来迎院、極楽院、奥院、千仏院、宗胤院、紫雲院の塔頭が存在している。また當麻寺本堂（曼荼羅堂）の管理は真言宗と浄土宗の兼帯で行なわれており、それ以外の堂宇は真言宗が管理している。なお同寺の住職は一年任期で真言宗と浄土宗の塔頭の住職が交互に就任している。

**當麻区** 當麻区は西から順に北之門院内、薬師院内、奥院内、上院内、中院内、下院内、大橋院内、地藏町院内、四辻院内、平田院内の十院内で構成され、それぞれ當麻方、大橋方、中村方の三地区に分かれていた。近年区の人口が増加傾向にあり、自治会の協議会に県道三六号が完成した平成二十九年（二〇一七）から新たに田室院内、一丁目院内、二丁目院内、三丁目院内が加わっている。

それぞれの院内の範囲は地蔵がある場所で分けられている。区内に神社は三社あり、當麻区は當麻寺門前の天満宮を管理している。また、平田院内の春日神社、大橋院内の春日神社はそれぞれ院内で管理している。

當麻区は全戸数約七二〇軒、約二〇〇〇人が住んでいる。区長（四年任期）を中心に副区長（現在不在・通常は次期区長）、会計の三役が中心となる。この三役とともに各院内から一名協議員が加わり協議会を行なっている。現在新たに加わった院内からは一丁目院内のみが協議員を出している。協議会は毎月一回行なわれており、とくに毎年一月に会計報告を協議会で行なっている。その協議会では区の協議員の改選も行なわれる。

また区では秋祭りの地車曳行を行なっている。地車は区の保有となっており、地車の維持費は区が出すことになっている。平成二十八年に岸和田市の大下工務店で文化庁の助成金によって地車の大修理を行なっている。

**天神講** 区内の天満宮の氏子組織であり、かつては「六十人講」と呼ばれていた。同講では七月二十三日に注連縄を二本製作し、トウヤの門口に付け替える行事が行なわれていた。講は一軒につき一人参加することになっており、かつては六〇軒の家が同講に入っていた。また、その講のなかから籤で二軒のトウヤを決め、御神酒方と御膳方を選任し、当日天神社の神前に供える御供を用意することになっていた。しかし、人口の減少により、講に入っている軒数が三〇軒となっており、またトウヤ制度も平成三十年を最後に終了し、現在は講員総出の行事となって継承されている。

**當麻講** 當麻区には、當麻寺での練供養に當麻菩薩講として参加している。當麻講では三面が割り当てられ、一班にあたる北之内院内、薬師院内、奥院内、上院内で一面、中院内、下院内、大橋院内で一面、地藏町院内、四辻院内、平田院内、田室院内で一面を担当している。

**自警団** 区内の壮年によって月一回寄合を行なっている。秋祭りでは警備を担

当している。

**牡寿会(老人会)** 六〇歳以上で組織されており、毎朝学童の通学の防犯をになっている。

**婦人会** 現在解散している。

**若人会** 四五歳までの若者で結成されており、年に数回寄合を行ない、池の草刈り、また市の体育祭に参加している。

**青年団** 青年団は高校生から二、三歳で構成されている。また見習いとして中学生も参加する。(現在二名) 青年団は現在、秋祭りの地車曳行、月一回の天満宮の掃除、葛城市の一斉清掃に参加している。

また秋祭りでは地車を曳行する。五〇年以上前は女性物の長襦袢を着用していたが、現在は法被に変化している。秋祭りでは各家をまわり、伊勢音頭を歌い祝儀をもらっている。近年は南河内の影響をうけて、青年団の団長は二年が任期であった。

**当秋会** 青年団のOBで組織されており、青年団とともに秋祭りの地車曳行になっている。若人会兼任者もいる。

**水利組合** 大和用水の費用徴収のため組織化を検討している。

**防災組織** 山崩れ等の防止対策のため、組織化を検討している。

## 2 当麻寺と当麻区の年中行事

### (1) 当麻寺の年中行事

**護摩祈禱(中之坊)** 毎月一日中之坊では不動明王に祈願する法会として護摩祈禱が行なわれる。また役行者の秘薬「陀羅尼助」の祈禱も行なわれている。

**導き観音祈願会(中之坊)** 毎月十六日は、中将姫が導き観音に祈願をした日とされ、それにちなんで、中之坊では導き観音の宝前で祈願会が営まれる。堂内では声明が行なわれ、参拝者には香水加持の祈禱が執行される。また中之坊

では各月十六日の祈願会にあわせてさまざまな行事が行なわれ、一月は土砂加持法会として白砂に光明真言を唱え、如意宝珠の功德を込める「土砂加持法会」が行われる。追善供養の功德がある法会とされ、「先祖供養」、「所願成就」の法会である。また二月は釈迦の入滅の法会である常楽会、六月は中将姫の剃髪にあわせた中将姫髪供養会、そして十一月は茶筌供養会がそれぞれ行なわれ、昭和十一年(一九三六)に建立された茶筌塚にその灰が納められる。

**修正会・修二会** 毎年一月一日〜三日の午前中までは金堂、また六日の午前中まで講堂にて修正会が行なわれる。また二月四日から七日までは修二会が行なわれる。

**御忌大法要(奥院)** 二月二十四日、建暦二年(一一二二) 旧暦一月二十五日に没した浄土宗の開祖法然の忌日法要が行なわれる。奥院の「御忌大法要」では当山に納骨されている諸霊の供養・永代供養、ご先祖様の供養が行なわれる。また、この日には本尊法然上人坐像が特別開帳される。

**春・秋彼岸会** 三月と九月の春秋の彼岸の入りから結願までの一週間、当麻寺では彼岸会が行なわれる。

**練り初め(護念院)** 三月末の日曜日、当麻講を中心に護念院で練り初めが行なわれる。

**大般若経転読法会(西南院)** 四月第一日曜日、西南院では大般若教の転読が行なわれる。

**當麻寺聖衆来迎練供養会式** 四月十四日、護念院の當麻講を中心に聖衆来迎練供養会式が行なわれる。

**蓮華会(西南院・中之坊)** 西南院と中之坊が隔年で担当する。七月二十三日、曼荼羅堂内にはさまざまな野菜で作られた御供が隔年で西南院と中之坊により並べられ、蓮華会が行なわれる。また法会終了後、中之坊では中将姫が當麻曼荼羅を織り上げた日に因み、中之坊写仏道場の當麻曼荼羅でも法会が営まれる。



蓮華会で供えられた御供



中之坊での法会

**施餓鬼法要** 曼荼羅堂では毎年八月十五日、奥院では毎年八月二十五日に施餓鬼法要が執り行なわれる。

(2) 當麻区の年中行事

**出初式** 自警団が中心となって一月三日に出初式を行なっている。

**當麻寺聖衆来迎練供養会式** 毎年四月十四日(平成三十一年(二〇一九)から)、當麻区内の護念院檀家で結成されている當麻講を中心に同法会が行なわれる。

また同法会では、平成に入るまで當麻区の青年団が橋を組み立てていた。その頃は当日、中将姫の輿をかく役割をにない、また橋のまわりでは場所取りをし、観客に五〇円を徴収し、観覧席を設けていた。当時は団塊の世代を中心に五〇人以上がいた。しかし少子化や体力の低下、また仕事の休日との関係から平成に入ってから当麻建設が行なうようになった。

**二上山岳のぼり・當麻山口神社御田祭** 毎年四月二十三日午前一時から二上山美化促進協議会が主催となり、近隣市町村が後援となって同山の岳のぼりが行なわれている。この岳のぼりは當麻区をはじめとする周辺地域の水源である



二上山岳のぼり

二上山の恒例行事であったが、現在は同山の美化運動の一環として継続されている。

また、一四時三〇分、同山の麓にある當麻山口神社では、御田祭が行なわれる。當麻区をはじめ、近隣の農業関係者を中心に神事が行なわれる。そのうち境内で牛による犁による耕田から松葉を苗に見立てた田植え、そして稲刈りまでの所作を行ない、その年の豊作を予祝する行事である。

**天神講** 七月二十八日、かつては「六十人講」と呼ばれていた天神講が行なわ



當麻山口神社御田祭

れる。同講では注連縄を二本製作し、トウヤの門口に付け替える行事であり、講の行事として毎年行なわれてきた。講は一軒につき一人参加することになっ





天満宮でお祓いを受ける注連縄



天神講での注連縄の掛け替え

ており、かつては六〇軒の家が同講に入っていた。また、その講のなかから籤で二軒のトウヤを決め、御神酒方と御膳方を選任し、当日天神社の神前に供える御供を用意することになっていた。しかし、人口の減少により、講に入っている軒数が三〇軒となっており、またトウヤ制度も平成三十年を最後に終了し、現在は講員総出の行事となつて継承されている。トウヤ制度が解体されたため、掛け替える注連縄は古くなった注連縄から順に掛け替えることに変更されている。

七月二十八日、一三時三〇分、當麻公民館に講員が集合し、注連縄づくりが行なわれる。男性は藁を叩いてならし、女性は注連縄の上に付ける御幣を作成する。藁をならしたら絢つて注連縄を製作する。注連縄が完成すると注連縄に付ける藁製の紙垂を作成し、上部に御幣を取り付けて完成させる。これらは注連縄一本につきそれぞれ



當麻寺門前の地車



地車の曳行

れ三本取り付ける。一六時五〇分、天満宮にて注連縄の修祓が行なわれ、終了後公民館にもどつて直会となる。直会では習慣として西瓜が出される。直会終了後、古くなつた家の注連縄を取り換えて行事は終了する。

だんじりふれあいデー（當麻区夏まつり） 毎年七月第三日曜日、当秋会と青年団が主催となり、葛城市相撲館駐車場地車に子供たちが触れることができる行事が行なわれる。同イベントでは青年団による鳴り物体験のほか、子供たちが地車に乗ることもできる。

葛城市体育祭 毎年九月に葛城市主催の体育祭が行なわれており、當麻区の若人会が中心となつて参加している。

天満宮秋祭り 毎年十月第二土曜日・日曜日、天満宮の秋祭りが行なわれ、當麻区からも地車が出される。また近年「葛城だんじり祭り」として近隣各地の合同曳行も行なわれるようになってい。合



葛城だんじり祭り（葛城市役所当麻庁舎駐車場）

同曳行では當麻区のほか、勝根区、竹内区、長尾区、太田区の地車も葛城市役所當麻庁舎の駐車場に集結している。

秋祭りの練習は五月になるとはじまる。當麻区では、毎週火曜日と木曜日の一九時から二時まで、青年団による鳴り物の練習が行なわれる。かつての地車の駒の芯棒は檜の木で大工が山まで取りに行っていたが、平成二十八年に大下工務店で修理してから鉄の芯棒を使用している。

一日目 九時三〇分、けはや座となりの地車小屋（かつての小屋は墓の上にあった）から青年団によって地車が出される。青年団が伊勢音頭の音頭を取り天満宮にむけて出発する。當麻寺の参道の中程に地車が来たころ、囃しが代わり南河内の曳き唄に歌い替える。青年団が地車曳行中や門付けで歌っていた伊勢音頭は近年忘れられつつある。というのも南河内の曳き唄を取り入れたため、秋祭りではそちらが中心となっているためである。そのため榊井健一氏がかつて歌っていた伊勢音頭を青年団に近年伝承した（ブクのある家は避ける）。

天満宮に到着すると地車の前を下げ、拝礼をする。数度拝礼したのち、當麻寺の門前まで進む。門前では転回し、停車させる。

一〇時 青年団は地車の屋根に取りつける御幣をもらうため、天満宮に駆けつける。天満宮では祭礼前の修祓が宮司の高津氏によって行なわれる。修祓終了後、御幣が地車に取りつけられる。昼食をはさみ、午後から区内の曳行が行

なわれる。一九時一〇分から五〇分、長尾の地車と合流し、子供会主催のイベントが葛城市役所當麻庁舎で行なわれる。その後地車は當麻寺門前に駐め、一日目が終了する〔写真8・9〕。

二日目、一〇時、當麻寺門前を出発し、二〇時四〇分に地車小屋に納庫するまで、三回の町内曳行を行なう。

数年前から葛城市役所當麻庁舎前で近隣地域の地車（當麻区、勝根区、竹内区、長尾区、太田区）とともに二日目の一三時五五分からパレードを行なっている。曳行形態はそれぞれ異なっており、囃しも区によってさまざまである〔写真11〕。

**當麻山神社新嘗祭** 毎年十一月二十三日新穀を奉納し、新嘗祭を行なっている。

**その他** 区の盆踊りや映画の上映などが當麻寺でかつては行なわれていた。

（吉村旭輝）

## 第八章 當麻寺練供養における雅楽の歴史と現状

### 1 はじめに

各地でおこなわれる練供養では法要の楽として、また来迎の楽として雅楽が用いられてきた。そして、来迎する菩薩たちはさまざまな雅楽器を手に持ち、奏楽によって浄土へと導く極楽往生の光景が描かれる。當麻寺の練供養における音楽も、雅楽による付楽が主となる。現在の當麻寺練供養で奏楽を務める楽人は、真言方（中之坊、西南院）、浄土方（奥院）それぞれによって手配され、練供養行事において演奏する場面や役割にも違いがみられる。本稿では、現在の練供養の中で雅楽がどのように用いられているか、また練供養における音楽について報告する。

### 2 真言方の楽

練供養の開始にあたっては、本堂にて真言方による読経法要が営まれる。こ



写真1 現在の花筵場



写真2 昔の花筵場（左手奥）

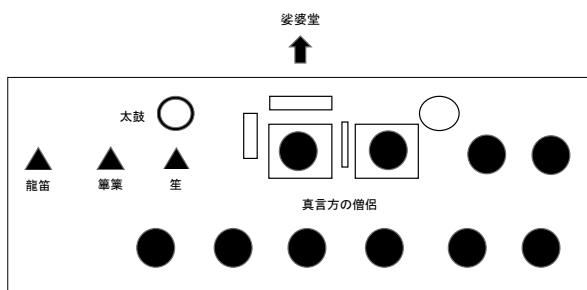


図1 花筵場内の配置

の法要をおこなう場所を「花筵場<sup>かえんば</sup>」と呼ぶ「写真1」。花筵場とは、曼荼羅堂（本堂）左側の縁に練供養のために設置される仮設の張り出し舞台のことである。昔は来迎橋同様に青年団によって組み立てられていたが、人手不足により現在では業者が組み立てをおこなっている。練供養において、いつの頃からこの花筵場が設置されるようになったかは未詳であるが、明治から大正頃と推定される古写真<sup>2</sup>にも花筵場の存在が確認できる「写真2」。雨天の場合、菩薩役は来迎橋を渡らずに本堂周辺の縁を一周することから、花筵場は取り外される事になっている。

真言方の楽人は、この花筵場において楽を奏する「図1」。『當麻村誌』によると、練供養においては花筵場で笙と笛の音色が響いた後、来迎橋でのお渡りが開始されるとの記述が確認できる。先に挙げた古写真にも、花筵場に置かれた楽太鼓（釣太鼓）が確認できることから、花筵場における奏楽は練供養において重要な音楽要素であったと考えられる。現在の花筵場には曼荼羅堂で保管している楽太鼓が置かれ、その後ろに笙、箏、龍笛三名の楽人が着座する「写真3」。この楽太鼓の年代は未詳だが、太鼓は塗り替えをするなどして長年使用している「写真4」。昭和五十八年（一九八三）の映像資料<sup>3</sup>にも、同じ枠形の楽太鼓が花筵場に置



写真3 真言方の楽人



写真4 楽太鼓

かれていることが確認でき、昭和の頃から同じ楽器が使用されていると思われる。かつては鉦鼓も使用されていたが、現在は使われていない。<sup>4</sup>

真言方の法要は、當麻寺の塔頭（子院）である中之坊、西南院によつ

て執行されるが、当番は二つの塔頭が隔年で務めるため、楽人の手配もその年の当番の塔頭がおこなう。現在の楽人は、広陵町極楽寺の住職一名と融通念仏宗の住職・僧侶二名で構成され、内二名は三十五年ほど前から参仕している。楽人の取りまとは極楽寺の住職がおこなう。

かつては真言方と所縁のある香芝市磯壁の住職に依頼していたが、高齢などの理由により参仕が難しくなった為、現在楽人を務めている極楽寺の先代住職の頃より新たに楽人としての参仕を依頼することになったという。楽人への依頼はその年の当番の塔頭が、練り供養の一ヶ月前に極楽寺の住職に電話にて依頼する。奏楽の際の曲目については、楽人に一任されている。中之坊が当番の年は、中之坊の住職が来迎橋を渡って曼荼羅堂へ入る際、楽人も一緒に橋を渡って花筵場へ向かう。西南院が当番の年は、楽人は西南院僧侶とともに曼荼羅堂の後戸から花筵場に着座した状態で、来迎橋を渡り曼荼羅堂へ入る中之坊僧侶の到着を待つ。

真言方の楽人による奏楽は、次のとおりである。<sup>5</sup>

- ①内陣で浄土方の読経が始まる。花筵場に真言方の僧侶が着座。
- ②内陣での浄土方の読経法要終了後、花筵場で真言方の読経が開始。
- ③浄土方の僧侶、楽人が曼荼羅堂から娑婆堂へのお渡りを開始する際、花筵場で《皇尊急》を奏楽。この間、浄土方の楽人も同じタイミングで奏楽を

おこなうことから、曼荼羅堂では真言、浄土それぞれの雅楽が鳴り響く。<sup>6</sup> 奏を止めるタイミングは真言方僧侶の合図に合わせ、奏が終わると再び真言方の読経法要が始まる。

④真言方の読経が終わると《老君子》を奏楽。菩薩が曼荼羅堂を出発するとともに奏を止める。

⑤真言方の読経が始まる。真言方が終わると、娑婆堂において浄土方の読経が始まる。

⑥花筵場では真言方による「理趣経」が始まる。

⑦「理趣経」が終了すると、真言方の僧侶たちは花筵場を退出する。楽人は花筵場に留まる。

⑧観音菩薩が金堂付近に着くと《抜頭》を奏楽。普賢菩薩が金堂を過ぎる頃に止手となる。

⑨稚児が金堂付近に着くと《陪臚》を奏楽。浄土方の僧侶が金堂付近に着くと止手となる。

### 3 浄土方の楽

浄土方の雅楽は来迎の際の楽として用いられており、浄土方僧侶の後に続いて曼荼羅堂から娑婆堂へ渡る際と娑婆堂から曼荼羅堂へ還る際に、それぞれ奏をしながら来迎橋を歩く。楽人を務めるのは、奈良葛城楽所雅遊会（昭和六十三年設立）である「写真5」<sup>7</sup>。会員には葛城周辺のメンバーを中心として、僧侶の方も多く在籍している。練供養へは平成元年（一九八九）より参仕を始める。それまで浄土方ではテープ音源の雅楽を流すのみであったが、生音での奏楽が良いという事になり、奥院住職の親戚である当会代表に依頼があった。それまで楽人が来迎橋を奏楽して渡る形式はなかったが、雅遊会の参仕に伴ってお渡りの際に浄土方僧侶とともに来迎橋を渡る形になった「写真6」。楽人



写真5 浄土方の楽人



写真6 来迎橋上での道楽

の構成は笙、箏、龍笛の三管で毎年二十四名が参仕していたが、平成三十一年（二〇一九）から十名での参仕となっている。往きと還りのお渡りの際、来迎橋上で演奏するのは「行道楽」で曲目は毎年同じである。

#### 4 その他の音風景

現在の練供養には音響業者が入り、境内に設置された四箇所スピーカーから練供養の案内アナウンスや雰囲気演出するための音楽が流される。これは、曼茶羅堂から娑婆堂までの距離が長いので、雅楽や読経の音声は娑婆堂または曼茶羅堂にいる参拝客まで届かないという理由から導入されたものである。現在の音響業者は二十年ほど前から奥院が依頼しているもので、それ以前からテープ音源を流す事がおこなわれていたという。音響業者は、娑婆堂内における護念院の読経をマイクで拾う、お渡りの中で音源を流す、練供養開始前の案内アナウンス音声等を流す等の仕事を請け負っている。練供養のどのタイミングでアナウンス、音源を流すかは奥院が決めた次第に準じており、練供養が始ま

ると必要に応じて奥院からの合図によって音源を流す。PAブースは娑婆堂脇に設置される。

お渡りが始まると、稚児が曼茶羅堂を出発する際に雅楽のCD音源が流される（曲目の指示は特になし。収録曲の中からランダムで流す）。花筵場で演奏される真言方の雅楽、曼茶羅堂を出発する浄土方の雅楽とともに生音による演奏であることから、極楽堂から離れた講堂や娑婆堂付近にいる参拝客にもお渡りの開始を知らせる、お渡りの雰囲気を感じさせるといった目的をもつ。そのため、浄土方の楽人が娑婆堂付近に来るとCD音源の方は次第に音量を下げて止めるよう指示が出されている。また還りのお渡りの際も、菩薩が娑婆堂を出発する際には「理趣経」と雅楽がスピーカーから流される。本来、理趣経は真言方の僧侶らによって花筵場で唱えられるものであるが、その声が遠く離れた娑婆堂まで届かないという理由から、娑婆堂脇のPAブースから理趣経のテープ音源が流されている。

その他にも、菩薩が娑婆堂を出て曼茶羅堂へ還る際にはヒーリングミュージックがBGMとして流され、中将姫の輿が曼茶羅堂へ還るまで終始流される。これら業者によるBGMの音風景は近年になって新たに加えられたものであるが、練供養における音楽的要素（音風景）として興味深い。

過去の映像記録や資料によると、本来の當麻寺練供養における楽は長い間、花筵場で奏される雅楽のみであったと考えられる。その楽は、読経法要の合同や菩薩が来迎橋を渡る際に奏される付楽の役割であるため、練供養において終始音楽が付随している訳ではなかった。また、かつて當麻寺練供養ではお渡りの時間を公表していなかった事から、参拝客にとっては花筵場で奏される雅楽の音によってお渡りの開始を知る、合図の役割をも果たしていたと考えられる。しかし近年では、来迎の際に無音の状態を無くしたいという意図から、浄土方

の楽人や業者によるBGMが流されるなど練供養における音風景に変化が生じている。

- 1 『當麻村誌』(当麻村教育委員会、一九五六年)によると、「真言宗派(中之坊、西南院)の僧が極楽堂の縁側に設けられた楽人席で勤行するため、来迎橋を渡って本堂へ赴く」とある。『當麻村誌』に記されている楽人席というのが花筵場を指すと思われる。花筵場に関する資料は未見であるが、練供養において真言方が着座する場所を「カエンバ」と呼んでいる。聞き取り調査では「火焰場」や「仮縁場」とする話もあり、『当麻寺来迎会民俗資料緊急調査報告書』(元興寺仏教民俗資料研究所編、国書刊行会、一九七五年)において「火焰場」と表記されているが、ここで勤行を勤める中之坊によると「花筵場」という表記である旨の説明がなされたため、これに準拠した。
- 2 資料には年代が記載されておらず、明治から大正にかけての写真と推測されるが不詳。
- 3 『大系 日本歴史と芸能 第二巻 古代仏教の荘厳 国家・権力・音』(平凡社、一九九〇年)に付録される映像資料に基づく。
- 4 鉦鼓は現在、西南院によって保管されている。「当麻寺の練供養」(祭礼行事・奈良県)(高橋秀雄・鹿谷勲編、桜楓社、一九九一年)に掲載されている写真では、火焰場に置かれた楽太鼓と鉦鼓が確認できる。
- 5 曲目は二〇一七年調査時のもの。曲目は年によって異なるため固定ではない。また、雨天の場合は次第が異なるため、楽の入る場面も異なる。
- 6 真言方と浄土方で曲目は異なる。そのため曼荼羅堂では、真言方の楽と浄土方の楽の音色がそれぞれ響く音空間を生み出している。
- 7 現在の所在地(事務局)は奈良県御所市栖原である。
- 8 デジタル音源を使用するのは、曼荼羅堂から娑婆堂までの距離が長いいため、ワイヤレスマイクで音を拾って境内中に流すことが技術的に難しく、テープやCDといった収録音源を流しているという。
- 9 昭和六十年代来迎橋の掛け替えを行った際、音楽についても見直しがおこなわれて変更された。

(出口実紀)

表1 當麻寺練供養における楽の次第

次第	真言方の楽人	浄土方の楽人	PA
真言方僧侶、火焰場に着座 曼荼羅堂内陣において浄土方の読経法要が開始 内陣での読経終了 お渡り開始	<p>火焰場に着座 (中之坊が当番の年は一緒に 来迎橋を渡って曼荼羅堂に入る)</p> <p>奏楽《皇響急》</p> <p>↓</p> <p>真言方僧侶の合図で(浄土方 僧侶が金堂付近に到着すると)楽を止める</p>	<p>曼荼羅堂外陣において《行道 楽》を吹き出し、浄土方僧侶の 後に続いて奏しながら来迎橋 を渡る</p> <p>↓</p> <p>娑婆堂に到着すると、楽を止 める</p>	<p>練供養開始のアナウ ンスを流す</p> <p>雅楽BGM</p> <p>↓</p> <p>浄土方の楽人が娑婆堂 に近づくとフェードアウト</p>
真言方僧侶が大鉦を鳴らす 真言方の読経法要開始 菩薩が曼荼羅堂を出発する	<p>観音菩薩が曼荼羅堂を出発 する際に《老君子》を奏楽</p> <p>↓</p> <p>僧侶の合図で(観音菩薩が金 堂付近に着くと)奏楽止める</p>		
菩薩が娑婆堂に到着する と読経始まる	<p>読経終わりとともに奏楽《陪 臚》、太鼓打つ</p> <p>↓</p> <p>奏楽止め この後、観音菩薩、勢至菩 薩、普賢菩薩が金堂付近に着 くと太鼓を打つ</p>		
《陪臚》奏楽の間に住職た ちは火焰場を退出 菩薩が娑婆堂を出発	<p>菩薩が金堂付近に来ると奏楽 《抜頭》</p> <p>↓</p> <p>菩薩全員が金堂を過ぎると楽 を止める 稚児が金堂付近に来ると奏楽 《陪臚》</p> <p>↓</p> <p>中将姫の輿が曼荼羅堂へ戻 るまで、太鼓を打つ</p>	<p>娑婆堂から出発。《行道楽》を 奏す。曼荼羅堂に到着すると 楽を止める</p> <p>↓</p>	<p>雅楽BGM</p> <p>↓</p> <p>雅楽BGM止める。 ヒーリングミュージックB GM</p>

## 第九章 當麻寺来迎会和讚の旋律様式と 迎講音楽前史

浄土三部経には、随所に西方極楽世界の音楽描写であったり、その音楽を想い想像することの功德が説かれる。『無量壽經』卷上（康僧鎧訳）には、阿弥陀の無量寿国に「自然萬種伎楽」があり、その楽・聲は「無非法音、清揚哀亮、微妙和雅」という。こんにち、當麻寺来迎会（練供養）の一日のなかで鳴り響く楽聲は、梵語讚、読経、和讚、念仏、雅楽、電子音楽、演歌（会式開始前）にいたるまで多岐にわたり、まさに西方浄土から届く万種の楽聲を具現化している。

近現代における来迎会の音楽については、第一部第八章で出口実紀が報告し、この報告（第九章）では、主として、近代より前から受け継がれてきたと思われる各種「讚」の旋律構造とその時代様式および来迎会黎明期から近世までの来迎会楽聲の様相について述べる。

### 1 當麻寺来迎会の「百日間法則」

當麻寺来迎会の楽聲で、菩薩役が来迎橋を渡る前、曼荼羅堂内においては、真言宗方僧侶が法要を行う。こんにちでは〈前讚（四智梵語讚）—樂（雅楽）—『理趣經』讀経—樂—（後讚（佛讚））〉が唱えられているが、真言宗塔頭の中之坊・西南院には独自の「百日間法則」や来迎会用「伽陀（偈頌）」が伝わっている。一方、観音・勢至菩薩が娑婆堂に渡りきって法如（中将姫）を蓮台に乗せる一連の所作の際に誦誦されるのが、浄土宗塔頭護念院住職による〈和讚（来迎和讚）〉で、どちらも當麻寺に伝わる独特の聲明である。

「百日間之法則」の百日間とは、四月十五日の来迎会から七月二十二〜二十三日の蓮華会（中将姫が曼荼羅を織り上げた日にちなむ法会）までの約百日間

をいい、来迎会と蓮華会等において曼荼羅堂内で誦誦される。ただし現在では蓮華会等で唱えられ、来迎会では法則の代わりに『理趣經』を唱えている。曼荼羅堂内の法要に参加する、中之坊と西南院以外の僧侶も唱和できるようにとの配慮から変更がなされた。「百日間之法則」は、〈百日偈〉〈舍利和讚〉〈舍利礼〉〈廻向文〉からなっている。次に西南院蔵『秘密袋』末卷（明治頃か）を翻刻しその偈句・詞句を示す（墨譜省略）「図1」。

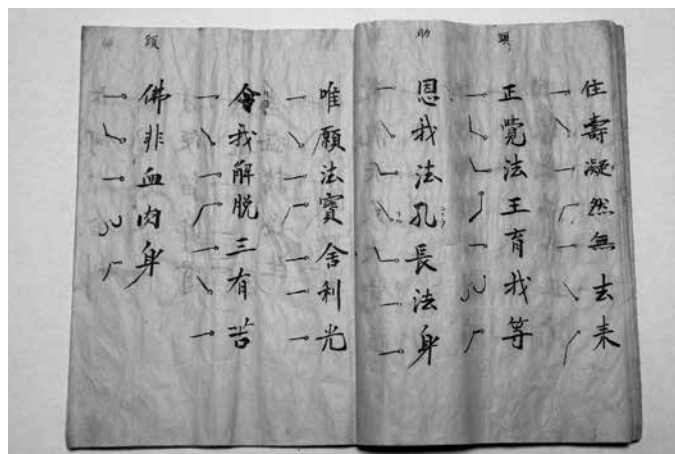


図1 『秘密袋』末卷より〈百日偈〉墨譜（部分） 當麻寺西南院蔵

(百日偈)

頭	敬礼天人大覺尊	助	恒沙福智皆圓滿	因縁果滿成正覺	住壽凝然無去來
頭	正覺法王育我等	助	恩我法孔長法身	唯願法寶舍利光	令我解脱三有苦
頭	佛非血肉身	助	云何有舍利	方便留身骨	為益諸衆生
頭	如来定智慧	助	依正而示現	佛身及舍利	變化難思議
頭	若人供養佛	助	及供養舍利	如是二人福	正等無有異
頭	願我臨欲命終時	助	盡除一切諸障得	面見彼佛阿弥陀	速得往生安樂國
頭	南無釋迦牟尼佛	助	南無釋迦牟尼佛	南無釋迦牟尼佛	
頭	南無阿弥陀佛	助	南無阿弥陀佛	南無阿弥陀佛	



舍利和讃

頭

沙羅林中圓寂塔 三世ノ諸佛コトゴトク 非滅ナレドモ滅アリト

示現シタモウ所ナリ 供戸那城ニハ西北方 拔提河ニハ西ノ岸シ

沙羅雙樹ノ間ニテ 純陀ガ供養ヲ請ム給フ 菩薩現聖天人衆

十方界ヨリ飛来リ 供養雲海ミチミチテ 十二由旬ヒマモナシ

世間モトヨリ常ニナシ 是ヲゾ生死ノ法ト云フ 生ヲモ滅ヲモ滅シヲエ

寂滅ナルホゾ樂トスル 一切衆生コトゴトク 常住佛性ソナハレリ

佛ハ常ニ世ニイマス 實ニハ反易マシマサズ 二月十五ノ朝ヨリ

是等ノ妙法説ヲエテ 漸ク中夜ニイタルホド 頭ヲ北ニゾ臥シタマウ

娑婆ノ一化ハ是ノ時ニ 永クヘダタリタマヒニキ 梅檀煙リツキヲエテ

舍利ヲ分テサリニキ 恵日ステニクレヲエテ 生死ノ長夜闇深シ

何成ル便ヲ得テシカバ 輪廻ノ里ヲハ離ルベキ

如来證涅槃 永斷於生死 若有至心聽 常得無量樂

舍利礼 七反

一心頂礼 萬德圓滿 釈迦如来 真身舍利 法身法界塔婆起 我等礼敬

為我現身 入我我入 佛加持故 我證菩提 以佛神力 居利益衆生

發菩提心 修菩薩行 同入圓寂 平等大智 今將頂礼

(廻向文)

願以此功德 普及於一切 我等與衆生 皆無成佛道

なかでも〈百日偈〉は當麻寺独特の節回しによる偈頌である。これは古くから舍利講の伽陀として用いられたもので、敬礼天人大覺尊の文は『大乘本生心地觀經』序品の引用で、宗派を超えてとなえられる偈である。正覺法王育我等の文は『大涅槃經』遺教品、佛非血肉身の文は『金光明最勝王經』序品からの引用である〔図1〕。〈舍利和讃〉は、高野山常樂會（涅槃會）において諷誦さ

れる〈舍利講和讃〉と同文で、(現行の)節回しも概ね同じではあるというが、細部において當麻寺独特という。全体としては、(略式的な)舍利講式の内容であり、浄土曼荼羅や女人往生などには直接には触れていないが、〈百日偈〉末文の「願我臨欲命終時」以下の文は、『大方廣佛華嚴經』卷第四十の偈の一部で、源信が『往生要集』中に引用している偈であり、来迎會・蓮華會にふさわしい内容である。

なお、「百日問之法則」は、こんにちなお秘儀とされ、蓮華會においても扉を締め切り非公開でとなえられる。したがって本報告においても、詞句の紹介のみにとどめておく。

2 當麻寺来迎會〈来迎和讃〉の詞句

曼荼羅堂から来迎橋を下ってきた観音菩薩・勢至菩薩が、法如(中将姫像)の待つ娑婆堂に近づいてきたところで、〈来迎和讃〉(単に和讃とも呼ばれる)の諷誦がはじまる。娑婆堂内での、観音・勢至が法如(の化生坐像)を蓮台にのせ、頭をなでる仕草をする一連の所作は、和讃の詞句に則して行われる。この和讃は、同寺護念院の住職が代々受け継いでいる(以下、他の来迎讃との混同を避けるため娑婆堂和讃と仮称する)。

娑婆堂和讃の詞句は、恵心僧都源信の作とされている〈来迎讃〉の詞句を抜粋したものである。伝源信作〈来迎讃〉については、多屋頼俊『和讃史概説』(九九〜一〇五頁)に詳しいので、しばらくこの書を援用しながら解説する。

法然門下の長西(一一四八〜一二六六)が著した『浄土依憑經論章疏目錄(長西録)』にみえる「来迎讃一卷」<sup>(源信)</sup>が、〈来迎讃〉という名称と、源信作詞であることがわかる初出である。源信没後約二〇〇年後のこの記述のみから、源信作と断定することに、多屋は、「平安期の作であらう事は容易に推測し得る」もので「源信僧都の作と云ふ事は略信用してもい、様に思はれる」としながら

も、「此の和讃を未だ平安朝の文献に見出し得ない點に若干の不安を感じてゐる」と述べている（一〇四頁）。武石彰夫は、『法然上人行狀繪圖』卷四十六「聖光上人伝」、『長西録』、『一遍聖絵』第六の武蔵国あぢさか入道入水譚から、来迎讚が法然の教団において広く諷誦されていたことを指摘している（二〇一頁）。源信作の真偽はさておき、法然や聖光、長西、一遍が生きた時代にはすでに成立しており、それ以前に遡るのは確実であろう。和讃の先駆をなす作品の一つとしても差し支えないのではなからうか。

〈来迎讚〉の詞句は、古来さまざまに語り継がれ、また後続する多くの和讃にも引用されるなど、宗派をこえて膾炙されたためであろうか、その詞句も類本、伝承により異同がある。数ある詞句本のなかで、多屋が原形に近いものとした『天台霞標』収録の詞句を次にあげる（句番号を示す○数字は筆者、原文は宣明書き）。

- |             |             |             |
|-------------|-------------|-------------|
| ① 攝取不捨の光明は  | ② 念する所を照すなり | ③ 觀音勢至の來迎は  |
| ④ 聲を尋て迎ふなり  | ⑤ 娑婆界をば可レ厭  | ⑥ 厭はば苦海を度なむ |
| ⑦ 安養界を可レ欣   | ⑧ 願はば浄土に可レ生 | ⑨ 草の庵の静にて   |
| ⑩ 八功德池に心澄   | ⑪ 夕の嵐無レ音て   | ⑫ 七重行樹に度なり  |
| ⑬ 臨命終の時至り   | ⑭ 正念不レ違て向レ西 | ⑮ 傾レ頭け合レ手せ  |
| ⑯ 彌よ浄土を欣求せむ | ⑰ 聞ば西方界の空   | ⑱ 伎楽歌詠風かなり  |
| ⑲ 見ば緑の山の端に  | ⑳ 光雲遙に輝けり   | ㉑ 是時信心安くして  |
| ㉒ 念佛三昧現前し   | ㉓ 毫光我身を照しつ  | ㉔ 無始の罪障消滅す  |
| ㉕ 光雲漸く近付て   | ㉖ 瞻仰すれば彌陀如來 | ㉗ 相好圓滿し給ひて  |
| ㉘ 金仙王の如くなり  | ㉙ 烏瑟高く顯れて   | ㉚ 晴の空に綠なり   |
| ㉛ 白毫右に旋て    | ㉜ 眉の間に輝けり   | ㉝ 管絃歌舞の菩薩は  |
| ㉞ 雲に袖を翻し    | ㉟ 持幡供華の莊嚴は  | ㊱ 信レ風て亂れたり  |

- |               |              |              |
|---------------|--------------|--------------|
| ③⑦ 觀音勢至諸薩埵    | ③⑧ 光の中に充滿り   | ③⑨ 各各威徳顯れて   |
| ④⑩ 聲聲行者を賛給ふ   | ④① 眼に滿る慈悲の色  | ④② 落る涙も不レ止   |
| ④③ 耳に聞ゆる法の聲   | ④④ 歡喜の心幾そ    | ④⑤ 即ち紫雲鬘鬘て   |
| ④⑥ 柴の扇に旋り     | ④⑦ 恒沙の衆會諸共に  | ④⑧ 前後左右に下給ふ  |
| ④⑨ 菴の上には諸化佛   | ④⑩ 星を連ねて影向し  | ④⑪ 苔の庭には諸聖衆  |
| ④⑫ 光を竝て長跪せり   | ④⑬ 伎楽の菩薩も是時に | ④⑭ 踊躍歡喜安からず  |
| ④⑮ 絲竹の調雲を分    | ④⑯ 徘徊妝地を照す   | ④⑰ 時に大悲觀世音   |
| ④⑱ 漸く歩み近づきて   | ④⑲ 紫磨金の軀を曲て  | ④⑳ 蓮臺傾寄給ふ    |
| ④㉑ 次に勢至大薩埵    | ④㉒ 聖衆同時に讚歎し  | ④㉓ 大乘智慧の手を伸て |
| ④㉔ 行者の頭を摩給ふ   | ④㉕ 終に引接し給ひて  | ④㉖ 金蓮臺に乗給ふ   |
| ④㉗ 輪回生死の舊里    | ④㉘ 是時永くへ隔りぬ  | ④㉙ 即ち金蓮臺に乗   |
| ④㉚ 佛の後に隨ひて    | ④㉛ 須臾の間を經程に  | ④㉜ 安養浄土に往生す  |
| ④㉝ 昔は大悲の利益を   | ④㉞ 纔に傳聞しかど   | ④㉟ 今は彌陀の引接を  |
| ④㊱ 心ままに蒙れり    | ④㊲ 然るに彌陀の浄土は | ④㊳ 快樂不退の處にて  |
| ④㊴ 壽命も無量に長ければ | ④㊵ 樂盡る事そ無き   | ④㊶ 三十二相具りて   |
| ④㊷ 莊嚴端正殊妙なり   | ④㊸ 六通三明悟得て   | ④㊹ 心の如く自在なり  |
| ④㊺ 上は有頂の雲のうへ  | ④㊻ 下は無間の底までも | ④㊼ 苦海の群類悉く   |
| ④㊽ 利益普く施せり    | ④㊾ 願くは彌陀觀世音  | ④㊿ 行者の誓ひを愍念し |
| ④㊿ 大悲の誓願誤たす   | ④㊿ 來迎引接垂給へ   | ④㊿ 願くは此の功徳を  |
| ④㊿ 普く衆生に施して   | ④㊿ 同く心を發しつ   | ④㊿ 安樂國に往生せむ  |
| ④㊿ 上來功徳 回施法界  | ④㊿ 自他平等 滅罪生善 | ④㊿ 臨命終時 面見彼佛 |
| ④㊿ 速証菩提       | ④㊿ 共生極樂      |              |
- 全九十六句のなかで、現在、娑婆堂和讃で諷誦される句は、傍線の第①～④句、第⑤⑦～⑧句である（傍線部）。第①～④句は、念念の衆生攝取し捨てなむ仏衆生攝取不捨の浄土教

根本の教えを謳っており、第⑤⑦～⑥⑧句は、命終に臨む念仏行者のもとに観音菩薩・勢至菩薩が訪れて行者を蓮台にのせる場面でもっともドラマティックな部分である。この第⑤⑦～⑥⑧句にしたがって、実際に観音役・勢至役が一連の所作をする。

この和讃が、當麻来迎会においていつごろ採り入れられたのか、いまのところ窺い知る史料は見つかっていない。法然一派が好んで誦したのをはじめとして、古今通じて膾炙された和讃詞句の一つであったようである。現在に伝わっている他の例としては、時宗聲明の〈来迎讃〉（以下、時宗来迎讃）がある。

その博士譜が収められた文政期の版本『浄業和讃』の凡例には、「来迎讃ノ如キ古ヘハ願生ノ行者専ラ稱讃シケルニヤ往々諸傳ニ見ユ 然ル類本一二ニアラス」とあって、詞句の校合をしようにも、歌詞本がまた存在して困難であったことが述べられている。それはこの来迎讃の詞句が古今さまざまなフシにのせられて誦されてきたことを暗示している。現在の浄土宗吉水詠唱では、「来迎讃」詞句（一部）に松濤基（一九二二～二〇二〇）が作曲したものをうたっている。したがって、〈来迎讃〉の詞句のみをとりあげて、娑婆堂和讃の時代性を考察することは不可能である。そこで本報告では、（現行の）旋律構造から、娑婆堂和讃の時代性にせまってみたい。比較の対象として時宗〈来迎讃〉もとりあげる。

### 3 當麻寺〈来迎和讃〉の音階構造とその時代性

譜例1は、當麻寺護念院住職の葛本雅崇師による誦（平成三十年四月二十九日の練初め時）を、ピッチ、リズム、詞句の発音等を報告者が聴き取ったまま採譜したものである（譜中○囲み数字は、前掲の〈来迎讃〉の詞句番号に対応する）。娑婆堂和讃は、一つの短い旋律のリフレインに〈来迎讃〉の句をのせていくもので、後述の時宗〈来迎讃〉に比してシンプルな形式となっている。

テンポ・リズムについては、観音・勢至菩薩役の所作の進行をみながら唱えられるため、場合に依りてテンポの伸縮がある。譜例は護念院本堂外陣の限られたスペースで行われた練初めのもとに採譜したもので、観音・勢至の歩み寄る時間が短く、結果、第①～④句は速めのテンポとなっている。

娑婆堂和讃の反復フレーズは、譜例4（1）にあるように、十七音ほどの音進行である。このフレーズの構成音を音高順にならべると「ラシドレミ」となっていて、日本の歌謡のほとんどを席捲する五音音階、すなわち五音<sup>ごいん</sup>ではなく、西洋の短音階などと同じ七音音階、すなわち七声<sup>しちせい</sup>である。このような音階は、「西洋短音階」とほぼ同趣であり、近代西洋文化受容以降の歌謡にも盛んに取り入れられたが、実は中世以前の雅楽の旋律<sup>1</sup>においても特徴的な音階であった。

譜例2は、同じく源信の「来迎讃」詞句に節付けがなされた時宗聲明〈来迎讃〉である。當麻の娑婆堂和讃のようなリフレイン形式ではなく、「重」形式で句ごとに節回し<sup>2</sup>が異なり、かつ途中に念仏が挿入されて華やかに展開する。この譜例2は、『聲明大系』第四卷浄土に収録された音源<sup>3</sup>より、「念仏」の箇所を割愛した採譜であり、譜例4（2）はその構成音を音高順に並べたものである。當麻とは異なり、時宗のほうは、主な終止音であるd音を宮とする五音音階となっている。このように音階構成音の音程が主音から短3度―長2度―長2度―短3度となるような五音音階（ラからはじめるとラードレーミーソーラ）を、民族音楽学者の小泉文夫（一九二七～八三）は「民謡音階」と命名し（都節音階・律音階・民謡音階・沖繩音階の四種のうちのの一つ）、今ではそれが一般名称化しているが、鎌倉時代においてこのような音階は、「律の五音」の変種とされていた。

天台聲明の湛智（一一六三～一二三七）は、『聲明用心集』上巻のなかで、日本の神楽に用いられる音階に二種の「律の五音」があることを説いている。時宗〈来迎讃〉にみられる五音音階（いわゆる小泉の「民謡音階」）は、その

うちの商・羽を高め（反刎）にとる律の音階で、それらを低め（由）にとる場合は、小泉が命名した「律音階」に相当する。

■『聲明用心集』上巻にみる日本神楽の律の五音（e音を宮とした場合）

宮 e 商 f# 角 a 徵 b 羽 c# ↑商と羽を低め（由）にとる律の五音  
宮 e 商 g 角 a 徵 b 羽 d ↑商と羽を高め（反刎）にとる律の五音

このうち反刎型の律の五音は、鎌倉期において神楽にかぎらず他種の歌謡においても好まれたようである。譜例3は、平安末期の箏・琵琶・聲明の大家である藤原師長（一一三八〜九二）の箏譜『仁智要録』から唐楽盤渉調（越殿楽）ある藤原師長（一一三八〜九二）の箏譜『仁智要録』から唐楽盤渉調（越殿楽）譜（平調の調絃による）である。それと、元来器楽曲である（越殿楽）に仏教的歌詞をのせて詠った鈿阿（明忍房、一二六一〜一三三八）の（會殿楽）<sup>④</sup> 聲歌譜との、同期演奏を試みたものである。そして『仁智要録』と鈿阿聲歌譜それぞれの（越殿楽）の構成音を示したのが、譜例4（3）である。中国大陸舶来の器楽曲である（越殿楽）の音階構造は、箏譜（仁智要録）がしめすように、律の七声（七音音階）であるが、鈿阿の聲歌譜では、宮から長2度上の商（#）と、徵から長2度上の羽（C#）を使用せず、「反刎型の律の五音」化している。鎌倉期歌謡においては、原曲の音階構造を無視して「反刎型の律の五音」でうたうことが一つの流行であった可能性は高い。

ちなみに、（越殿楽）は、唐楽レパートリーのなかでもっとも短い曲で、三つのフレーズ（仮に甲・乙・丙とする）からなる。角調に転調して終止する丙フレーズを除いて甲乙二つのフレーズのみ用い、その反復に定型詞句をのせてうたうのが、この（會殿楽）<sup>⑤</sup> 聲歌譜で、今様の実態を伝える譜である。（現行の）娑婆堂和讃も一つのフレーズ反復に詞句をのせていくもので、その意味では今様の様である。

ところで、唐楽など器楽曲から旋律が転用された歌謡ジャンルとしては今様に先行する例として催馬楽があるが、その催馬楽の名手であった源資時が建久八年（一一九七）にまとめた『催馬楽略譜』をみてみよう。譜例4（4）は、同譜から律の（更衣）<sup>⑥</sup> 冒頭の音進行とその構成音である。その旋律構造をみると律の七声（七音音階）となっている。このような七声による旋律は、より雅楽（器楽）<sup>⑦</sup> 的で、より前時代的といえる。そして鎌倉期になると、あらゆる声楽ジャンルにおいて、（律曲は）日本的な反刎型の五音音階で詠われるようになるのである。譜例4（5）は（會殿楽）<sup>⑧</sup> 譜とおなじ鈿阿の書写になる『諸経要文伽陀集』より（舍利講伽陀）の音進行と音階構造であるが、やはりこれも日本的な反刎型の五音音階でうたわれていて、他の曲譜も同様となっている。

（現行の）時宗（来迎讃）<sup>⑨</sup> が、商・羽反刎型「律の五音」となっていることは（譜例4（2））、鎌倉期の歌謡の流行を反映したものである（ただし調声「独唱」の旋律の一部は、都節音階化しており、後世の影響も考えられる）。では、當麻寺の娑婆堂和讃の時代性は、どのように考えるべきか。器楽伴奏のない声楽の伝承であるから、音程のとり方などは千変万化である。（現行の）音進行のなかでただ一音でてくる商音（b音）<sup>⑩</sup> が、仮に半音上に変化したならば、商・羽反刎型の五音音階となってしまう。さしあたって現状の音階構造のみから判断すれば、平安後期ないし鎌倉初期ころの旋律様式といえよう。もちろんそれは断定不可能であるし、源信の生前にまで遡りうるかどうか、それも何とも言えないところである。

#### 4 迎講黎明期における讃と楽

さてここからは、来迎会の前身である「迎講」の歴史について、音楽的視点から探ってみよう。

経典にはさまざまな音聲による功德が説かれているが、大別すれば、楽聲を

佛に供養する（捧げる）ことによる功德（本報告では仮に楽聲供養と称す）と、浄土世界の楽聲を観想することによる功德（仮に楽聲観想と称す）とがある。そのうち楽聲供養の実践として発展したのが「管絃講」で管絃歌舞をとまなう往生講式である。これは主に『妙法蓮華經』方便品の文に基づく。

若使人作樂擊鼓吹角貝簫笛琴箏篪琵琶鏡銅鈸如是衆妙音

持以供養或以歡喜心歌唄頌佛德乃至一小音皆已成佛道

（若しくは人をして樂をなさせしめ、鼓を撃ち角・貝を吹き、簫・笛・琴・箏篪、琵琶・鏡・銅鈸、かくの如き衆の妙音を、盡く持つて、以て供養し、或いは歡喜の心を以て、歌唄して仏の徳を頌し、乃至一の小音をもつてせしも、皆已に仏道を成ぜり。）

一方の楽聲観想の典拠としては、『觀無量壽經』の水想観（第二観）や総観想（第六観）などがある。次は総観想の一文である。

衆寶國土一一界上有五百億寶樓閣其樓閣中有無量諸天作天伎樂又有樂器懸處虛空如天寶幢不鼓自鳴此衆音中皆說念佛法念比丘僧此想成已名為粗見極樂世界寶樹寶地寶池是為總觀想名第六觀

（衆寶の国土の一々の界上に五百億の宝樓閣有り。その樓閣の中に無量の諸天有りて、天の伎樂を為す。又、樂器有りて虚空に懸處し、天の宝幢の如く鼓たざるに自ずから鳴る。此の衆の音の中に皆、仏を念じ法を念じ比丘僧を念ずるを説く。此の想いを成じおわらば、名づけて「極樂世界の宝樹・宝地・宝地の粗見」と為す。是を総観想とし、第六観と名づく。）

こんにちの来迎会につながる「迎講」は、楽聲観想の実践の場であり、西方

極樂より届く楽聲をシミュレーションして観想の助けとするものにとらえることができるが、ところが、行者の臨終時に来迎する聖衆が樂器を奏するなどということは右記の經典には説かれていない。『觀無量壽經』九品往生には、来迎の様子を次のように描写している。

觀世音・大勢至、無數の菩薩とともに行者を讚嘆し其の心を勧進す。行者見おわりて歡喜踊躍し、自らその身を見れば金剛の台に乗れり。（上品上生より）<sup>7</sup>

命終の時に臨んで、阿弥陀仏、觀世音・大勢至、無量の大衆眷属とともに圍繞せられ紫金の台も持して、行者の前に至り、讚えて言いたもう。「法子よ、汝、大乘を行じ、第一義を解る。是故に我いま来たりて汝を迎接す」。千の化仏とともに、一時に手を授けたもう。行者自ら見れば紫金の台に坐せり。合掌叉手して諸仏を讚歎すれば一念の頃ほどに、すなわち彼の国の七宝の池中に生まれる。（上品中生より）<sup>8</sup>

『無量壽經』上には、浄土往生を願う行者の臨終時に、阿弥陀が<sup>（聖衆）</sup>大衆を伴って行者の前に現れ行者を圍繞すると説かれているが（第十九願）、そのとき大衆（聖衆）が樂器を手にして奏でるとは説かれていない。右の『觀無量壽經』の文においても樂器を奏でる聖衆の姿はない。しかし聲については、阿弥陀・觀音・勢至・多くの聖衆が、行者の前で「讚歎」し、また行者も諸仏を「讚歎」で返すとある。觀音勢至や聖衆眷属が来迎時に讚歎するのは、右のほか上品下生、中品上生と中生、下品上生と中生にあり、対して行者が讚歎するのは右の上品中生のほか中品中生（蓮華開敷ののち）がある。

右の上品中生の場合など、行者は紫金台にのることができてもその後合掌叉

手して諸仏を「讚歎」しなければならぬ。行者は自身が九品のどのランクに該当するのか事前に知りようがないから、臨命終時のあらゆる事態を想定した訓練が必要である。したがって日頃の修練に「讚歎」も必須で、臨終時に暗誦できるよう準備しておかなければならない。もちろん、聖衆来迎のシミュレーションである来迎会は、顛倒錯乱せず讚歎を遂行するための予行練習であったはずである。

和讃の先駆者としての千観（九一八―一一二）は、「阿弥陀の倭讚廿余行を作りて、都鄙老少、もて口実（実情）となせり」といい、千観入滅してのち、師を崇敬した藤原敦忠女は、夢のなかで、千観が「昔作りしところの弥陀の讚を唱えて西に行く」さまをみたという（『日本往生極楽記』、原漢文）。臨終迎接のときの讚（和讃）の諷誦が関心事であり、心配事であったことが窺える。

長久四年（一〇四三）年頃成立の『大日本国法華経験記』巻下の第八十三「楞嚴院の源信僧都」には、

八塔の倭讚を造り出して、遐邇（あま）都鄙（とび）、貴賤上下、乃至無聞非法、邪見放逸の、闇臚（あま）幼童をして、普く（あま）一代の聖教を暗誦せしめたり。弥陀迎接の相を構えて極楽莊嚴の儀を顕せり（世に迎講と云う）（原漢文）

とある。八塔和讃を作って広めたことと、その後の迎講の件りとは関連するの不明であるが、自作の和讃をあらゆる人々に暗誦してもらうことに心血を注いだことはわかる（なお八塔和讃の文は伝存しない）。文章の前後関係はわからないが、迎講において和讃が諷誦されたことを窺わせる記述で、黎明期の迎講においては、やはり讚の諷誦が重要であったと考えられる。源信自身、『往生要集』大文第二欣求浄土のうち十楽（往生者が享受する十の快樂）の第一「聖衆来迎の楽」において、さきの観経の九品往生の文うけて「大勢至菩薩ハ無量

ノ聖衆トトモニ同時ニ讚嘆シ」と説いており、勢至とその他大勢の聖衆が発する音は、楽器の音ではなく讚歎としている。ちなみに同書によれば行者が楽の音を聴くのは、極楽の蓮華の中に生まれその花卉が開いてからである（第二蓮華初開の楽）。「極楽莊嚴の儀」とあるので、極楽に見立てた堂内を楽器の音で莊嚴することとは十分ありうるが、楽器をもった菩薩役が堂をでて来迎行道をしたかどうかまで読み取れない。

『延暦寺首楞嚴院源信僧都傳』（一〇六一年迄に成立）をみると、

嚴院の南東に精舎を建立し金色丈六の彌陀をすえ、これを花臺院と號す。便ち其の地勢を就（ま）して迎ふる行者に來たるの講を勤修す。菩薩聖衆、左右を圍繞す。伎樂供養、歌詠讚嘆、已に年事と為す（原漢文）

とある。「地勢（傾斜地か）を利用した来迎の講」であるとか、「菩薩聖衆（行者の？）左右を取り囲む」であるとか、「伎樂供養」「歌詠讚嘆」をなしたとある。現在の當麻寺来迎会とさして変わらないように思われるが、はたしてそうであろうか。『首楞嚴院廿五三昧結縁過去帳』にある、源信入寂の寛仁元年（一〇一七）六月十日に弟子の能救（近江甲賀郡は石倉寺住）がみた夢の話は、源信迎講の実態をより詳細に伝えている。

夢に能救、僧都室に到るを見る。僧都まさに遠く行かむとしたまう。其の路の左右に諸僧ならびつらなり、（また）四の童子有りて、かたち・服、甚だ美なるが左右相なる哉。列する僧の而して立つる大途、横川の迎講の儀式に似たり。僧都示して云く、「小童を以て先と為し、大童を以て次と為せ」と。云。命に依て調ひ立ち了りて、西に向ひて歩み行けり。能救、夢の中にて思惟す。地より歩み行く、此の事恠しき哉。すぐさま漸く上り

て空をふんで行きて、口に唱えて云く「超度三界、超度三界」、再三これを唱えて西に向ひて去にけり。(原漢文)

ここから窺えることは、

一、主として(凡夫たる)童子に來迎の疑似体験をさせて教化をうながすことが迎講の目的であった。

一、僧衆が道の左右に(東西に)並んで立つこと。つまり聖衆とは僧侶のことか。

一、童子は聖衆(僧侶)に左右圍繞され、そのなかを西に向かって進む。

一、童子(と源信)が西に進むとき、地上を踏んでいないこと。(夢中の)源信が、漸く空を上っていったこと、超度(度)三界と唱えたことから、現行當麻寺來迎会のように、西方の堂に向かって上り勾配となった仮設渡り橋(來迎橋)の存在なども想定できるが、僧が左右に並ぶとあるので金剛台や紫金台を模した台車や輿に童子を乗せて並んだ僧たちが西方に(堂にむかって)運んだことなども考えられる。

いずれにしても菩薩聖衆が「来る」ことよりも、行者が「往く」「引接される」こと、(現今の當麻寺來迎会の法如像のように彫像ではなく)生身の子どもがそれを疑似体験することに力点が置かれていたようであり、もちろん、楽器を持つ菩薩形(役)が「来る」などということ、この逸話からは想定しにくく、並んだ僧たちは讀をうたったのではなからうか。しかし、童子たちが向かう先の花臺院の堂内では、あたかも平等院鳳凰堂内の雲中供養菩薩像のように、阿弥陀に供養する伎楽(舞楽)が演じられ(伎楽供養)ていたのである。伎楽供養であるから、それは行者に捧げる樂舞ではなく、あくまで弥陀への捧げも

のであり、樂の菩薩は弥陀に隨從するのであるから、現行來迎会のように樂の菩薩たちだけが、弥陀の傍を離れて來迎する演出は、理屈に合わない。ともあれ、この記述から、樂器を手にした菩薩形の人がこの時代にすでに登場していたかなんとも言えないところである。そして、それらが堂を出て演奏する真似をしながら練り歩くような演出を、はたして源信自身が始めたのか。おそらくは源信の後に続く僧たちにより形成されたと考えられる。

一一〇二年以降成立の『拾遺往生伝』にある、清原正国(一〇九三)(伝不詳、大和葛下郡出身)が入滅した寛治七年(一〇九三)十月十一日に、正国と親交のあった或る上人が見た夢の話には、「その夜夢みらく、西方より無量の聖衆、俱に伎樂を作して、老僧を迎へて帰るとみたり」とあつて、老僧(正国)のもとに聖衆が樂舞をともなつて來迎する描写となっている。

往生講式の次第を整えたことでも知られる永観律師(一〇三三—一一一一)の往生伝(『拾遺往生伝』巻下)には、天永元年(一一一〇)、永観は腰痛をきつかけに中山の吉田寺にて「迎接の講」を修し、「その菩薩の装束廿具、羅縠錦綺を裁ちて丹青朱紫を施」し、「四方に馳せ求めて、年ごとに営み設け」、装束一具を同寺に施入したという(原漢文)。装束を着て菩薩に扮した役の存在が確認できるが、模造樂器の有無や、そのふるまいまではわからない。翌年十一月、永観は臨終がせまると往生講を修し、講式の第四段(念仏往生の段)で「講衆等異口同音に、來迎讚本伝、木工助教隆の作なりといふを唱」えたという(原漢文)。つまり臨終の時には、前時代に倣つて、讚(和讚)を重んじたのである。ちなみにこの(來迎讚)は前掲の伝源信作ではなく、藤原敦隆(一一二〇年卒、歳五十余り、もと橘氏)の作という。

## 5 迎講と舞樂法会の行道

『今昔物語集』巻第十五には、「丹後國ノ迎講ヲ始メシ聖人」こと、源信の弟

子である寛印が、丹後にて国司大江清定（任期不明、在職が確認される記録としては、長暦元年（一〇三七）、永承三年（一〇四八）がある）の援助をえて迎講を始めた話を載せている。

（前略）（丹後守は）國ノ可然キ者共ヲ催シテ、京ヨリ舞人・樂人ナムト呼ビ下シテ、心ニ入レテ令行メケレバ、（中略）既ニ迎講ノ日ニ成テ、儀式共微妙ニシテ事始マルニ、聖人ハ香爐ニ火ヲ焼テ娑婆ニ居タリ。佛ハ漸ク寄り來リ給フニ、觀音ハ紫金ノ臺ヲ捧ゲ、勢至ハ蓋ヲ差、樂天ノ井ハ一ノ鷄婁ヲ前トシテ微妙ノ音樂ヲ唱ヘテ、佛ニ隨テ來ル。  
其間、聖人、涙ヲ流シテ念ジ入タリト見ユル程ニ、紫金臺ヲ差寄セ給タルニ、不動ネバ、「貴シト思ヒ入タルナメリ」ト見ル程ニ、聖人、氣絶テ失ニケリ。音樂ノ音ニ交レテ、聖人絶入タリト云フ事ヲモ不知ザリケリ。  
佛、既ニ返リ給ナムト為ニ、「聖人、云事モヤ有ル」ト、（中略）弟子、寄テ引キ動スニ、瘥ミタリケレバ、其時ニゾ人知テ（後略）

この文から窺い知れることは、

- 一、「紫金ノ台」とあるので明らかに、行者に讚歎を課す上品中生を想定したシミュレーションであったことがわかる。
- 一、極楽（に見立てた堂）から離れたところに娑婆に見立てた場所を設け、行者（ここでは寛印）はそこで待ち構えている。
- 一、聖人のもとに観音役・阿弥陀（像カ）が近寄ったとき（聖人はすでに息絶えていた）、弟子が「云事もや有る」と聖人に促しているのは「和讃」の諷誦か。

- 一、佛（阿弥陀）は行者の前まで近寄ってくる。
- 一、「樂天の井」が、観音・勢至とともに極楽より出てくる。<sup>10</sup>

一、一ノ鼓、鷄婁鼓（一ノ鷄婁」とあるが誤写脱字であろう）それぞれを鳴らす菩薩役二人が「樂天の井」たちの先頭を行く。

一、樂の音で寛印が息絶えたことに周りが気付かなかったとあるから、樂器は模造ではなく、「樂天の井」たち自ら実際に演奏しながら、阿弥陀とともに寛印の傍まで歩み寄ってきたとも解せるが、しかし「微妙の音楽を唱えて」とあるので、樂天役は歌詠しながら行道したのであろう。

あまりに劇的なこの説話は、後人脚色の可能性も考えられるであろう。迎講の様子についても、寛印入滅のころ（一〇二〇～三〇年代カ）ではなく『今昔物語集』成立期（諸説あるが一説に一・二〇年代～四〇年代）頃の迎講の演出スタイルが描写に反映している可能性があるであろう。現段階でその年代を絞ることは難しいので、ひとまず、十一世紀前葉から十二世紀前葉の間に、現行當麻寺来迎会にも通ずる迎講の演出スタイルが確立しつつあった、としておく。

この説話で、注目すべきは、京方の舞人・樂人を呼んだことと、一ノ鼓、鷄婁鼓が樂天の先頭を進んだことである。宮中行事の参音聲や舞樂をとまなう法要の奏樂の行道では、鷄婁鼓を頸にかけて右手にその撥をもち左手に鼗（振鼓）を持つ樂人と、一ノ鼓を頸にかけた樂人とが先導し、舞動作を伴いながら演奏・行道した。<sup>12</sup> その舞譜（所作と打ち方



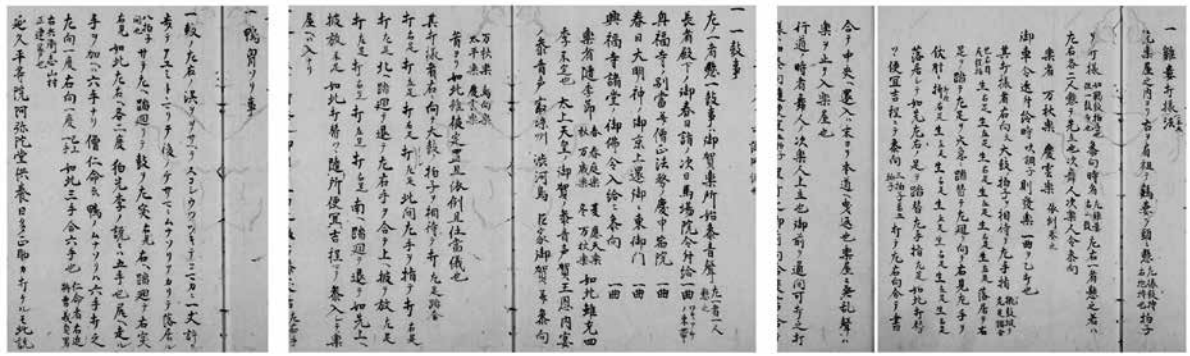


図3 『教訓抄』巻第七より「鶏婁打様法」「一鼓事」「鴨胸ソリ事」 江戸中期写本 宮内庁書陵部蔵

を記したものは、南都方楽家の伯近真が撰した『教訓抄』（天福元年一二三三）におさめられている〔図3〕。舞乐的足踏動作（「左足」「右足」と小字で略記される）をしながら打ち物を鳴らす八拍の動作パターンを左右方向変えながらシンメトリー反復するもので、<sup>13</sup> 鶏婁鼓譚鼓の舞行法、一ノ鼓の舞行法ともに場と催事に応じた動作パターンが数種類記されている。興味深いことは、一ノ鼓の「鴨胸ソリ」の手とある動作パターンである〔図3左〕。水面の鴨が羽をばたつかせるときに胸の前に突き出すように張る動きを採り入れたもので、これは『教訓抄』撰述時にはすでに）伝の絶えていた舞楽（菩薩）の舞本体の一部であったという。<sup>14</sup> 平安後期から鎌倉期にかけて、舞台上で舞われる舞楽（菩薩）は上演機会を失っていく。それは、法会行道の一ノ鼓、鶏婁鼓の所作に組み込まれてしまった結果、そちらが法会のなかで欠かさないものになっていたからであろう。それと反比例するかのよう、迎講は全国的に波及し、その過程で、一ノ鼓

鶏婁鼓の行道舞行法も迎講菩薩の所作にも取り込まれていったものと思われる、南都北京の寺院で催される迎講ならば、その菩薩役はおもに、楽家（舞人）が担っていたと思われる。そして、鶏婁鼓・一ノ鼓役については、舞の所作と演奏をともなって歩行していたと思われる。

6 十六〜十七世紀當麻寺練供養（脚供養）での奏楽・菩薩役担い手鎌倉期に数多く製作された阿弥陀聖衆来迎図を瞥見すると、先頭の観音・勢至・天蓋をもつ普賢菩薩のうしろに鶏婁鼓・一ノ鼓を鳴らす菩薩が続く作例が多い。奈良瀧上寺蔵『九品来迎図』（重文）のうちの上品上生図のほか、滋賀・聖衆来迎寺蔵『阿弥陀二十五菩薩来迎図』（重文）では、観音勢至らの後ろ、群をなす楽器を手にする菩薩たちと阿弥陀の前方に、鶏婁鼓・一ノ鼓の二菩薩が描かれている。とくに聖衆来迎寺の作例では、鶏婁鼓・一ノ鼓の二菩薩独立して浮き立つようグルーピングされて描かれている。また知恩院蔵の国宝『阿弥陀聖衆来迎図』、通称早来迎図では、同様に観音勢至らの後ろ、阿弥陀の前方に、鶏婁鼓・一ノ鼓・舞の三菩薩、すなわち舞う三菩薩が群を先導するように描かれている。

さて、以上を踏まえて絵画化された當麻寺来迎会の初例である『當麻寺縁起』下巻最終第七段の「脚供養」図（享祿四年（一五三二）翌年に追加・完成）〔図4〕を見ると、やはり観音・勢至と天蓋をもつ普賢の後に、鶏婁鼓・一ノ鼓の二菩薩役が諸菩薩の先頭を進んでいる。身体の描き方において、この二菩薩が後続の楽の菩薩と異なる点は、腰をおとして「足踏」していることと、上体を前傾させていることである。実はこういった特徴は、中世以前の舞楽図における舞人身体構図の特徴で、図2の林家蔵『舞楽図巻』（十四〜五世紀初期頃）の行道楽人をも、鶏婁鼓・一ノ鼓の者のみか前傾姿勢をとっている。當麻脚供養図は、様式化した仏画の身体構図を踏襲している可能性も考えられる。



図4 『當麻寺縁起』下巻の「跣供養」図 部分 (左：曼荼羅堂の奏樂 右：鶏婁鼓・一ノ鼓の菩薩) 當麻寺蔵 (画像提供 奈良国立博物館)

すべてが当時の来迎会の実態ではないと考えられるが、しかし、菩薩の列のなかに、當麻寺特有の僧形二菩薩と二天童も描かれていることや、また、曼荼羅堂の真言僧と娑婆堂の浄土僧の衣・袈裟などを明確に描き分けていることから、実際を取材して描いていたものと思われる。となれば、鶏婁鼓・一ノ鼓の菩薩役は、行道の舞の動作をしていた可能性がある。

一方、曼荼羅堂内に注目すると、楽器を実際に演奏している者たちは、楽家ではなく、僧綱襟に白袈裟の真言僧たちである。

彼らが演奏している楽器は、箏・笙・タテブエ(箏策か)・銅鈸(以上、白衣の僧による)、日輪付き太鼓・円盤状金属打楽器(鏡か)・琵琶・鞆鼓・ヨコブエ(龍笛か)(以上、白衣の僧による)の、九種類である。特徴的な点は、通常雅楽では用いない銅鈸・鏡を使用し、鉦鼓を用いていないことである。銅鈸・鏡ともに、先にあげた『妙

法蓮華經』方便品の管絃歌舞供養による成仏を説く文に列挙されている金属打楽器であり、彼らは、前方に置かれた「迎え阿弥陀」像に樂を供養する(捧げる)菩薩たちである。そのように經典に忠実な一面がうかがえる一方で、樂の菩薩たちが弥陀のもとを離れて行者(法如)を迎えに行く、という經典に矛盾する演出が既に成立していて、當麻来迎会の過渡期的様態が看取される。

さて、時は移り、元禄三年(一六九〇)に京方樂人の安倍季尚が著した『樂家録』卷四十六「舊處樂工」には、當麻寺来迎会の奏樂の担い手について、伝聞・推量ながら、次のように記している。

上古有<sup>二</sup>奏樂之例<sup>一</sup>、樂處之輩勤<sup>レ</sup>役之<sup>二</sup>乎。寺僧等修<sup>レ</sup>之、例未<sup>レ</sup>考傳聞當初當寺有<sup>二</sup>舞樂<sup>一</sup>、今想<sup>レ</sup>之、此寺每年三月十六日有<sup>レ</sup>謂<sup>二</sup>鍊供養<sup>一</sup> 是中特懸送舞之義式也其法為<sup>二</sup>菩薩之象<sup>一</sup>數十人行列。以此按<sup>レ</sup>之上古修<sup>二</sup>大法會<sup>一</sup>伶人等勤<sup>レ</sup>役之<sup>二</sup>、其後至<sup>二</sup>斷絶<sup>一</sup>乎。然寺僧等雖<sup>レ</sup>嘆<sup>レ</sup>之、世衰催<sup>二</sup>伶人等<sup>一</sup>無<sup>レ</sup>便、故惟伶人之中菩薩人耳出<sup>レ</sup>作而上古之遺法備<sup>レ</sup>之乎否

この伝聞記事から、この期の當麻来迎会において樂家が入りしていないことがわかる。おそらくは一ノ鼓・鶏婁鼓の舞菩薩の姿もみられなくなっていたのであろう。ただ現在みられる観音・勢至の道中の所作は、「鴨胸ソリ」をおもわせ、中古中世の遺風なのかも知れない。

## 7 まとめ

現在の當麻来迎会では、(観音・勢至・普賢と天童、僧形地藏をのぞき)樂器をもつ菩薩たちの先頭を進むのは、鶏婁鼓の菩薩で、次に一ノ鼓の菩薩となっている(一列で練るため)。この練り順は、菩薩面及び採り物(樂器・莊嚴具)を當麻寺縁起「跣供養」図をもとに新調し、練り順を再構成した、平成十七年

(二〇一五)以降のことである。新調以前は、残存する楽器・荘厳具もわずかで菩薩役全員が持てるほどの数はなく、何も持たずに練る菩薩が多かったという。もちろん、鶏婁鼓・一ノ鼓の菩薩役たちは、舞うわけではなく、他の菩薩と同様に講員に介添えされてただ歩行するのみである。當麻来迎会は、そのように往古盛衰を経ながらも、こんにちまで毎年行われてきたと思われる。

雅楽は衰微期の戦国時代を挟んで、その音楽様式(拍節構造・テンポなど)は様変わりし、楽家社会も激変した。戦国期に入る前までの當麻来迎会では楽家が出向して、演奏だけでなく菩薩の舞行道も行っていた可能性はある。しかし、楽の拍節・テンポと菩薩の所作とが同期せず無関係に進行すれば、鶏婁鼓・一ノ鼓役のために楽家の舞人を召喚する必要もない。ただ歩くだけの菩薩役となれば猶更である。菩薩役の担い手が楽家から菩薩講へと移り変わっていったのは、その背景として雅楽の音楽様式の変化や楽家の事情などが考えられよう。しかし、観音・勢至の舞行く所作、法如を迎接するときの作法や、そのときの(来迎和讃)の諷誦、(かつて)曼荼羅堂内で諷誦されていた「百日問之法則」(蓮華会では今なお諷誦されている)などは、独自の旋律、音階構造や楽曲形式などから、相当の歳月にわたって伝承されてきたものと考えられる。

特に観音勢至が迎接する時の「和讃」は来迎会(迎講)の根幹をなす要素で、おそらくは楽器や荘厳具を手にした二十五菩薩の登場よりも古く、源信の迎講ですでに諷誦されていたと考えられる。

當麻寺の娑婆堂和讃は、源信作とされる「来迎讚(和讃)」からいくつかの句をひいている。その詞句には、「昔の庭には諸聖衆、光を竝て長跪せり、伎楽の菩薩も是時に、踊躍歡喜安からず」(前掲、天台叢書本⑤)と、管絃歌舞の菩薩の来迎を謳う句がある。源信は、『往生要集』に管絃歌舞の菩薩の来迎について触れておらず、なにより『無量壽經』『觀無量壽經』に説かれていないため、この和讃を源信作とするのはやや疑わしい。當麻来迎会の娑婆

堂で諷誦される和讃が、源信自作の詞、源信自作の旋律、とは言えないまでも、来迎会の理念・根幹をなすもので、来迎会(迎講)のかなり初期の様式を今に伝える例といえるだろう。

#### 参考文献

##### 編著者名標目

- 伊藤久美「當麻寺縁起―下巻一巻―」展示品解説(『源信―地獄極楽への扉―』、奈良国立博物館編、奈良国立博物館・朝日新聞社、二〇一七年)
- 關信子「迎講・来迎会・ねり供養―主役の迎講阿弥陀像を中心に―」(『極楽へのいざない―練り供養をめぐる美術―』、龍谷大学龍谷ミュージアム・毎日新聞社・京都新聞社編、二〇一三年)
- 武石彰夫『仏教歌謡の研究』(桜楓社、一九六九年)
- 多屋頼俊『和讃史概説』(法蔵館、一九三三年)
- 『聲明大系 第四巻 浄土』(横道萬里雄・片岡義道・佐藤道子・岩田宗一・蒲生郷昭編、日本コロムビア音盤製作、法蔵館(LPレコードと解説書)、一九八四年)

##### 書名標目(含図版出典)

- 『會殿樂六百十二句』称名寺藏(『金沢文庫資料全書 第七巻 歌謡聲明篇』、神奈川県立金沢文庫編、便利堂、一九八四年)
- 『往生要集 卷上』(日本思想大系六『源信』、石田瑞麿校注、岩波書店、一九七〇年)
- 『樂家録 卷之四十六』(覆刻日本古典全集『樂家録 五』、正宗敦夫編、現代思潮社、一九七七年(初版一九三六))
- 『教訓抄 卷第七』(宮内庁書陵部藏、函架二六一・五六、新日本古典籍総合データベース)
- 『古事談 第三』(『新訂増補國史大系 第十八巻』、黒板勝美・國史大系編修會編、吉川弘文館、一九六五年)
- 『催馬楽略譜』乾坤(東北大学附属図書館狩野文庫藏、狩野第五門/一七〇九、『狩野文庫マイクロフィルム版集成』所収)
- 『拾遺往生伝 卷中』(日本思想大系七『往生傳法華驗記』、井上光貞・大曾根章介校注、岩波書店、一九七四年)
- 『首楞嚴院廿五三昧結縁過去帳』(『恵心僧都全集 第一巻』、比叡山専修院・叡山学院、思文閣、一九七一年(初版一九二七))
- 『浄業和讃 上巻』(文政八年(二八二五)刊、大谷大学図書館藏、内宗大八七九)

- 「聲明用心集 上」(『續天台宗全書 法儀一 聲明表白類聚』、天台宗典編纂所編、春秋社、一九九六年)
  - 「常樂会法則」(高野山住職会蔵版、高野山出版社)
  - 「諸經要文伽陀集 上」(称名寺蔵、『金沢文庫資料全書 第七卷 歌謡聲明篇』、神奈川県立金沢文庫編、便利堂、一九八四年)
  - 「仁智要録 卷第十(盤渉調曲下)」(菊亭家本、京都大学附属図書館寄託、菊／卷／八〇)
  - 「大日本国法華経験記 卷下」(日本思想大系七『往生傳法華験記』前掲)
  - 「當麻寺縁起」下巻第七段(享祿四年(一五三二)、當麻寺蔵)
  - 「長西録」下(寛文二年(一六六二)／宝永二年(一七〇五)刊、国立国会図書館蔵、記号八五七―一五六、同館デジタルコレクション)
  - 「日本往生極楽記」(日本思想大系七『往生傳法華験記』前掲)
  - 「秘密袋 末巻」(當麻寺西南院蔵、年代不詳)
  - 「舞楽図巻」(山形・谷地八幡宮蔵、十四〜十五世紀頃)
  - 「来迎讃」文政二年(一八一九)刊(『恵心僧都全集 第一巻』前掲)
  - 「来迎和讃」羅溪慈本編『天台霞標 四編卷之三』(『大日本仏教全書 第二二五冊』、仏書刊行会編、名著普及会、一九八一年覆刻(初版一九一四))
- 1 こんにちの雅楽は、平安期の雅楽に比べると数倍〜十数倍も「まのび」している。まのびした結果、本来の旋律線は、骨格音として認識されなくなり、そこに細かく修飾する旋律を奏すようになった筈だが、あえて骨格音を逸脱して都節五音音階的な旋律を奏すようになり、結果こんにちの雅楽はきわめて複雑な音構造となっている。
  - 2 一輪行道、二輪行道において諷誦される。詞句は、天台霞標本「来迎讃」とはかなり異なる。形式は、(初重)念仏七句↓来迎讃(天台霞標本①⑦)↓念仏七句(三句目より三重)↓来迎讃(天台霞標本⑤⑧、⑦③)↓わが身は罪障おもくして戒光さえてやみふかし佛日はるかにてらさずばいよいよ長夜にまよわまし、天台霞標本⑧⑨⑩)。
  - 3 昭和五十六年(一九八一)五月二十八日、京都安養寺にて録音。調声、清水寛然。助音、京都時宗声明研修会。収録時間などの制約からか、詞句の約三分の二を省略している。
  - 4 平成二八年(二〇一六)四月十六日、たからづか能関連講座「能『玄象』のモデル藤原師長の音楽人生―琵琶・箏の腕前で名を馳せた太政大臣」(於宝塚市文化財団ソリオホール、筆者講演)での実演に際し作成した五線訳譜を一部改訂したもの。

- 5 鈿阿(會殿楽)譜には、墨譜だけではなく笛の指孔名を併記し、正確な音高を示している。
- 6 同じく法華経の妙音菩薩品には、妙音菩薩が、万二千歳(一二〇万年)もの間、雲雷音王仏に「十万種の妓楽」を演奏し、八万四千の宝鉢を捧げたところ、その「因縁の果報」で浄華宿王智仏の国に生まれた、と説かれている。また『大樹緊那羅所問経』には、香山の大樹緊那羅が釈迦仏の前で八万四千の音楽を奏して来成仏が約束され、諸天・天龍・夜叉みな大樹緊那羅の琴の調べにききほれ、摩訶迦葉は踊りだし、阿難は唱歌を歌いだしたとある。
- 7 (原文)「觀世音大勢至 与無数菩薩讚歎行者 勸進其心 行者見已 歡喜踊躍 自見其身 乘金剛臺」
- 8 (原文)「臨命終時 阿弥陀佛 与觀世音大勢至 無量大眾眷属围绕 持紫金臺 至行者前 讚言 法子 汝行大乘 解第一義 是故我今 来迎接汝 与千化佛 一時授手 行者自見 坐紫金臺 合掌叉手 讚歎諸佛 如一念頃 即生彼國 七寶池中」
- 9 京都黒谷にあったが、寛文八年(一六六八)に廃寺となった。本尊は古備具備の依頼で行基が彫ったという千手観音(現金戒光明寺安置)で、中山観音堂などと呼ばれた。
- 10 『觀無量壽經』に説く九品往生で、阿弥陀が臨終行者の前に現れるのは、上品上生(中品中生で、中品下生)下品下生の者のもとは現れない。
- 11 楽器をもつ菩薩役とは別に、実際に奏樂をする樂人が、樂人装束(直垂)のまま、来迎に付き従うのは、當麻寺においてもごく最近の現象であるし、演奏するのは菩薩たちという設定であるから、樂人がその場に姿を出すことは理屈に合わないし、「聖衆ではない」身なりの者が来迎する(来迎橋を渡る)ことも理屈に合わない。
- 12 その起源は古く、寶龜九年(七七八)十二月に壬生驛麻呂が記した「一鼓儻行法」(鶏婁挑鼓儻行法)舞譜も『教訓抄』に収載されている。
- 13 『教訓抄』に語られるその時代の舞樂の基本的な足動作は「足踏」であった(田鍬智志二〇〇〇「舞譜『掌中要録』における身体動作の解釈をめぐる諸問題」、『音楽学』第四五巻三号)。行道には(萬歳樂)(慶雲樂)など八拍子の樂曲を用いるとあるので、動作パターンは八拍単位になっている。
- 14 『教訓抄』(菩薩)の項、「近來菩薩舞絶了。但大行道時、一鼓ヲ打、鴨ノムナソリノ手ハ、是菩薩ノ舞ノ手也」。

(田鍬智志)

譜例1 當麻寺来迎会〈来迎和讃〉五線採譜—護念院 葛本雅崇師の諷誦にもとづく—

18sec. (実音:約長2度下) *poco* *poco* *poco* 19sec. *poco*

① せ い し ゅ ふ し や の こ み よ オ わ ② ね ん ず る と こ ろ を

*poco* 19sec. *poco* *poco*

て ら す な ア り ③ か ん の ん せ い し の ら い こ オ わ

29sec. *poco* 戒尺→ *p* *f* 28sec. *poco*

④ こ え を た ず ね て む か う な ア り ⑤ と き に

26sec. (ほぼ実音) *poco*

だ い ひ か ん ぜ オ オ オ ウ ⑥ よ や く あ ゆ み ち か づ き イ て

28sec. *poco* 29sec. *poco*

⑦ し ま ご オ ん の み を ま げ エ て ⑧ れ ん だ い か た ぶ け よ せ た ぼ オ

28sec. *poco* 29sec. *poco*

⑨ つ ぎ に せ い し だ い さ ア た ⑩ し ょ じ ゅ ウ ど オ じ に

31sec. *poco*

さ ん ま ん ウ し ⑪ だ い に よ ち ひ の て を の べ て テ

34sec. *poco* 34sec. *poco*

⑫ ぎ ょ オ じ ゃ の こ オ ベ を な で た も お ⑬ つ い に い ん じ ょ

37sec. *poco*

し た ま い イ て ⑭ こ ん れ ん だ い に の せ た も お

41sec. *poco* 36sec. *poco*

⑮ り ん ね し ょ じ の ふ る き さ ア と ⑯ こ の と き と ず

25sec. (十念)

へ だ た り イ ぬ なん あ ん だ ぶ なん あ ん だ ぶ なん あ ん だ ぶ なん あ ん だ

なん あ ん だ ぶ なん あ ん だ ぶ なん あ ん だ ぶ なん あ ん だ な む あ み だ ぶ つ な む あ み だ ぶ

(採譜 田 鎌 智 志)

譜例 2 時宗〈来迎讃〉五線採譜—清水覚然（調声）、京都市宗声明研修会（助音）、『聲明大系』収録音源による—

44sec. 調声 (solo)  
初重念仏 省略 (ほぼ実音)  
⑰ き エ ば さ (イ) イイ ほう オ オ

30sec. 助音 (tutti)  
かいイのそら ンアア ン⑱ぎ が く かいよオ ほの かな アリ

30sec. 24sec. 十二句 中略  
⑲ みイ れ(エ) ばみどりのやまのは に ⑳こオ うんはる かに かがやけり

33sec. 調声 助音 16sec.  
㉓ かん げ ん ㉔ かぶの ぼ さアつわ ㉕くもにそでをひるがえし

21sec. 20sec. 二重念仏 および 四句中略  
㉖じ ばんくげのしよ ご んナ ㉗かぜにまかせてみだれたり

39sec. 調声 助音  
㉘ま な こオ に み (イ) て るじひのいろ

41sec. 17sec.  
㉙お つ るなんだもとどまら ず ㉚みみ にきこゆるのりのこえ

19sec. 18sec. 十六句 調声 中略  
㉜かんぎのこころ いくばくぞ ㉝つ ウイぎ にンイ

助音 24sec. 20sec.  
せ いしだいさつた ㉞しよ しゅ どオじにさんだし ㉟だいじよちひのてをのべて

三重念仏 55sec. 調声 および 十三句 中略  
㊱ぎよじゃのこオベを なでたもオ ㊲み だ ア シ ン ア

27sec.  
か んのね が わくわ アぎよ じゃのちかいを しよけ し

29sec. 助音 23sec. 廻向 および 十念 後略  
㊳だい せ が あやまた ず ㊴ら いご いんじ たれたまえ

(採譜 田銀 智志)

譜例3 『仁智要録』より〈越殿楽〉箏譜（平調調絃による）と 釧阿の〈會殿楽〉聲歌譜の五線訳譜

唱歌  
 甲 六六六中中中干干 六六六上 干干干干干干 乙 中中中中 夕中中中六干中 上上上 中夕夕干干上上  
 うめがえだにこそ うぐいす わすくうなれ 二反かぜふか ばいかがせんや はなに いたるうぐいす 二反

箏  
 六 十 為 為 六 巾 八火 巾 為 為 二反 十 十 九 十 十 十 八 三 四十九八 七 七 二反

甲 六六六六中六六六干干干 干干干上上干干干干干 乙 中中中中中夕中夕中中中夕六中中 上 上 上 夕 夕 干 干 上 上  
 つくづくとおもいとけば あわれよしなかりけり 二反 こうるとても しのぶ とても あわぬものゆえに 二反  
 箏 *simile*

(訳譜 田録 智志)

譜例 4 當麻寺〈來迎和讃〉・時宗〈來迎讃〉・唐楽〈越殿楽〉平安末期の催馬楽〈更衣〉・鎌倉期の〈舍利講伽陀〉の音階構造

■1 現行 當麻寺〈來迎和讃〉の音進行と音階構造

音進行

構成音 律の七声 (七音階)

宮 商 嬰 律 徵 羽 嬰  
 ※終止音 商 (律角) 角 (變徵) 商 (律角) 羽 ※出てこない 嬰羽 (變宮) ※出てこない

※ 括弧内の音名は『仁智要録』による。

■2 現行 時宗〈來迎讃〉の音階構造

構成音 律の五音 (商・羽 反列型の和国神楽五音)

角 徵 羽 宮 商 角 徵  
 反 反 刻 刻

※ 白音符はフレーズ終止する音

↑ 調声 [solo] では、f音が長2度下がって都節音階化する場合もある。

■3 唐楽〈越殿楽(會殿楽)〉の音階構造 — 「時代」あるいは「器楽/声楽」による違い

箏譜 藤原師長 (1138-92) 撰『仁智要録』 聲歌譜 鈿阿 (明忍坊 1261-1338)

構成音 律の七声 (七音階) 律の五音 (商・羽 反列型の和国神楽五音)

宮 商 嬰 律 徵 羽 嬰 宮 商 嬰 律 徵 羽 宮  
 商 (律角) 角 (變徵) 商 (律角) 羽 嬰羽 (變宮) 宮 商 (律角) 角 (變徵) 羽 反刻 宮 商 反刻 角 徵 羽 反刻 宮

※ 白音符は宮音

※ 括弧内の音名は『仁智要録』による。

■4 『催馬楽略譜』下巻 (1197年か) より律の催馬楽〈更衣〉の音進行と音階構造

冒頭の音進行

構成音 律の七声 (七音階)

商 嬰 律 羽 宮 商 嬰 律  
 商 (律角) 角 (變徵) 商 (律角) 羽 宮 商 嬰 律 角 (變徵)

■5 鈿阿写『諸経要文伽陀集』上巻 (1301年校了) より〈舍利講伽陀〉の音進行と音階構造

初二句の音進行

構成音 律の五音 (商・羽 反列型の和国神楽五音)

正 覺 法 王 育 我 等 飲 我 法 乳 長 法 身

羽 宮 商 角 徵 羽 宮  
 反 反 反 反 反 反 刻



## 第一〇章 練供養における現行の菩薩面・持物・輪光

### 1 はじめに

當麻寺練供養会式（以下、練供養）において使用される道具の中で、主要なものとして、菩薩等の面があり、その光背となる輪光や、各菩薩が手に持つ楽器などがある。

練供養に使用される面については、合計二十八面あり、その内訳は菩薩面二十四面、僧形面二面、天童面二面となる。

昭和十六年の練供養までは、鎌倉から江戸時代までの各時代に制作された面が使用され続けてきたが、各面ともに数百年以上も前に制作された木製の古面であり使用するたびに破損も多く、修理を重ねながらの行事での使用は限界時期に来ていると考えられた。

このことから、平成九年度から十五年度にかけて、菩薩等の面二十八面及び菩薩役等が手に持つ楽器などの持物類の制作、並びに輪光修理が、文化財保存事業として文化庁・奈良県の補助を受けて実施された。

新面及び道具類の制作は平成九年から十四年にかけて行われ、輪光の修理は平成十五年度に実施された。そして平成十七年五月十四日の練供養から、新面と新しい楽器などの持物が使用されている。

以下本章では、菩薩面・持物・輪光についての概要を記す。

### 2 菩薩面

はじめに記したとおり、平成九年度から十四年度にかけて、新たな練供養菩薩面等（菩薩面二十四面、僧形面二面、天童面二面）二十八面が制作された。

制作者は、丸尾万次郎氏（奈良市）である。丸尾氏は能面・舞楽面・菩薩面制作者として二〇一九年度において「地域伝統芸能大賞 支援賞」（財）地域

伝統芸能活用センター）を受賞された。

なお、菩薩面及び天童面の頭飾となる金銅製天冠制作については、選定保存技術「鍔金具」保持者に認定されていた三代目森本安之助氏を代表とする（株）森本鍔金具製作所（京都市）において伝統的製作技法により制作されたものである。

菩薩面の新調についての経緯概要は先に記したとおりであるが、新面を制作するに当たり、菩薩講の当時の事務局を務める當麻寺護念院住職から、古い面は、体格の良い現代人が被るにおいて顔面が痛くなるほどに窮屈なことも多いことから、現代人が容易に被ることができるような大きさにし、行事に継続して使用するにおいて十分に耐えられる丈夫な面にしてほしいなど幾つかの要望があった。

先の要望を踏まえ、次のとおり面の制作方針が作成され、これに従って菩薩面が制作されている。

菩薩形面については現在使用されている面の様式を踏襲するものとし、各部分における仕様内容は次のとおりであった。

一、材料 国産松材を使用。

二、形状 全体の輪郭、頭髮、眉、目、鼻、口などの形状（表情は）等は現狀様式を踏襲する。面部と頭部は別製、高髪・地髪ともに毛筋彫、髮筋耳を巻く、耳朶環状、頭部に金銅製天冠を付ける。後頭部を覆うための頭髮部後端の小穴列に縫い付けられていた藍色麻覆布は付けない。その小穴列も設けない。

三、面彩色 基本的に現状菩薩面（古面）と同じ色で彩色する。古色仕上げをしない。

面部は黒漆塗金箔彩、頭髮部群青彩、髻紐及び唇朱彩、両眉・髭・

鬚・鬢墨（黒漆）描、毗青彩、その他各部彩色は現状菩薩面（古面）のとおりとする。

四、法量 着脱を容易にできる面にするために、現状様式に基づく印象を損なわない範囲で面の法量変更を行う。

五、裏面 生地蚊帳貼り、黒漆塗り仕上げ。

六、紐取り付け穴及び取り付け紐 面の上部紐の取り付け穴は耳の上部と天冠台下部の中間位置に開孔部を設け、下部の紐取り付け穴は耳朶近くの面本体に開孔し、絹紐を取り付ける。

六、白毫 白毫にガラス玉を使用し嵌入する。

七、その他 面制作における使用内容について疑義が生じた場合は、双方協議のうえ定めるものとする。

なお、新菩薩面の法量についてであるが、旧菩薩面は各面ごとに個性があり、大きさも異なり小さいサイズのものもあったが、新面制作に当たり、一般男性が面を被るにおいて顔面に負担の少ない程度の大きさにそろえて制作されている。個々の菩薩面の大きさもほとんど変わらない。

例として、1号面の法量は縦二七・五cm、幅二二・五cmである。

### 3 持物

現行の當麻寺練供養では、各菩薩それぞれに楽器などの持物を手に持ち、来迎橋の上を練り歩くが、旧菩薩面が使われていた平成十六年当時において、菩薩役が手にする持物は振鼓・小鼓・琵琶・笙・太鼓・拍板・磬・方形香炉・錫杖・蓮台・天蓋の十点と・華籠二点しか残されておらず、菩薩役の多くは何も持つことなく合掌した姿で練り歩く状況であった。

このことから、菩薩面を新調するにあたり、不足していた持物類についても、

平成十一年度から平成十三年度において制作されることとなった。

練供養において、残されている持物類は先にあげた十二点で、それ以外にどのような物が使われていたか、近年の記録にも無く不明であった。ただし、享祿四年（一五三一）に制作された當麻寺縁起絵巻下巻の巻末部分に、当時の練供養風景を描いたと思われる場面があり、娑婆堂に向かって練り歩く菩薩衆が手に持つ楽器などの持物を参考に復元製作することとなった。また、残っている持物で、破損の少ない状態の華籠や方形香炉などの金属製品三点については修理して继续使用することとなった。

新調された持物は一九点で、その名称は次のとおりである。

宝珠、振鼓、鶏婁鼓、沓鼓、鞞鼓、太鼓、鉦鼓、拍板、磬、小銅鉢、大銅鉢、火舎香炉、笙、横笛、篳篥、角笛、篳篥、琵琶、箏。

また、修理を行った金銅製の華籠二点、金銅製方形香炉一点に加えて、引き続きそのまま使用される、錫杖・蓮台・天蓋を合わせると合計二十五点の持物がそろったこととなった。

なお、當麻寺縁起絵巻の練供養場面中に描かれたとおりに復元できなかった物も幾つかある。

例えば楽太鼓は、大き過ぎて現在の練供養に使用するうえで支障を来すことが懸念されるとの意見から、太鼓部分だけを持ち歩く形での制作となった。また現行の天童役は華籠を持ち菩薩衆の先導役となるが、當麻寺縁起では、金銅製玉幡を持歩く姿で描かれ、現行とは異なるため、これの制作は実現に至らなかった。また、菩薩役が来迎橋を練り歩くにあたり、支障を来さぬようにとの配慮から、新調された持物の多くが、本来の物より小ぶりに制作されている。例えば箏は短い形ものが採用され、琵琶も小さめに製作されている。一方、篳篥や横笛など本来小ぶりの楽器は、大きめに制作された。なお、彩色についても、絵巻に描かれた楽器の文様や色柄の復元に努められている。

4 輪光

(1) 輪光

練供養会式における各菩薩役の光背となるもので、菩薩面の天冠台となる帯金具の後部に装着する仕組みとなっている。直径約六〇cm。二七点。

輪光の構造は、薄い真鍮製薄板(約〇・五mm)を丸くなるよう分割して帯状に切り抜き、鉸止めで環状に組合せて製作されている。また、輪光の上部と左右両側の三箇所には菩薩名を表す種子を記した直径九cm程度の小さい円盤状金具が取り付けられている。

輪光の圈帯の左右および中央軸部の下部には銘文が刻まれ、右側には各菩薩名と施主の名前、中央軸部には宝暦十二年(一七六二)の年号と僧侶名「護念院憲譽」、左側には戒名等が記されている。注目すべきは、右側に刻まれた施主の住所と名前で、現在の菩薩講を構成する各組講員の住所と多くが重なることから、菩薩講の成立時期を考えるうえで、重要な史料の一つとなっている。

刻銘 凡例

Ⓢ 輪光圈帯の右側

Ⓣ 輪光中央の軸部

Ⓤ 輪光圈帯の左側に刻まれた銘文

1 Ⓢ 奉寄進大悲観世音菩薩輪光

Ⓣ 宝暦十二年 四月十四日 護念院憲譽代

Ⓤ 銘文なし

2 Ⓢ 奉寄進大勢至菩薩輪光施主中村下村直七

Ⓣ 1と同じ(※3以降、中央軸部の刻銘は同文のため、省略)

Ⓤ 稱譽宗閑光譽妙月

3 Ⓢ 奉寄進藥王菩薩輪光施主今倉村貞壽尼

Ⓣ 光譽貞松栄譽知蓮二親

4 Ⓢ 奉寄進藥上菩薩輪光施主染野平治良

狐井村理鏡

Ⓣ 淨専妙海先祖代々二親宗休法界

Ⓤ 淨譽清安妙順利覚相願妙壽妙心淨心妙沢

5 Ⓢ 奉寄進普賢菩薩輪光施主万歳油屋七兵衛内

Ⓣ 為釈妙珎菩提

6 Ⓢ 奉寄進獅子吼菩薩輪光施主太田村六次郎母

勝根村中

Ⓣ 詮譽妙祐洞沢宗智蓮譽曰道勇徳宗哲高嚴宗覚先祖代々

先祖代々一家精霊

7 Ⓢ 奉寄進陀羅尼菩薩輪光施主長尾村帯屋平右衛門

樗屋九兵衛

Ⓣ 直心頂入直岳浄喜順譽教春珠光霊浄覚譽受円浄円

Ⓤ 光雲童子了夢童子二親

8 Ⓢ 奉寄進虚空蔵菩薩輪光施主當麻勘右衛門母

竹之内吉右衛門母

Ⓣ 任譽了蓮正譽理玄應譽現水正譽心水運譽良閑釈了喜二親

9 Ⓢ 奉寄進徳蔵菩薩輪光施主今倉村貞紫尼

清心尼

⑤ 應譽宗玄淨円法屋妙壽真玉童子清玉童子法界

清譽高岸淨達顯譽了意心譽慶順積妙喜柔月了(輓?) 高現的秀  
二親

10 ⑥ 奉寄進法藏菩薩輪光施主今在家村喜平治母

新之助母

⑤ 先祖代々一家精靈

當山宗胤院主郭順

為二親觀了大德輪光都合觀化人大橋村文右衛門淨譽宗心

11 ⑥ 奉寄進金藏菩薩輪光施主長谷隔夜常円

今倉村長三良

⑤ 為法界法譽妙忍覺譽妙円知法重女本譽願入清円童子

12 ⑥ 奉寄進金剛藏菩薩輪光施主今倉村籐兵衛

治兵衛母

⑤ 隨應教順現譽貞順清譽淨貞正悅利三西岸祐順恒逆童子  
廓到了真心譽行意慈貞積妙教味積信一峯知玄幻智童子

13 ⑥ 奉寄進光明王菩薩輪光施主長尾村椿本伊兵衛母

⑤ 積教西慈月貞心積妙順積妙善

14 ⑥ 奉寄進山海惠菩薩輪光施主長尾村佐太良

⑤ 熙歡道怡其玉生蓮 称

15 ⑥ 奉寄進華嚴王菩薩輪光施主忍海村誦光

⑤ 心譽淨円歛譽淨喜光譽妙喜法岸良喜桂山狐水秋窓淨然称岳惠讚

其岳妙蓮利元童子其子其屋妙委先祖法カイ喜說童女先祖法界為  
法界積妙佑

16 ⑥ 奉寄進衆寶王菩薩輪光施主長尾村椿本伊兵衛母

⑤ 積道清先祖法界教譽淨頓宗譽妙頓松室淨閑□閑清岸淨岸喜積  
妙可積淨喜法界

17 ⑥ 奉寄進月光王菩薩輪光施主北角村智性尼

⑤ 了山宗壽松山淨登本譽宗円佛願妙香念譽教專行譽宗林

光屋妙閑覺譽宗榮積妙閑一心院宗順廓譽知然尼積妙可

18 ⑥ 奉寄進三昧王菩薩輪光施主瓦口村滝井喜兵衛治母

野口村甚二郎母

⑤ 春光童女春正童女覺童女雪貞童女幽幻童子現秀童子觀譽淨喜  
深譽淨玄淨譽妙玄真譽宗玄露心童子淨薰童子玉惠童女

19 ⑥ 奉寄進定自在王菩薩輪光施主西辻村辻本貞慶

磯野村念佛講中

⑤ 願慶玄真善慶珠清壽泉宗蓮 妙蓮為法界

20 ⑥ 奉寄進大自在王菩薩輪光施主瓦口村惠照

妙意

⑤ 願譽行信淨譽利覺淨智法岸智清於杉真岳淨喜積妙玄先祖代々

21 ㊦ 奉寄進白象王菩薩輪光施主狐井村高垣小三郎

狐井村孫七

別所村於梅

㊦ 了覺順應円室理清

覺誓正善安誓利清光岳妙照利屋智貞了觀積了空

27 右側・中央・左側に、刻銘なし

22 ㊦ 奉寄進大威徳王菩薩輪光施主 瓦口村滝井壹平治母  
別所村於梅

㊦ 覺誓正善安誓利清光嚴正徹智貞涼誓了順熏誓栄法

觀了誓壽良察童子香嚴正徹觀誓利春智岸童女一家精霊

他の輪光のように菩薩名を銘文を刻まないことから断定はできないが、當麻寺練供養において、仮面をつけて練り歩くのは菩薩役以外では天童役しかなく、過去において天童が使用する輪光であった可能性も考えられる。

23 ㊦ 奉寄進無邊身菩薩輪光施主野口村甚二郎母

狐井村与兵衛

(2) 輪光柄 2本 木製、輪光装着用具が上部に付く。

㊦ 清光童子秋夢童子雪幻童女智仙童女西要法子妙泰一家法界

順誓宗故真智智運空山正雲法界

菩薩面の内、地藏形面については、他の菩薩面のように面の後部で輪光を直接に装着できないため、地藏役の衣装の奥襟の内側から、輪光を取付た木製の柄を背部に差込んで取り付けている。

24 ㊦ 奉寄進文殊菩薩輪光施主高田赤滝屋伊左衛門

新庄大黒屋彦兵衛

㊦ 爲二親菩提光誓壽然釈安譽泰然釈順清

光岳浄薫利薫清誓浄言先祖代々

- 1 地藏菩薩輪光柄 長八七・八 幅三・一 厚〇・六 (墨書銘文) 地藏大菩薩輪光柄 護念院什物
- 2 龍樹菩薩輪光柄 長八七・四 幅三・一 厚〇・六 (墨書銘文) 龍樹菩薩輪光柄 護念院什物

25 ㊦ 奉寄進地藏菩薩輪光施主磯野吉川太四郎

丸柏村庄右衛門

輪光収納用木櫃

㊦ 清誓浄鑑釈妙雲教春教善妙周妙順

(墨書銘文)  
〔蓋表〕 北座十六軀分

26 ㊦ 奉寄進竜樹菩薩輪光施主高田唯心院檀那中

二十五菩薩輪光櫃

護念院什物

〔櫃底〕 廿五菩薩輪光拾六軀

憲譽代

〔蓋表〕 南座十二軀分

二十五菩薩輪光櫃

護念院什物

〔櫃底〕 二十五菩薩輪光拾二軀

憲譽代

### (3) 輪光修理

平成十五年度に実施された輪光修理については、選定保存技術「鍔金具」保持者に認定されていた三代目森本安之助氏を代表とする（株）森本鍔金具製作所（京都市）にて行われた。

輪光は銘文から宝暦十二年の制作と考えられ、制作後長年月にわたり使用されたことによる、部分的破損箇所も多く見られたものの、二十六点すべてについて修理して使用することについては可能と考えられた。

修理内容は、錆等により表面全体が黒ずみ汚れた状態であったため、錆を落として鍍金錆止めを行い、接合部の銕が外れたところや、その他欠損箇所の部分補修が行われている。

（菩薩面及び輪光写真 佐藤右文、その他写真・文責 吉岡昌信）



4号 菩薩



3号 菩薩 (勢至)



2号 菩薩 (觀音)



1号 菩薩 (普賢)



8号 菩薩



7号 菩薩



6号 菩薩



5号 菩薩



12号 菩薩



11号 菩薩



10号 菩薩



9号 菩薩



16号 菩薩



15号 菩薩



14号 菩薩



13号 菩薩



20号 菩薩



19号 菩薩



18号 菩薩



17号 菩薩



24号 菩薩



23号 菩薩



22号 菩薩



21号 菩薩



28号 天童



27号 天童



26号 僧形 (龍樹)



25号 僧形 (地藏)





振鼓



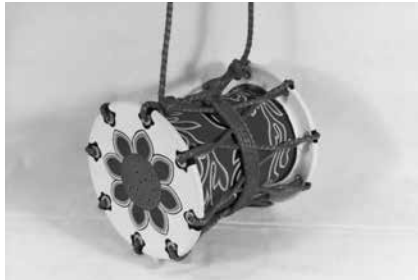
鶏婁鼓



太鼓



沓鼓



鞞鼓



馨



小銅鉢



大銅鉢



上：篳篥・中：横笛・下：角笛



華籠



火舎香炉



方形香炉



拍板



箏



天蓋



地藏菩薩等の輪光を取り付ける柄



蓮台



法如(中将姫)化生坐像 延宝4年(1676)



錫杖



宝珠



笙



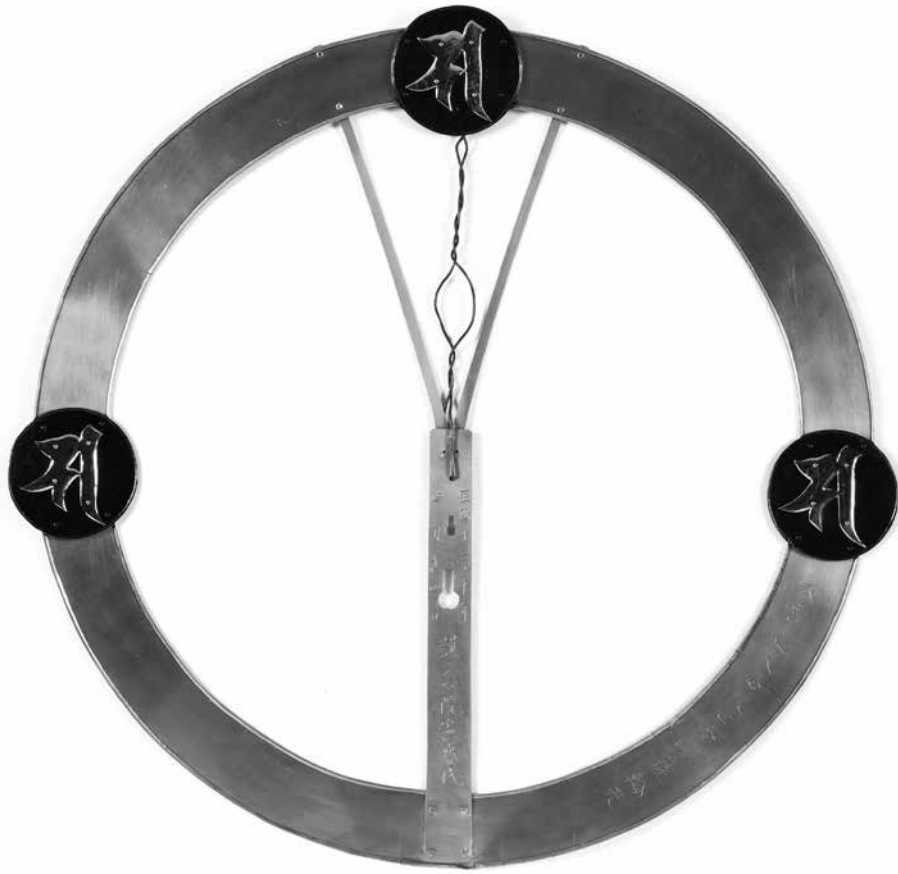
箏



鉦鼓



琵琶



輪光（觀音菩薩）



輪光（勢至菩薩）



二十五菩薩輪光櫃 身



二十五菩薩輪光櫃 蓋



二十五菩薩輪光櫃 身



二十五菩薩輪光櫃 蓋

## 第一章 木造阿弥陀如来立像と木造来迎会所用面

### 1 はじめに

来迎会（迎講・練供養）に関わる主な美術工芸品（彫刻）として、當麻寺本堂須弥壇上に安置される木造阿弥陀如来立像一躯および、護念院が保管する木造来迎会所用面二十八面（菩薩面二十四面、僧形面二面、天童面二面）の二件が挙げられる。木造阿弥陀如来立像については、従来、一般的な仏像と同様にみなされ特に注目されることもなかったが、近年の研究によって、像の中に人が入る特殊な構造につくられた来迎会の本尊であることが明らかとなった。一方、来迎会所用面は平成十六年まで用いられてきたが、模造が完成したことを機に、文化財として保存されることとなった。阿弥陀像は平成十年三月二十日付け、来迎会所用面は平成二十九年二月十四日付けで、それぞれ奈良県指定有形文化財の指定を受けている。以下に指定台帳<sup>3</sup>を参考にこれらの概要を記す。

### 2 木造阿弥陀如来立像

#### (1) 形状

本体は、螺髪は粒状。肉髻珠、白毫相（毛筋左旋）をあらわす。耳朶環状。三道相をあらわす。覆肩衣・衲衣・裙を着ける。覆肩衣は右腕をおおって袖状に垂れ、右胸下方でたるんで衲衣にたくし込まれる。衲衣は左肩をおおい、上縁を大きく折り返して右腋を通り、端をふたたび左肩に懸ける（偏袒右肩にまとう）。左手垂下、右手屈臂し、ともに掌を前に向け、第一指・第二指を捻じめる（来迎印を結ぶ）。左足をわずかに前に出して立つ。

光背は、放射光。頭光中心に八葉蓮華をあらわし、二重の光輪（紐二条）を廻す。光条は八方（五条と三条を交互に配す）。支柱を蓮華座上に立てる。

台座は、四重蓮華座。九方四段葺（弁脈彫出）、請座、反花（十六方単弁）、框（八角形）二段からなる。

#### (2) 品質・構造

檜材、寄木造り、玉眼（水晶嵌入）、布張錆下地漆箔、彩色。

本体は、頭頂より衲衣下端にいたる部分と、裙以下の部分が分離し着脱可能な構造になる。頭頂より衲衣下端にいたる部分は、頭体別材で、頭部は左右二材で挿し首とする。体部は四方から各一材を寄せる箱組式木寄せになり、左袖内側に一材を矧ぐ。両手首先挿し込み矧ぎ。像内はきれいに浚い、布張りし、補強のために胸及び膝の高さで鉄帯（幅約一・五cm）を各々打ち廻す。背面側の腰部と大腿部の各左右二箇所鉄帯を取付け、左右とも上下の鑲に二本の麻紐を通して担ぎ紐とする。胸部に十字型の覗き孔（幅〇・七cm）を削り抜くが、現状、表から卍型の切紙を貼って塞ぐ。裙以下の部位は、前面は足柄を含み左右二材、後面は左右三材をそれぞれ寄せ、内割りする（布張りは施さない）。像底は上げ底式に刳る。両足先各一材。正面と背面に各々鉤形金具を左右二箇所打ち、衲衣の下端を受ける。表面は頭髪に緑青、肉髻珠・唇に朱。玉眼は黒目墨、周縁朱、目頭・目尻緑青。肉身・着衣は布張錆下地漆箔とし、さらに着衣には彩色文様を施す。衲衣の表の内区は雷文繫ぎ地に丸文散らし（丸文は中心に八葉を置き、四方に斜面花、その間に宝相華の蕾を配す）、外区は蓮華唐草文帯を矢羽文で縁取る。衲衣の裏は宝相華文。覆肩衣は表裏ともに内区を蔓唐草文の地とし六花形団花文を散らし、外区に花文入り亀甲文を配す。裳の内区は赤色系花文とし、縁は漆箔地に墨で花唐草文を付け立て風に表す。

光背は檜製、蓮肉一材（蓮子彫出）、薬・蓮弁・内光輪を一材から透彫りする。外光輪は六材矧寄せ、外縁に金銅板を打ち廻す。光条（竹製）各一材製（泥地金泥、後補）。頭光は、蓮肉中央の柄受金具と後頭部に残る鉄鑲や孔から、当初は後頭部に取付けたと見られる。

台座は檜材製、蓮弁各打付け。蓮肉天板前後四枚矧ぎ。受座・反花・框二段はそれぞれ八方矧寄せ、下框上面四箇所に吊鎖金具を取付ける。蓮肉・蓮弁を漆箔とする他は漆塗り。蓮肉内部に寛永通宝十数枚、紙本墨書仏説阿弥陀經（折本装、江戸時代）を納める（別保存）。台座裏に可動式の回転棒（長七一・一cm、径八・〇cm、櫛材）二本を前後に取付ける（前方は欠失）。台座は後補であるが蓮華部は古作と見られる。

(3) 修補・損傷等

胸部の卍字形の貼付け紙、像内の補強枠木、光背支柱（角柱各面取、透漆塗）、台座、以上各後補。現状、頭光は九十度回って支柱につく。衲衣は正面大腿部の位置で後世切断されたが、現状再び打付けられている。同じく背面の衲衣下端を受ける鉤形金具二個、欠失。

(4) 銘記等

光背支柱の背面に次の刻銘（朱漆入）がある。

忠兵衛

大坂 大工太郎左衛門 六左衛門

てんま九郎衛門

(5) 説明

本堂（曼荼羅堂）の須弥壇上、當麻曼荼羅厨子の右横に安置される。近年の研究で来迎会の際に像内に人が入り、歩み出て中将姫を迎えた来迎会本尊であったことが明らかとなった。享祿四年（一五三二）作の『當麻曼荼羅縁起』（當麻寺所蔵）には本堂の縁に出ている阿弥陀像の姿が見え、同年作の『証空上人絵伝』（兵庫県浄橋寺）には、現在と同じ須弥壇上厨子右横に安置される阿弥陀像の様子が描かれている<sup>4</sup>。

本像は、頭頂より衲衣下端にいたる本体部分と、裾以下の脚部が分離し、着脱可能な構造になる。迎講の際は、脚部は蓮華座上に残し、衲衣下端から上の本体部の中に人間が入り、像内に付けられた担い紐で背負い、胸部に開けられた孔から覗いて歩行したものとみられる。像内に人が入る空間を確保するため、箱型の合理的な木寄せを行い、像内は極めて肉薄に内割り、軽量化も図っている。

その構造は、抑揚を控えた寸胴な体軀や、彫りの浅い平明な衣文表現など、作風にも少なからず影響しているものとみられる。胸の左右で着衣のたるみをあらわし、脚部の中央に衣の襞を集める形式は、仏師快慶の晩年の三尺阿弥陀の形式を踏襲している。漆箔の着衣に彩色で文様を施していることも注目される。目鼻立ちが横に広がる茫洋とした表情や、着衣の大らかな文様などには、時代の降下する要素も看取され、制作年代は鎌倉時代中期を遡るものではない。像内に人が入る構造の阿弥陀像は、鎌倉時代中期に、裸形着装の迎講本尊に代わって考案されたとされ、本像のほかに米山寺（広島県）、弘法寺（岡山県）、誕生寺（岡山県）、大念佛寺（大阪府）の四例が知られている。本像はそれらの中でも年代が古く、比較的保存が良好な作例として貴重である。

(6) 法量 (cm)

本体

像高二一〇・五／髮際高一九一・〇／白毫高一八八・〇／頂々顎四三・七／髮際々顎二三・五／耳張二九・四／面幅二〇・二／面奥三〇・三／袖張五七・五／胸厚三三・九／腹厚三七・四／膝張六四・九／裾張五一・六／足先開（外）三三・四／同（内）一三・四

光背

総高二七七・〇／頭光高一七四・三／放射光張一五四・〇／頭光径六四・五／蓮肉径二〇・二

## 台座

総高四五・三／下框高七・七／同幅一一六・〇／上框高六・三／同幅八八・〇／反花高五・七／蓮華高二四・〇／同幅七五・〇

## 3 木造来迎会所用面二十八面（菩薩面二十四面、僧形面二面、天童面

### 二面）

#### （1）形状

## 菩薩面（一～二四号）

高髻を結う。頭髮は疎ら彫りのうえ、毛筋彫り（三・九号を除く）。天冠台をつける。鬢髪耳を互る（一一・二四号を除く）。白毫相。耳朶環状。二・六・一七・二四号は眈を下げた笑形とし、二・三・一七号は上歯を現す。頭上に宝冠、後頭部に覆布をつける。

## 僧形面（二五・二六号）

円頂。白毫相。耳朶環状。

## 天童面（二七・二八号）

二七号は角髪、二八号は髻をそれぞれ結う。二七号は天冠台をつける。

耳朶不貫。

#### （2）品質・構造

## 菩薩面

面部と天冠台上の頭頂部は別につくり、紐で取り付ける。材質は確認できるものは檜材。面部の構造は、一材製のもの、正中矧ぎのもの、耳を含む側面と顎を別材矧ぎとするものなどがみられるが、後補の仕上げに覆われ詳細は不明。瞳と鼻孔のほかに眉や口に貫通孔を開けるものがある。頭頂部と髻は別材製で、それぞれ一材製や前後矧ぎ、左右矧ぎのものがみられる。髻に内削りを施し、頭頂部中央に孔を設け貫通させるものがある。表面は錆下地黒漆地漆箔。下地

に布張りが認められるものがあるが、詳細不明。頭髮は群青、髮際緑青、眉・髷墨描。白目白、瞳の輪郭朱、目尻・目頭群青。唇朱。裏面は黒漆塗りで、七・九号は朱漆塗りとする。

## 僧形面

頭頂、側面、顎を別材矧ぎとする。瞳と鼻孔に貫通孔を開ける。表面は白下地彩色。肉身白色。頭髮は二五号は薄緑色、二六号は灰色。眉及び眼の輪郭墨描、瞳の輪郭朱、目尻・目頭群青。唇朱。裏面は黒漆塗り。

## 天童面

面部と後頭部は別につくり、紐で取り付ける。面部の構造は概ね僧形面に準じる。二七号の角髪、二八号の髻、各別材矧ぎ。後頭部は左右二材矧ぎ。表面は肉身白下地白肉色。眉、髷墨描。眼の輪郭墨描、白目白、瞳の輪郭朱、目尻・目頭朱。唇朱。頭髮及び裏面は黒漆塗り。

#### （3）修補・損傷等

菩薩面及び天童面の銅製宝冠、天童以外の面の後頭部を覆う麻布、天童面の天冠から垂下する房飾り、表面の漆箔・彩色及び裏面の漆塗（江戸時代のものを除く）、以上全て後補。白毫は亡失または後補。菩薩面のなかに、頭頂部や髻を他の面のもので取り違えて付けるものや、天冠台を彫り直すもの、地髪部・髻の一部を欠損、補修するものがある。

#### （4）説明

当寺の来迎会において、平成十六年まで用いられていた面である。菩薩面二十四面、僧形面二面、天童面二面の二十八面が伝わり、同寺の子院である護念院が管理する。中世から近世までの異なる時代の面が混在し、鎌倉時代が四面、南北朝から室町時代が二十面、江戸時代が四面と推定される。本面は昭和五十年に元興寺仏教民俗資料研究所が行った「当麻寺来迎会民俗資料緊急調査」で初めて全容が明らかとなった。

鎌倉時代の面は菩薩面のうちの四面（一・二・三・八号）で、一号と八号は切れ長の眼で頬の引き締まった顔立ちをみせ、二号は二重瞼で自然な笑みをたたえ、三号は伏し目の穏やかな表情につくるなど、いずれも生彩のある作風を示す。昭和五十八年の保存修理の際に、六号面（面部は室町時代）の髻内割り面に建保三年（一二一五）に範忠が作った旨を記す墨書銘が確認された。面の制作年代はもちろん、當麻寺における来迎会の始まりの時期を考えるうえでも重要な発見といえる。

一八・二一号は一・八号の系統に忠実に倣った南北朝時代の作とみられ、室町時代以降の面では、やはり一・八号の系統を引くとみられる五・一四号や、天冠台から髪が垂下する一〇・二〇号などが堅実な作風を示す優品として注目される。鎌倉時代の古面の構造は面部を概ね一材製とし、髻に内割りを施し頭頂部の孔に貫通させるのを基本とし、室町時代以降は、側面や顎に別材を矧ぎ、髻は内割りのないものが主となる。作風は多様だが各時代を通じて二面一組で類似する例が多く見いだされる点は留意される。

僧形面は二面同一の作で、平明な作風と箱型に材を寄せる構造から、南北朝から室町時代の作と推定される。天童面も二面同一の作になり、面部と別に後頭部をつくる形式に特徴がある。童子としては面長で世俗的な面貌から室町時代の作と推定される。

鎌倉時代以前に遡る来迎会関係の面は、浄土寺ものをはじめいくつか作例が知られているが、本面は鎌倉時代から修理や補作を重ねながらも二十八面が揃っている点で貴重であり、今日まで連綿と続く当寺の来迎会の歴史を伝える意味においても高い価値を有するものである。

【六号面 髻内割り面墨書銘】

（左材）

建はう三年

二月八日あひと

の、所んしやう

つるか所んしや

う

（右材）

範忠ツクル

ほうかいのすし

やうのため 範

所んしやう

良

【二十一号面 髻内割り面墨書銘】

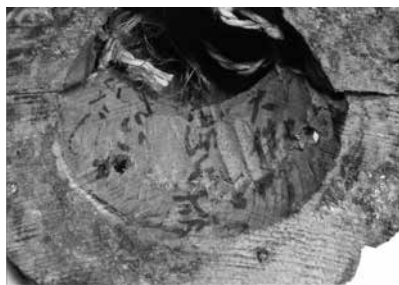
（後材）

大仏師

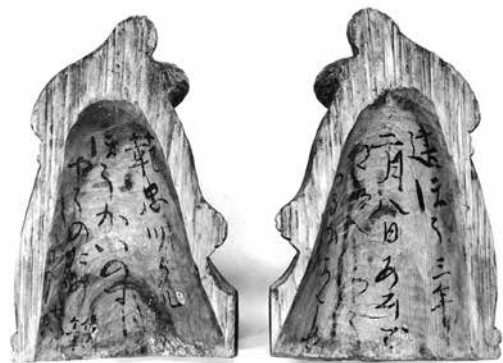
清水式部

さいこ

いたし



21号面 髻内割り面墨書銘



6号面 髻内割り面墨書銘



#### 4 まとめ

来迎会との関わりの中で本尊阿弥陀如来像及び来迎会所用面に残されている課題についてまとめておきたい。これらは美術作品としてはもちろん、当寺における来迎会の歴史を知るための参考資料として高い価値を有することは言を俟たない。六号面の髻より建保三年（一二二五）の墨書銘が確認されたことは、当時における来迎会の創始の時期を示唆する意味で重要である。同五年（一二一七）には當麻曼荼羅の第一転写本とされる建保曼荼羅が制作されているが、本面もそのような當麻曼荼羅に対する信仰の高まりの中で整えられたと見る見方もある。ただしこの髻が付く面本体は室町時代のものであり、現存の面で鎌倉時代に遡るものはわずかに四面を数えるのみで、それらは互いに作風を異にしている。二十八面全体としても、いわば寄せ集めのようなばらつきを見せており、中世に遡る面は全て表面が塗り直されていることが、それぞれの面の評価を一層困難にしている。X線透過撮影等の光学的手法を用いた詳細な調査が俟たれる。

来迎会の本尊と所用面は、浄土寺の例のように、本来一具として整えられたものと推定されるが、本尊と類似する作風を示す面は現存するものの中には、ただちには見いだしがたい。本尊の制作年代は作風や構造技法からみて髻の銘に記される建保三年までは遡らず、証空上人によって当寺が復興される仁治三年（一二四一）から寛元三年（一二四五）頃に求める説もあるが、さらに降る可能性も考えられる。来迎会本尊や二十八の面それぞれの制作・修復の時期を、當麻曼荼羅や本堂の復興といった当寺の歴史とどのように関連付けて考えるかは今後の課題である。

1 田辺三郎助「行道面」（『大和古寺大観 第二巻 当麻寺』、岩波書店、一九七八年）。解説の中で阿弥陀如来像に触れ、注に毛利久氏執筆分として「恐らく、室町時代末か桃山時代より遡るものではなからう」とする。

2 關信子「迎講阿弥陀像」考Ⅰ—当麻寺の来迎会と弘法寺の迎講阿弥陀像—（『仏教芸術』二二二号、仏教芸術学会編、毎日新聞社、一九九五年）、同「迎講阿弥陀像」考Ⅱ—当麻寺の迎講阿弥陀像—（『仏教芸術』二二三号、仏教芸術学会編、毎日新聞社、一九九五年）、同「迎講阿弥陀像」考Ⅲ—米山寺と誕生寺の迎講阿弥陀像—（『仏教芸術』二二四号、仏教芸術学会編、毎日新聞社、一九九六年）、同「迎講阿弥陀像」考Ⅳ—迎講阿弥陀像造立の背景と浄土教芸術に与えた影響—（『仏教芸術』二二八号、仏教芸術学会編、毎日新聞社、一九九六年）、同「迎講・来迎会・ねり供養—主役の迎講阿弥陀像を中心に—」（『極楽へのいざない—練り供養をめぐる美術—』、龍谷大学龍谷ミュージアム、毎日新聞社・京都新聞社編刊、二〇一三年）

3 「木造阿弥陀如来立像」（奈良県指定文化財 第三十九集）、奈良県教育委員会、一九九九年、「木造来迎会所用面」（奈良県指定文化財 第五十三集）、奈良県教育委員会、二〇一八年）

4 ただし、台座の框（後補）の底面には二本のコロ（回転棒）、上面四箇所には吊環が付けられていることから、「引きぼとけ」の伝えがある通り、いつの頃からか人が入ることをやめて台座ごと像を縁まで引き出すようになったものとみられる。

5 田辺三郎助「来迎会の行道面について」（『当麻寺来迎会民俗資料緊急調査報告書』、元興寺仏教民俗資料研究所編、一九七五年）

6 山口隆介「菩薩面」（『當麻寺—極楽浄土へのあこがれ—』、奈良国立博物館、二〇一三年）

7 注2 關論文

（神田雅章）

當麻寺 木造来迎会所用面

番号	種別	形状の特徴	時代(面部)	縦／幅／奥 (cm)	構造	保存状態	銘文	備考
1	菩薩(普賢)		鎌倉	23.3/26.6/14.6	左耳半ばで別材矧ぎ。頭頂部1材、中央に孔(髻内剝りに貫通)。髻左右2材、内剝り。	白毫及び髻後方欠。		
2	菩薩(観音)	笑形、現歯	鎌倉	24.2/16.2/12.5	1材製か。眉に孔。頭頂部及び髻各1材。	白毫欠。天冠台を削り、上から別材貼付け。		
3	菩薩(勢至)	現歯、毛筋彫りなし	鎌倉	23.2/13.5/13.8	両耳前で別材矧ぎ。白眼を含む眼全体と眉に孔。頭頂部及び髻各1材。	天冠台及び頭髪部彫直し。白毫、両耳朶、顎、各新補。頭頂部後方欠。		S59修理
4	菩薩		室町	25.8/21.1/14.0	1材製。頭頂部及び髻各1材。頭頂部中央に孔。	天冠台を削り、上から別材貼付け。白毫新補。頭頂部鎌倉時代。		S58修理
5	菩薩		室町	24.2/21.5/13.2	1材製、口に孔。頭頂部1材。髻左右割放し。	白毫、髻先端と頭頂部周縁、各新補。髻鎌倉時代。	面裏朱漆銘	S58修理
6	菩薩	笑形	室町	26.3/23.0/16.0	両耳半ばで別材矧ぎ。頭頂部前後2材矧ぎ。髻左右割放し。	白毫及び髻後方小矧付け材新補。髻は建保3年(1215)	髻内剝り面墨書銘 面裏朱漆銘	S58修理
7	菩薩		江戸	27.1/22.2/15.0	側面及び顎別材矧ぎ。面裏朱漆。頭頂部前後3材矧ぎ。髻1材。	白毫欠。頭頂部及び髻室町時代。		
8	菩薩		鎌倉	24.2/21.0/14.5	正中矧ぎか。頭頂部1材。髻1材。	白毫欠。		
9	菩薩	毛筋彫りなし	江戸	24.4/20.8/13.6	側面及び顎別材矧ぎ。面裏朱漆。頭頂部1材。髻左右2材。	白毫欠。髻部材離脱。		
10	菩薩		室町	22.6/19.3/13.0	1材製か。口に孔。面裏上方3箇所窪み。髻前方左右2材。	白毫後補、頭頂部新補。	面裏朱漆銘	S58修理
11	菩薩	鬢髪互らない	室町	26.4/19.0/12.4	面部と頭頂部は共木で割放すか。口に孔。髻前方左右2材、後方1材、内剝り。	白毫、顎周り、頭頂後方、各新補。	髻内剝り面墨書銘	S58修理
12	菩薩		室町	24.6/20.3/12.7	1材製。頭頂部1材。髻左右2材。	白毫欠、天冠台削り別材貼付け、口の孔を塞ぐか。		
13	菩薩		江戸	24.2/22.0/14.0	側面と顎別材矧ぎ。髻1材。	白毫、顎周り、耳朶、面裏黒漆、各新補。髻室町時代。		S58修理
14	菩薩		室町	24.0/21.8/14.1	1材製、口に孔。頭頂部1材。髻左右2材、内剝り。	白毫、髻後方、頭頂部後方、各欠。髻鎌倉時代か。		
15	菩薩		室町	23.1/22.3/14.8	両耳前で矧ぐ。頭頂部裏面朱漆。口に孔。	白毫及び髻前方欠。	面裏朱漆銘	
16	菩薩		室町	23.8/20.5/14.5	正中矧ぎか。頭頂部前後2材。髻1材。	白毫及び頭頂部後方欠。		
17	菩薩	笑形、現歯	室町	26.2/21.6/15.3	両耳半ばで別材矧ぎ。頭頂部前後2材。髻1材。	白毫後補。右目尻で割損。		
18	菩薩		南北朝	24.1/20.4/14.0	正中矧ぎ。頭頂部1材。髻1材。	白毫新補。	面裏朱漆銘	S58修理
19	菩薩		江戸	27.1/22.6/14.2	側面及び顎別材矧ぎ。頭頂部前後2材、中央に孔。髻左右2材。	白毫、天冠と頭頂の一部、髻の小矧付け材、各新補。頭頂部及び髻鎌倉時代。	面裏朱漆銘	S58修理
20	菩薩		室町	22.2/19.6/13.0	1材製、口に孔。頭頂部左右2材、中央に孔。髻1材。	白毫欠。髻前後逆。頭頂部鎌倉時代。		
21	菩薩		南北朝	23.8/20.3/15.0	1材製。頭頂部1材。髻前後2材。	白毫欠。天冠台を削り上から別材貼付け。	髻内剝り面墨書銘	
22	菩薩		南北朝	23.8/20.3/14.8	側面および顎別材矧ぎか。眉と口に孔。頭頂部前後2材。髻前後2材、内剝り。	白毫及び天冠台の一部新補。眉の孔を塞ぐ。口の穿孔後補。		S58修理
23	菩薩		室町	24.7/20.7/14.7	両耳で矧ぐか。頭頂部1材。髻1材。	白毫及び左耳朶欠。髻前後逆。	面裏朱漆銘	
24	菩薩	笑形、鬢髪互らない	室町	22.5/21.6/14.2	正中矧ぎか。頭頂部前後2材。髻1材。	白毫及び頭頂部後方新補。	面裏朱漆銘	S59修理
25	僧形(地藏)	頭髪薄緑色	南北朝～室町	29.5/22.6/16.0	額、側面、顎で矧ぐ。	白毫後補。彩色剥落。		
26	僧形(竜樹)	頭髪灰色	南北朝～室町	29.7/22.2/14.6	額、側面、顎で矧ぐ。	白毫後補。彩色剥落。		
27	天童	角髪を結う	室町	25.7/21.1/13.8	頭頂部及び側面別材矧ぎ。角髪別材。口端に孔。後頭部正中矧ぎ。	彩色剥落。後頭部周縁の一部新補。		S58修理
28	天童	髻を結う	室町	24.2/18.3/12.6	頭頂部及び側面別材矧ぎ、口端に孔。髻別材。後頭部正中矧ぎ。	彩色剥落。髻欠損部新補。		

種別：観音・勢至・地藏の名称は延宝6年(1678)の寄進銘を有す面箱に見える。

保存状態：昭和58・59年の(財)美術院による修理は「新補」と記した。

江戸時代の面を除き、表面の漆箔・彩色、裏面の漆塗は全て後補。

菩薩面の頭頂部と髻は、補作のほか他の面との取り違えがあり、ここでは面部より古いものについてのみ記した。

銘文：6号、21号にみえる作者については各々不詳。他の面の銘はいずれも近世の寄進銘。大方が剥落により判読不能。

<参考文献>『当麻寺来迎会民俗資料緊急調査報告書』(元興寺仏教民俗資料研究所編、国書刊行会、1975年)



4号 菩薩



3号 菩薩 (勢至)



2号 菩薩 (觀音)



1号 菩薩 (普賢)



8号 菩薩



7号 菩薩



6号 菩薩



5号 菩薩



12号 菩薩



11号 菩薩



10号 菩薩



9号 菩薩



16号 菩薩



15号 菩薩



14号 菩薩



13号 菩薩



20号 菩薩



19号 菩薩



18号 菩薩



17号 菩薩



24号 菩薩



23号 菩薩



22号 菩薩



21号 菩薩



28号 天童



27号 天童



26号 僧形 (龍樹)



25号 僧形 (地藏)



同  
頭部  
正面



木造阿彌陀如來立像  
全身正面



同  
全身  
背面



同  
全身  
左側面



同  
全身  
右斜側面

## 第二章 當麻寺二十五菩薩來迎会の装束

### 1 來迎会装束の概要

藤原鎌足の曾孫になる藤原豊成の娘・中将姫が阿弥陀仏を拝することを願っていたところ、比丘尼姿の阿弥陀如来と觀音菩薩が現れて蓮の茎から藕糸を採って五色に染め、一夜にして一丈五尺の『當麻曼荼羅』を織り上げた(天平宝字七年(七六三))と伝えている。また曼荼羅の教義で信仰を深めた中将姫は二九歳の時、願が叶って阿弥陀仏と二十五菩薩に伴われて西方極樂浄土に昇天したといわれる。また『古今著聞集(一三世紀中)』では中将姫が一夜にして『當麻曼荼羅』を織り上げたと伝える。こうした中将姫のように聖衆に導かれて極樂浄土へ昇る様子を具現化した來迎会行事が平安時代後期頃に始まったといわれ、鎌倉初期には諸寺で催されていたらしい。そんな迎講が當麻寺で始まるのは寛喜元年(一二二九)に証空上人が当寺を参詣して『當麻曼荼羅』を拝したことに発端があるとされ、當麻曼荼羅の縁起を著した『當麻曼荼羅縁起絵巻(神奈川光明寺所藏)』を再現して、仁治三年(一二四二)から寛元三年(一二四五)にかけて「被り仏」の迎講阿弥陀を造立して來迎会が始まったと伝えられている。

各地に遺されている來迎会行事そのものの発生や因縁については一様でないが、『栄花物語』巻第一五「うたがひ」に「六波羅密寺・雲林院の菩提講などの折節の迎講などにおおし急がせ給ふ」と見ることができ、記録から二九例が確認されると共に今も全国に一五例近くが遺っている。そのうち六例が鎌倉時代、三例が室町期から続いていることも確認されている。因みに當麻寺では昭和三十年代の曼荼羅堂の修理に際して、平安期から鎌倉前期のものとして推せる四〇枚余の板後背と一〇枚余の台座が見つかり、往生会に利用したものでないかと考えられていて當麻寺においても鎌倉期に來迎会が始まっていたら

うと考えられている。そうした迎講の様子が当寺伝来の『當麻寺縁起絵巻・三卷(土佐光茂筆)』の下巻・中将姫往生の場に続く最終七段に描かれている。

ただ七段は絵巻が完成した享祿四年(一五三一)十月上旬以後の翌年に描き加えられたもので、筆者の三条西実隆が日記『実隆公記』にそれを記している。絵巻には當麻寺迎講の当時の様子をよく著していると思えるのだが、そこに描かれる聖衆の姿は実際に仮装をして練り歩いているように見えない。当時に描かれていた『阿弥陀來迎図』などの聖衆図を做って描いているようで、菩薩は天衣を翻し、また地藏尊も中衣袈裟を纏って当時の仏画や仏像を写して描かれているようである。こうした図様から直ぐに現在の來迎会装束の形を繋げられず、古い來迎会の聖衆姿を彷彿させてくれない。仮に絵巻のような姿で仮装して來迎会が行われたならば、胸元を露にして裸身に天衣を纏う菩薩の行道姿を現世の衆徒が演じれるとは思えない。

他に聖衆の仮装する例を探すと、既報にあるように『栄華物語』巻一六「もとのしづく」に似た記述が見られる。「この小法師ばらは宿直姿なり、その様の装束を、殿よりも賜はせける。念仏始まりて、廻り読む様あはれに尊し。こゝろたち皆聴衆結衆にて、長床に候ふ。僧綱達も、皆各の師達いとうつくしと笑みまけて見たり。なりどもは、あるは紫の織ものの指貫どもを、濃紫に薄紫にて、丈に二尺ばかり踏みしだき、あるは浮文・固文、あるは唐綾などを著せたり。薄鈍の桂、糊張などの綾、無文、あるは固文の織物、また今様のつやつやなどいふをぞ六つばかりづつ、綿薄らかにて著せたる。薄ものの衣ども、あるは薄鈍、紫香などしても染めたり。香のかうばしき事限りなし。衣にひかれてありき舞ふ程、いとよだけけなり。頭には花を塗り、顔には紅、白い物をつけたらんやうなり。あはれにうつくしう尊き様、小き地藏菩薩はかくや在すらんと見えたり」とあり、法成寺西北院供養の不断念仏に際して地藏菩薩に仮装する宿直姿の念仏僧の姿が記述されている。色美しく幾重にも襲ねた桂の上へ

指貫袴と袍衣を着た有欄の僧衣を想定でき、平安期から鎌倉期にこうした華麗で艶やかな仮装がされたことの想像に難くはないが、現在の當麻寺に見られる来迎会装束との相違からして繋がりを探れない。

今も迎講で練り供養を拝見する信者達は恭しく真近で仰視してお渡りの様子を見守って荘嚴な雰囲気浸っている。つまり来迎会は極楽浄土から菩薩衆が娑婆へ降臨し、そして再び昇天する迄の異次元世界の様子を具体化しているのであり、極楽と娑婆を往来する菩薩衆の姿は此の世にない極めて華麗な出で立ちをして現れる。そうした特別な状態を表わした大層な装束を用いられることに重要性がある。必ず豪華で華麗な装束を用いて迎講が行われてきたことに相違ないのがいえよう。しかし残念ながら古くのこうした来迎会の様子を記した資料がなく、着装の実際について全く紐解けない。当初の衣装がそのまま後世に伝わらないのは当然で、また迎講衣装も種々にあつて定形や統一があつた訳ではないが、その実際と経緯は全く把握できない。とくに現在の當麻寺来迎会では地藏菩薩以外の聖衆はいわゆる唐風の胡服姿、また古く渡来の紅毛人が着ていた唐人服や襦袢と呼ばれる盤領の上衣を用いて近世期以降に迎講が行われてきたことが今に遺る装束からいえるが、その経緯も察し得ない。寛文十二年（一六七二）の『當麻曼荼羅口訣』當麻寺蔵に「脚供養」や、寛永十年（一六三三）『大子集』の「當麻寺の法事をいそげねり供養」、『大乘院自社雑事記』の長祿三年（一四五九）四月十日「今日當麻寺迎講云々、毎年不退法会云々」とあるも、装束について言明はない。

さて現在、護念院が所蔵する二十五菩薩来迎会装束は、行事当日に着る現用装束類一式と、そしてこの現用装束類が新調される以前に使われていた旧用装束類一式が保管されている。既調査によると旧用装束類は江戸時代中期後半から後期に掛けて調整されたもので、これらが近代を通して平成に懸かる近時まで長年に亘って使い続けられてきた。現用の装束は古くなった旧用装束に替え

て平成四年頃から順次に新調された装束類で、素材に近代の帯地を再利用して調整されたものが多い。基本的にはこの新旧の装束二様が当寺の来迎会装束として遺るものの全てであり、現用と旧用装束は全く同形に作られており、旧用に倣つて現用を調整したことの想定は難くない。製作素材についても旧装束類が仏事用の法衣錦織や金欄織の別誂えて高価な装束を用いた仕様に施主達の熱心な信仰深い背景が窺える。しかし他方の現用装束は明治から昭和戦前の婚礼用丸帯織物を利用しており、既に得られなくなった格調ある古の高級織物を収集したものと考えられ、素材調達の苦勞と寄進本来の高潔な姿がここにも覗かれる。新装束が古い織物の再利用といえども特別な格調を求めたところに信仰の拠り所を感じる。

## 2 現用装束

来迎会の行事で用いられる装束類は寺内の護念院で所蔵し、保管管理と共に修理、新調についても当院で行ってきたと伝える。本調査は護念院に伝存するこれら来迎会の現用装束と旧用装束類の在庫の確認に加えて、製作素材と仕様および伝来についてを概要調査したものである。なお旧用の装束類については「昭和四十九年度文化庁所管国庫補助事業」として採択され、詳細な調査が行われて昭和五十年に『当麻寺来迎会民俗資料緊急調査報告書』が刊行されている。

その既報告には当時に用いられていた旧用装束の詳細が記されており、今調査も旧装束については既刊報告書の内容を前提として進め、加えて現在の来迎会行事に用いる現用装束類の詳細を付している。

### (1) 現用装束の種類と製作経緯

現行の来迎会に利用される装束を種類別にみると、まず観音、勢至、普賢の三菩薩の装束が他の諸菩薩の装束と別にあり、他の二十一の諸菩薩の装束、ま

た地藏と竜樹の二装束、さらに天童の二装束が保管されている。

三菩薩と諸菩薩の装束は利用および保管上から区別けされているものの両者の形態は全く同じで、円領に狭く長い筒袖を持った唐様の胡服形式の上衣に、一枚布の形に作られた裳形式の下衣を腰に巻いて用いる上下衣が別になる衣料である。そしてこの上下衣の表着の上へ細長い紐状緒の天衣と横五条の袈裟を肩から垂れ懸けている。他に肌着として着る下着、足袋にあたる襪と弓賭と称する白手袋、さらに行道面の下に頭へ被る頭巾、首や頭に巻く汗取り布が各自に付き、それらを一括して菩薩衆行事装束の一具として各々に準備される。また地藏菩薩は裾端に欄付きの有欄僧袍と袴を着用し、竜樹は作務衣と裁着袴を着用した上へ無欄の僧袍を着る。菩薩と同じく頭巾と汗取り布、襪、弓賭で一具とする。天童は袴に羽織のような垂領の僧衣を用いている。聖衆らは全員が白色肌着を着け、各衣装の隅裏部分に墨やマジックインキで仮番号を記して一揃いにして纏めているが、必ずしも組み合わせは厳密でなく、衣装の彩りと模様を取り合わせて揃え、その都度に用いているようだ。現に衣装の隅部に記される仮番号が幾度も書き直されている例が多くみられ、これらが数個の保管箱に分けて容れる。

現用装束を新調した時の話を現任職から聞くと、住職の御母堂が生前に江戸期から使い続けて装束の損傷の大きいことに心を痛め、一念発起して新装束の調整を思い立たれたとする。しかし装束を新調するといっても周知のように来迎会の衣装は絢爛豪華を尽した格調ある素材を用いなくては効を奏せず、製作は容易なことではなかった。そこで案じられたのが地域の富豪な旧家の蔵に遺されていた近代期の婚礼用高級丸帯の再利用だった。当時の旧家では嫁入衣装を長持に納めて使わずにそのまま蔵などで保管していたのであり、新品同様の豪華な金欄錦の織物が寄進という形で調達できたのである。それらを利用して聖衆に相応しい装束類が調整されたのである。時期は平成に入って頃だという。

## (2) 形態

### a 菩薩装束・上下衣

上衣と下衣の別にわけて作られ、上下衣共に袷仕立にしている。生地は丸帯用の広巾織物を用い、後身は織物の中のみまで背縫いをせず、肩部中央に盤領の首穴を穿っている。肩から前方の前身頃は中心で左右に裁ち、その左右身頃に狭巾の衽部を縫合している。盤領の首にやや高い台襟を設け、襟端に紐を付けて結び止める。袖は胡服形式の細長い筒袖にして、脇下から袖端にかけて三角形の襷裂を縫合する。また袖の端に二段の飾り布を付けているが、外端裂には折襷を設けて華麗な仕様とする。それはいわゆる盤領の胡服形式に倣った唐人服とも呼ばれる形式で、また古く渡来紅毛人が着ていた襦袢と呼ばれるシャツ式上衣の形式である。その上衣に対して下衣は腰に巻き付けて用いる一枚布の裳と呼ばれる形式で、上衣と同じ模様の広巾の錦織物三、四枚を接いで袷仕立にしている。裳の上辺端に数か所の襷を採ってやや裾広の台形に作る。上衣の裾に重ねて下衣の裳を重ね巻いて着付ける。上衣と下裳は同裂の錦織物を用いて基本的には組物として使用されている。

### b 菩薩装束・袈裟

いわゆる横五条形式の袈裟であり、五条の田相に堅条と横葉、また四隅に四天を設け、さらに肩から吊る大威儀の紐と四辺に1種また2種以上の錦裂を利用して縁裂を付けて仕立てている。上端角の2ヶ所に別裂の小威儀を付けて上衣と結び止める。

### c 菩薩装束・腰飾り

上下衣を着付けたその上へさらに腰に巻いて飾る装束である。腰に巻着付ける細紐に、中央に台形と三角の錦裂を垂れ付け、その左右にさらに三角裂を縫合し、腰紐から二条および一条の紐状のものを五か所に垂下して作っている。複雑な形状の装束であり、用布には一種から数種類の錦織裂を利用して作ら



れ、裏に白木綿布で袷仕立に作る。仏画などで菩薩衆が纏っている優美な衣装の襷の様子を表現したものらしく、菩薩の体軀を華嚴する重要な役割を持つている。

正式の名称は明らかでないが、既報告書に従って「腰飾り」を仮称する。

#### d 菩薩装束・天衣

巾が狭く長い紐状をした形に作られており、錦織裂を用いて袷仕立で作られる。これを肩に掛けて纏い、やはり菩薩が纏う襲装束の華麗さを表現しているものらしく、正式な名称は解らない。既報告書に従って「天衣」を仮称する。

#### e 菩薩装束・襪、弓賭、頭巾、汗取

菩薩の装束一具として衣装の他に、足首を紐で括って履く足袋の襪、弓賭と称する手袋、仮面の下に被る頭巾、首回りと頭を追おう汗取りの麻布がある。

#### f 地蔵装束

地蔵の装束は地蔵と龍樹に分けて2種の別があるという。共に着付には裁着袴と作法衣を着け、その上へ十徳と呼ばれる裾端に欄と呼ばれる横に突き出た裂をつけた垂領の長衣を着る。地蔵と龍樹は共に色無地を用いるも紅地と萌葱地に違え、襪と弓賭、頭巾、汗取りは他の菩薩衆に同じ。

#### g 天童装束

天童は下着の上に盤領の大袖長衣を着け、下に袴を穿く。襪と弓賭、頭巾、汗取りは菩薩に同じ。

#### (3) 製作仕様

現用装束の中で観音・勢至・普賢の三菩薩が着用する衣装は他の諸菩薩と違って別仕様で誂えられたものと思われ、ごく近年に製織した西陣製織物の法衣素材を利用して仕立てられていて、特別な寄進からなかったものと思われる。寄進の銘文を窺ってもそのことは知れる。三菩薩に対して諸菩薩の上衣と下衣装束の多くは明治から昭和初期の近代製の西陣製高級帯地や丸帯地を利用して、仕

立てている共通点がみられ、寄進による織裂を活用して調整されたことが知られる。ただ寄進といっても故人の供養に伴ってある裂類ではなく、来迎会のためとして相応しい高級な錦織裂が選ばれて調達したものであり、菩薩の来迎会装束に見合った品質の錦織物を厳選している。つまり昭和戦前以前の婚礼用の高級丸帯地などがそれである。現御住職の御母堂がそれ以前に用いていた旧装束の損傷と疲労の様子に心を痛め、一念発起して講中はじめ信者に声掛をして調整されたものだと聞く。これほどの数量の装束を調整するには想像以上の多額の準備が必要となる筈である。また旧装束と同様の品格と質の高い織物裂の確保を配慮して、近代に製作された高級帯地を活用することに着目した確かな考慮に驚かされる。ここに採用されている帯地裂はいずれも使い古した例が一切なく丁寧に保管されてきたものばかりであり、貴重な用布ばかりである。

装束に見る銘記から製作年は平成八年から十六年にかけて行われたのが解る。装束に記される銘記には寄進者の供養の念と、また装束の仕立てに供奉した協力した講中の氏名が記されている。装束一式の形態は旧用装束の形を厳密に倣って製作されており、袷装また天衣についても全く同様である。前述したが三菩薩の装束のみが材についてはこの例ではなく、現在に製織した新材の織製品を採用して仕立てられている。地蔵と龍樹菩薩、および天童の装束も近代製の織物裂を活用して作られる。これらの地蔵と天童の新装束も大概に旧装束を倣って製作をするが、用布や縫製仕様の詳細については各々に時代なりの要領と縫製者による手法の相違が若干にみられ、新旧の装束は比して一新された感がある。

調査は先ず旧装束から織物素材の製作技法と製作時期について概要調査を行い、また簡易に採寸を行い、墨書銘の記録と写真撮影等の記録を行う。同様に現用装束についても織物素材と製作技法の概要調査、簡易に採寸、墨書銘の記録と写真撮影の記録をした。

#### (4) 現用装束の銘文

銘文の多くは故人および親族の供養、祈願の文言に続いて寄進者の氏名と縫製に携わった講中の供奉者を記録する。寄進者は當麻町近隣から大阪府池田市、泉南市、東住吉区、奈良県御所市、吉野郡、京都市、さらに愛知県一宮市、福井県勝山市と広域におよぶが、銘文のみから深くその背景を探れない。

#### (5) 装束の着装次第

現行の来迎会では聖衆の着装については行事の執行直前に、練供養の出立する曼荼羅堂横にある護念院の広間と本堂で準備が整えられ、準備が整うに従って護念院と曼荼羅堂の扉を超えて架橋された仮道を通じて曼荼羅堂に入る。護念院で行われる着用次第は三菩薩のみは別室の小部屋で、他は広間で一同に着付けを行い、講中および家族がその着装の手伝いをする。着装次第を三菩薩の着付に従うと、まず各自持参の上下肌着を身に付けた状態から始まり、その上へ準備された白色木綿の垂領下着を着け、またその上に錦織の上衣を着て、さらに重ねて腰に下裳を巻いて着付ける。また腰には腰飾りを巻いて垂れ、肩から袈裟を懸けて腰部に垂れる。その後、上衣に付けられた紐で固定しながら両肩と腕に添わして天衣を着ける。衣装類が着け終わると首と頭に汗取り布を巻き、上に頭巾を被って下端の紐で首に結わえて固定をする。足には足首に紐が付いた襪を履き、手に弓賭と呼ぶ白手袋をつける。装束一切の着用が完了すると蓮台や楽器等の各自の持物を携帯して、護念院本堂に行つて行道面と板後背を着けてお練りの待機に入つて出番を待つ。装束の着用には専属に講中や家族が配されて手伝いを奉じる。行事終了後の装束類は洗浄と熨斗掛けを行つて点検整理をした後に収納して翌年の行事に対応して本堂裏の庫裏に格納される。

また地藏と龍樹は着付に裁着袴と作法衣を着け、そこへ十徳と称する衣装で裾端に欄と呼ばれる裂地を横に突き出た垂領の長衣を着る。地藏と龍樹は各々に紅と萌葱色に違えた色無地上衣を用いている。襪と弓賭、頭巾、汗取は菩薩

と同じ。天童は下着の上に盤領の大袖長衣を着て、下に袴を穿く。襪と弓賭、頭巾、汗取は菩薩衆に同じ。

### 3 旧用の装束

#### (1) 種類

護念院に伝承される旧用装束類も前述の現用装束の種類と形態にはほぼ同様だといえる。旧用装束が仕様に伴って素材の疲労や損傷が現れて利用困難な状態を迎え、平成八年から十六年にかけての現用装束が新調され、順次に新装束と交替して用いられる装束類である。現用装束がこの旧用装束に倣つて製作されていることから現用と旧用の装束類は全く同形だといえる。また護念院が所蔵する菩薩来迎会の装束は、現在の来迎会に利用されている現用装束類一式と、それら現用装束類を利用する以前に用いていた旧用装束類一式を寺内に保管して伝えられてきた。ただそれ以前の古い装束類は残念ながら伝承されておらず、また装束に関する伝承も全くないとする。

當麻寺来迎会は古く平安期から行われてきたというも、現在に伝えられる菩薩来迎会装束は現用とその前の二様の新旧衣裳のみが遺されるのみで、それ以前については経緯を知らないのが実際である。一般的に染織品は消耗品として、使用に伴つて生じる破損や欠損を修理しながら、また新たに調整されて短期間に新旧のものが交替しながら伝えて利用されるのが常で、現用以外の旧用品等は余程の理由が存在しない限り伝え遺されることはない。當麻寺の来迎会に供された染織品類もこうした例に漏れず、現用とその直前に用いられた旧用衣裳以外は今に伝えられず、また旧用衣裳の詳細と共に現用装束についても時間の経過と共に伝承や記録があまり多くないと考えられる。

遺る旧用装束の種類については現用装束と同じく三菩薩と二十一の諸菩薩、地藏と龍樹菩薩、二天童の別が見られ、二十四菩薩衆は錦織物製の上衣と下裳

があり、同じく錦織物製の袷姿と腰飾り、そして天衣の各衣裳が伝わる。また地蔵と龍樹菩薩の衣裳、天童の衣裳が見られる。ただし肌着や足袋の小物類は一部しか遺らず、地蔵と龍樹および天童の衣裳類についてはその着用別や分類は明確でない。ぼさつ衆の上下衣に記された銘文を見るに、中には観音や勢至、普賢を記した衣裳を見ることから、一時期また着用を限定して製作されたことも窺えて装束構成の一端が知れる。上下衣の銘記には寛政八年（一七九六）、文化十四年（一八一七）、文政十一年（一八二八）、文政十二年（一八二九）、天保五年（一八三四）、明治十四年（一八八二）、明治一五（一八八二）年などが見られ、そのうち寛政八年（一七九六）の衣裳Ⅰ「せししさん」や「くいんのんぼさつ」の銘文が、また文化十四年のものに「くわをんぼさつさん」、天保五年に「ふげんさん」、明治十四年（一八八二）に「せ志ぼさつ」の銘を見ることがこれらは三菩薩専用に製作された装束とも思えるが、幾つかは施入の銘文と別に記されていることから後年の追記ともとれる。

ただ寛政八年（一七九六）の衣裳の銘には「御装束七鉢之内」と「大勢至菩薩御装束七鉢」が、また天保五年には銘文中に「ふげんさん」、さらに明治十四年（一八八二）のものも銘文中に「せ志ぼさつ」が記され、これらは着用別を特定して製作されたことが解る。また紅梅色平絹の十徳も地蔵用として明治十五年に製作されたのが明確である。他の銘文を伴わない多くの装束は施入によるものか、また行事の備品として調整されたものを限定できないが、銘文の有無に拘らず装束の製作と素材について差異が大きく見られない。当然に銘記があるものは製作における年代特徴が見られるも、銘文のない他の装束も大概に江戸中期後半の十八世紀末から江戸後期から末年の十九世紀半ば過ぎにかけての織物技法の特徴が見られ、顕著な差異が見られない。しかしいずれの織物にしても当時の特別仕様の錦織物が用いられている共通点があり、全てに格別な配慮で装束の製作が行われていたのが窺える。

一方、袷姿については上下衣の場合と異なる仕様が見られる。二四例中で一例を除いて全ての袷姿に銘記があり、その製作年が知れる。内訳は寛政七年銘が一三例、寛政八年銘が三例、明治十五年銘が一例、明治十九年銘が二例、年記がない一例が見られ、そして年記がないものの寛政七年と同裂が三例があつて都合寛政七年製作が一六例と主なる製作年の構成が解る。また腰飾りについては銘文があるのは二四作中五例で、寛政十年が三例と明治十九年が一例、年記のないのが一例しか判明しないが、各袷姿の用布に数種類の利用が見られ、そうした用布の中に一般に慶長裂と称される江戸時代前期に遡れる裂地が用いているものが六例（今回の調査時にはそのうちの二作が不明）もある。これらは利用裂地が共通していることと小裂の利用であることから、多分にさらに古い装束の一部が再利用されているのではないかと考えられるが、行事装束に適さない脆弱な染裂なども見られ、他の供養で寄進された小袖裂の打敷を再利用しているとも思われ、ここでの即断を避けたい。

他に地蔵と天童の衣料らしきものも見られるが、現用の一部かそれとも旧用の別の判断はし難く、さらに下着や汗取り、襪、汗取りの旧品の記載が既報告書にあるも今調査時には見られなかった。

### (2) 形態

旧用の装束を写して現用装束が製作されたものと思われ、旧用装束の形態は現用に全く同じ。ただし地蔵と龍樹、天童衣裳については現用と旧用に違いが見られる。地蔵と龍樹は広巾生地を用いて作られ、衿を付けず襟が長い襦袢様式の長着の裾に欄部が設けられた衣料である。有欄の僧衣（欠腋垂領袍形）を模したものと思われる。また天童衣裳は盤領にした長着で脇を開けてそこを千鳥掛けで綴じる。

### (3) 仕様と織物特徴

旧用装束に用いられる素材特徴については前述通りだが、旧用装束を構成し

ている主織物について製法を窺うと、これらが当時の一般的織物でないことがいえる。装束と袷姿の多くが金入縹珍または金欄緞子と呼ばれる特殊な錦織物を用いて製作されており、縹子組織の地に品質のよい絹糸と金糸を利用して多色に織られた高級織物なのが知れる。そしてこの豪華な模様を彩るのに絵緯と呼ばれる数色の色糸を同じ越に重ねて織り込み、模様に見事な暈し彩色を施されして重工感のある立体的な当時最新の織技を施していることが注目される。さらにこうした独自の織技が当時の西陣を代表する名工と絡んであることにも興味深いのがいえる。その人物は西陣中興の祖と謳われた林瀬平という材で、瀬平が新しく創案した織物として遺る作品にこの暈し彩色の技術が見られる。

瀬平が立体的なこの暈し技法を最初に著したのは記録では明和二年（一七六五）が最初頃で、彼の作品に見られだして後の暫くから他の西陣織物にも少しづつ広まっていったようだが、特別仕様の織物以外にはこの例を多く見ない。また安永元年（一七七二）に彼は日本で最初に綴織技法を始めたともされ、古くと同じく綴織技法で當麻曼荼羅を織り表した中将姫伝説との因縁も絡んで不思議な繋がりさえ感じさせる。とくに菩薩衣装の中でこうした織技が見られる例は寛政七および八年から文政年の銘を持つものあり、このような年代の合致からも本装束類が特別な行事の什物として京都西陣で製作されたものを裏付けているのではないか。さらにこれらの錦織物の図柄に瑞雲、鳳凰、雲龍、雲鶴、波濤、唐花、宝相華、靈獸鳥、松竹梅、蜀江、稜花といった特殊瑞祥文様ที่ใช้られ、色調も濃厚な五色の縹縹配色を見るなどの共通点がみられる。他の高級裂地を転用したのではなく仏事法衣専用に製織された高級織物なのが確実にある。

また上下衣と袷姿に寛政七および八年の銘文を持つ中に、「仕立所岩城榊屋勘助・友七」や、「呉服所東都岩城榊屋友七勘助 仕立當山引接院現尼」が記されており、素材の調達と仕立てに関わる場所と人物の記述は重要である。

それに比して腰飾りの用布は多くは多種の織物を混じて作られていること、こうした織物を使った上下衣と袷姿以外の裂地は法衣専用と考えられる錦織物や金欄織物が利用されていて、その違いが感じられる。腰飾りには寛政十年の銘を持つ例が一腰あり、そこに江戸初期の慶長裂や江戸前期の寛永や寛文頃の古い時代の裂地、また元禄小袖の裂などが用いられており、こうした例を六例の腰飾に見るも、その中には近代以降から現在の裂地が混じる腰飾も見られて混然としている。さらに明治十八年と十九年銘のあるものが六例あるも、こちらも近代の裂と同時に倭錦や風通、緯錦と行った江戸時代の裂地が混ざって仕立てられていることに修理や再利用による製作の複雑さ、また修理による複雑な経緯があることも考慮しなければならない。しかし単純に江戸初期や前期の希少な裂地が偶然に存在して縫合したものとは思われず、多分に古くから伝承してきた貴重な装束の一部を修理と再生に際して再度また再々度に応用したものではないかの想像できるが、どうだろうか。殊に慶長裂や寛永、寛文、元禄期の小袖裂は生地が薄いために長持ちしはし難く、また故人の供養のために当寺に寄進された打敷などを流用したことも考えられ、輕易に答えを導けない。

#### （4）銘文

装束には銘文の記載を見られるものがある。主に上衣と下衣の裏裂と袷姿の裏裂に記されるものが大半で、袷姿に寛政七年銘が一三例（他に同年と思われるもの二例がある）、寛政八年の銘が上衣に四例と袷姿に三例、文化十四年銘が上衣に一例、また文政十一年銘が上衣に一例、文政十二年銘が上衣に一例、天保六年銘が上衣に一例、近代に入って明治十四年銘が上下衣の二例と明治十五年銘が上衣に一例、明治十九年銘が袷姿に三例を見る。一般に古い染織作品に墨書等の銘記が見られることは少なく、また染織作品の製作技術や文様編年の歴史が詳細に解明されていないことから貴重な資料だといえる。

銘記について探ると、寛政七年と八年に調整された菩薩装束の銘文に「仕立

所 岩城榊屋勘助 友七、また「呉服所 岩城榊屋勘助 友七」、そして「仕立當山引撰院知現尼 福知院尼 知法院尼 浄雲院尼 恵岳尼」が、また文政と天保年銘のものには「引撰院理鏡 知法院智栄縫之」とあり、岩城榊屋なる者が織物を調達してそれを尼僧が縫製したことが知れる。ただ「仕立所 尾張町恵比須屋兵助 藤蔵 藤三郎」ともあるように尼僧の他にも、遠方の地の尾張で仕立てていることや、「東都岩城榊屋」とあつて榊屋が江戸在住の人物でありながら、明らかに西陣製織物といえる素材を江戸の榊屋が調達して、それを尾張で仕立てるなどの全国範囲におよんでいた寄進の背景に驚かされる。

さらに「薩州御隠居公之御部屋君就御参拜而從御供中奉納之右趣意者御両所御方御長寿長久各々現在安全(略)」、「紀伊中納言公御老女芳村殿酬先祖累代仏果満足(略)」と記されたものがあり、高貴な武家女性の帰依に厚かったことなど迎講を支える広範で厚い社会層の背景があつたことの裏付けがみられる。

1 『当麻寺来迎会民俗資料緊急調査報告書』(元興寺仏教民俗資料研究所編、国書刊行会、一九七五年)

(藤井健三)

装束図解 (袈裟)

五条袈裟 (概寸)

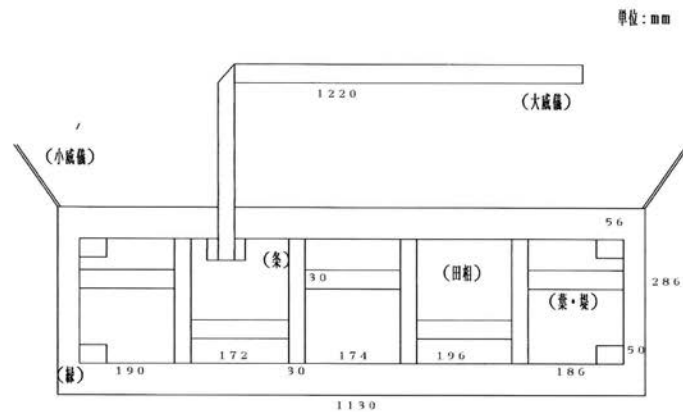
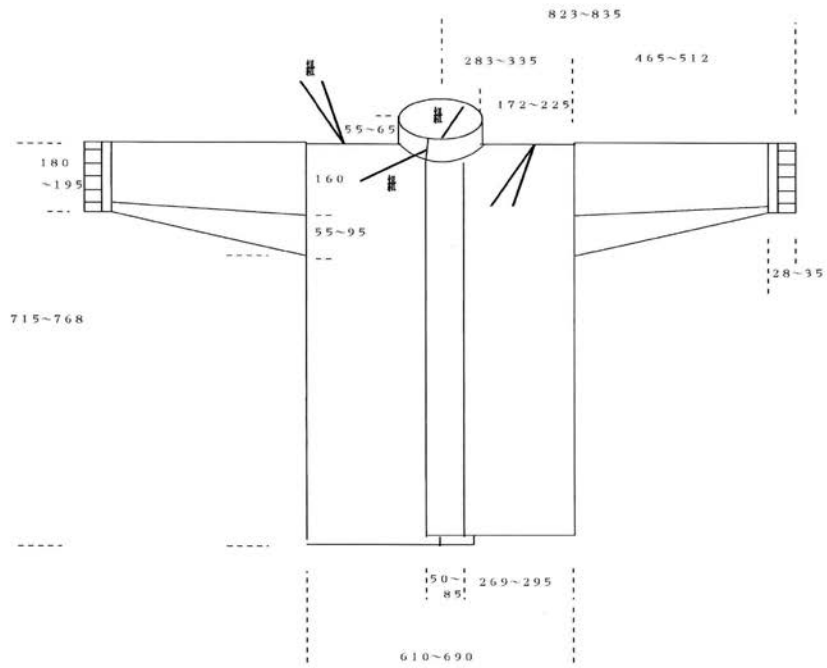


図1 装束図解 (袈裟)

装束図解（上・下衣）

現用 装束上衣

単位：mm



現用 装束下裳

単位：mm

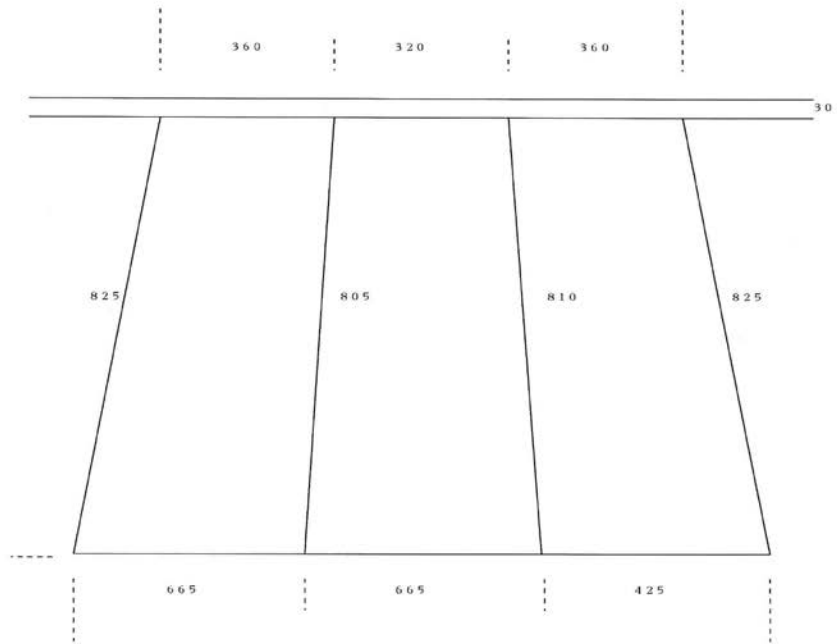


図2 装束図解（上・下衣）

附 装束類調査の記録

(1) 現用装束の類(二〇一八年現在使用品)

凡例 現用装束等における銘文については、寄進年等については記載し、寄進者等の個人情報に關係する事項は省略としてゐる。なお、備考内の付記「数字」は、資料に記されてゐた番号である。

A 三菩薩・装束類

01上・下衣

a 上衣 表地…『白茶地二崩し地紋に大牡丹菊枝文様 繡珍錦』

(繡子地・繪緯全越別搦綾綴じ・繡珍錦)

(地経…化纖白糸、地緯…化纖緑糸、繪緯…化纖色糸・金糸)

裏地…『白地木綿布』(ブロード地)

寸法…丈：77.5cm、桁：82.0cm

銘文…〔省略〕平成十二年五月十四日 護念院二十一世 法譽代

備考…袖口を緋地ウール平織布と浅葱地絹平織布で飾る。

b 下裳

表地…上衣に同じ。裏地…上衣に同じ。

寸法…丈：88.0cm、幅：162.0cm

銘文…〔省略〕平成十二年五月十四日 護念院二十一世 法譽代

備考…紐は白色木綿布(ブロード地)

02上・下衣

a 上衣 表地…『黄土地宝相華唐草文様 銀欄』

(経5枚繡子地・繪緯別搦綴じ・錦)(地経緯…化纖糸、繪緯…丸銀糸)

裏地…『白地木綿布』(ブロード地)。

寸法…丈：77.0cm、桁：83.0cm

銘文…〔省略〕平成十二年五月十四日 護念院二十一世 法譽代

備考…袖口を浅葱地ウール平織布と紫地絹平織布で飾る。

b 下裳

表地…上衣に同じ。裏地…上衣に同じ。寸法…未確認

銘文…〔省略〕平成十二年五月十四日 護念院二十一世 法譽代

備考…紐は白色木綿布(ブロード布)

代

03上・下衣

a 上衣 表地…『薄萌葱地团華文様 錦』

(経3枚綾地・繪緯全越地搦み緯6枚綾綴じ・錦)

裏地…『浅葱無地綾』。

寸法…丈：74.0cm、桁：83.0cm

備考…袖口を薄紅地平織布と浅葱地平織布で飾る。

b 下裳

表地…上衣に同じ。裏地…上衣に同じ。寸法…未確認

備考…紐は白色木綿布(ブロード布)

04上・下衣

a 上衣 表地…『紫地向い鶴丸文様 錦』

(経3枚綾地・緯6枚綾地紋・綾) 法衣裂地

袖…萌葱地平絹・浅葱地平絹

裏地…『萌葱地羽二重』。寸法…未確認。

備考…地経…紫・地緯…白の海氣織

b 下裳

表地…『紫地向い鶴丸文様 錦』(上衣に同じ)

裏地…『薄萌葱地平絹』。寸法…未確認。

05上・下衣

a 上衣 表地…『薄萌葱金地正倉院宝相花文様 錦』

(変則平地) 経…黄と萌葱・緯…金糸

繪緯半越別搦平綴じ 錦

袖…萌葱地平絹・焦茶地平絹

裏地…『白地平織木綿布』

銘文…〔省略〕平成十二年五月十四日 護念院二十一世 法譽代

b 下裳

表地…『薄萌葱地正倉院宝相花文様 錦』(上衣に同じ)

裏地…『白色平織木綿布』。紐…『白色平織木綿布』

寸法…未確認

銘文…〔省略〕平成十二年五月十四日 護念院二十一世 法譽代

## 06 袈裟

表地…田相部『薄白茶地宝相華文折文様 錦』

(経3枚綾地・絵緯半越地搦綾綴じ・錦)

条葉部『茶地変り蜀江文様 縹珍錦』

(経5枚縹子地・絵緯全越別搦平綴じ・錦)

裏地…『薄白茶地平絹』。

寸法…丈：39.0cm, 幅：120.5cm

備考…田相部は丸帯地の転用、条葉部は古裂の再利用

## 07 袈裟

表地…田相部『薄紫地孔雀に宝相華文様 錦』

(経3枚綾地・絵緯全越地搦綾綴じ・錦) (絵緯…箔1)

周縁部『紫地平絹』

裏地…『白地平絹』。

寸法…丈：32.0cm, 幅：115.5cm

銘文…〔省略〕平成十五年五月十四日 護念院二十一世 法譽代』

備考…表地は帯地の転用

## 08 袈裟

表地…田相部『臙脂無地』

(経5枚縹子地・絵緯全越別搦平綴じ・錦)

条葉部『萌葱地鱗紋に蝶鳳八陵文様 縹珍錦』(変則平織

地・織色綾)

裏地…『薄白茶無地綾』。

寸法…丈：36.0cm, 幅：120.5cm

備考…田相部の平織物は地緯糸に漆糸と紫糸を同口に織り入れて海  
気様の表現をする。

## 09 袈裟

表地…田相・条葉部『薄萌葱地菊花文様 錦』

(平地・絵緯半越地搦平綴じ・錦) (絵緯…金糸・銀糸)

裏地…『白綾無地木綿』。寸法…未確認

銘文…〔省略〕平成十五年五月十四日 護念院二十一世 法譽代』

備考…帯地裂の転用

## 10 袈裟

表地…『縹地菊梅雲鶴文様 錦』

裏地…『白地平織木綿布』。寸法…未確認

銘文…〔省略〕平成十五年五月十四日 護念院二十一世 法譽代』  
備考…五条袈裟

## 11 天衣

表地…『白地大輪菊花文様 錦』(04袈裟の表地におなじ)

(平地・絵緯半越地搦綾綴じ・錦) (絵緯…金糸・銀糸)

寸法…巾：4.3cm, 長：532.0cm

備考…帯地裂の転利

## 12 天衣

09天衣に同じ

## 13 天衣

表地…『青地菊文様 縹珍錦』

(経5枚縹子地・絵緯半越浮文・錦) (絵緯…胴2艇絹糸)

寸法…巾：4.3cm, 長：532.0cm

備考…明治期の打掛裂の転用

## 14 腰飾

表地…『薄白茶地四季花に卷子文様 錦』

(平地・絵緯全越地搦平綴じ・錦) (絵緯…金糸・銀糸)

裏地…『白地平折木綿布』。

寸法…丈：60.0cm, 巾：83.0cm

備考…帯地を転用

## 15 腰飾

表地…『薄紫地孔雀に宝相華文様 錦』(02袈裟におなじ)

(経3枚綾地・絵緯全越地搦綾綴じ・錦) (絵緯…箔1)

裏地…『白地平折木綿布』。寸法…未確認。

銘文…〔省略〕平成十五年五月十四日 護念院二十一世 法譽代』

備考…帯地を転用

## 16 腰飾

表地…『緋地連珠円に獅子文様 錦』(複様綾組織・緯錦)

『鼠地平絹に松竹桜模様友禪染』(ゴム糸目糊手描友禪白揚

げ染)

裏地…『白地平絹』。寸法…未確認

銘文…〔省略〕平成十五年五月十四日 護念院 法譽代』

備考…帯地を転用



17肌着 表地…『白地木綿 布』(平織木綿布)。寸法…未確認

銘文…〔(省略)〕

備考…諸菩薩の下着と同じ

18肌着 17肌着に同じ

寸法…未確認

19肌着 17肌着に同じ

寸法…未確認

20頭巾 表地…『紺無地平織麻布』

寸法…未確認

21頭巾 表地…『紺無地平織麻布』

寸法…未確認

22頭巾 表地…『紺色平織木綿粗布』

寸法…未確認

23汗取 表地…『白無地平織木綿布』

寸法…未確認

24汗取 表地…『萌葱無地平織木綿布』

寸法…未確認

25汗取 表地…『白色木綿布』

寸法…未確認

26汗取 表地…『萌葱色木綿布』

寸法…未確認

27汗取 表地…『紺色木綿布』

寸法…未確認

## B 諸菩薩・上下衣(上衣、下裳)

(各装束の寸法は図解に準じる。また各装束裏面に各装束の通し番号と番号の付記あり)

01上・下衣

a上衣 表地…『白地扇面に御所車菊花鶴文様 錦』(綾地錦)

裏地…『白地平織木綿布』

銘文…〔(省略)〕平成十年五月十五日 護念院二十一世 法譽代

備考…表地に昭和戦前期頃製作の丸帯地を転用。

b下裳 表地…『薄白茶地桔梗八陵花文様 錦』(綾地錦) 昭和中期製作の帯地。

裏地…『白地平織木綿布』

備考…表地に昭和中期頃製作の帯地を転用

02上・下衣

a上衣 表地…『薄鼠地菊花に扇面文様 錦』(綾地錦) 明治期製作の帯地。

裏地…『鼠地菊松竹文様 錦』(綾地錦) 明治期製作の帯地。

『黄土地洋小花文様 錦』(袖脇下部) (綾地錦) 大正期製作の帯地

b下裳

表地…『白地御所車菊花瑞鳥の扇面文様 錦』(綾地錦)

裏地…『白地平織木綿布』

銘文…〔(省略)〕平成十五年五月十四日 護念院二十一世 法譽代

備考…表地に昭和戦前期頃製作の帯地を転用。

03上・下衣

a上衣 表地…『薄白茶地菊松鶴扇の扇面文様 錦』(綾地錦) 大正から昭和戦前期製作の帯地。

裏地…『白地平織木綿布』

銘文…〔(省略)〕平成十年五月十四日 護念院二十一世 法譽代

備考…表地に大正から昭和戦前期製作の帯地を転用。

b下裳

表地…『濃紫地小花埋め文様 縞珍錦』(縞子地錦) 明治期製作の帯地。

裏地…『青鼠地菊竹州浜文様 錦』(綾地錦) 明治期製作の帯地。

銘文…〔(省略)〕平成十一年五月十四日 護念院二十一世 法譽代

備考…表地に大正から明治期製作の帯地を転用。

04上・下衣

a上衣 表地…『金地御所車菊花宝尽し文様 錦』(平地錦) 昭和戦前期製作の帯地。

裏地…『白地平織木綿布』

銘文…〔(省略)〕平成十年五月十四日 護念院二十一世 法譽代

備考…表地に昭和戦前期製作の帯地を転用。

b下裳

表地…『雲に扇面散し文様 錦』(綾地錦) 昭和後期製作の帯地。

裏地…『文様(不明) 錦』(綾地錦) 昭和後期製作の帯地。

銘文…〔(省略)〕平成十年五月十四日 護念院二十一世 法譽代

備考…表地に昭和後期製作の帯地を転用。

05上・下衣

a 上衣 表地…『濃萌葱地荒磯文様 錦』

裏地…(綾地・絵緯・錦) 昭和戦前製作の丸帯地。

袖…鼠地平絹・青地羽二重。

裏地…『白地平織木綿布』

銘文…〔(省略) 平成十一年五月十四日 護念院二十一世 法譽代〕

備考…表地に昭和戦前製作の丸帯地を転用。

b 下裳

表地…『茶地松竹梅文様 錦』(13下衣に同じ)

裏地…『白地平織木綿布』

銘文…〔(省略) 平成九年五月十四日 護念院二十一世 法譽代〕

備考…表地に明治後期製作の丸帯地を転用。

06上・下衣

a 上衣 表地…『白地扇面散しに飛鶴文様 錦』

裏地…(綾地・絵緯・錦) 大正昭和戦前製作の丸帯地。

袖…萌葱地平絹・薄紅地平絹。

裏地…『白地平織木綿布』

備考…表地に大正昭和戦前製作の丸帯地を転用

b 下裳

表地…『薄水色地扇散しに孔雀羽根文様 錦』

裏地…(綾地・絵緯・錦) 大正昭和戦前製作の丸帯地。

銘文…〔(省略) 平成十五年五月十四日 護念院二十一世 法譽代〕

備考…表地に大正昭和戦前製作の丸帯地を転用。

07上・下衣

a 上衣 表地…『薄白紅地菊鳳凰文様 錦』

裏地…(綾地・絵緯・錦) 大正昭和戦前製作の丸帯地。

袖…萌葱地平絹・赤地縮緬

裏地…『白地平織木綿布』、『麻地墨摺り(男用下着の転用)』

備考…表地に大正昭和戦前製作の丸帯地を転用

裏地の背に「剣酢漿草紋」の墨摺あり。

b 下裳

表地…『薄水色地扇面散しに波飛鶴菊文様 錦』

(綾地・絵緯・錦) 昭和戦前製作の丸帯地。

裏地…『白地平織木綿布』

備考…表地に昭和戦前製作の丸帯地を転用。

08上・下衣

a 上衣 表地…『薄白茶地扇面に御殿菊松樹散し文様 錦』

裏地…(綾地・絵緯・錦) 昭和戦前製作の丸帯地。

袖…萌葱地平絹・青地羽二重。

裏地…『白地平織木綿布』

銘文…〔(省略) 平成十一年五月十四日 護念院二十一世 法譽代〕

備考…表地に昭和戦前製作の丸帯地を転用。

b 下裳

表地…『白地几帳に扇面吉祥文様 錦』

裏地…(綾地・絵緯・錦) 昭和前期製作の丸帯地。

備考…表地に昭和前期製作の丸帯地を転用。

09上・下衣

a 上衣 表地…『白茶地火炎太鼓文様 唐織』

裏地…(綾地・絵緯・錦) 大正昭和前期製作の丸帯地。

袖…鼠地平絹・黒地縮緬。

裏地…『白地平織木綿布』

備考…表地に大正昭和前期製作の丸帯地を転用。

b 下裳

表地…『薄白茶地扇に飛鶴牡丹文様 縹珍錦』

裏地…(縹子地・絵緯・錦) 昭和戦前製作の丸帯地。

裏地…『白地平織木綿布』

銘文…〔(省略) 平成十三年九月三日〕

備考…表地に昭和戦前期製作の丸帯地を転用。

10上・下衣

a 上衣 表地…『薄白紅地楼閣飛鶴文様 錦』

裏地…(綾地・絵緯・錦) 昭和戦前製作の丸帯地。

袖…鼠地平絹・朱地縮緬。

裏地…『菊唐草文様捺染麻布』

銘文…〔(省略) 平成十四年五月十四日 護念院二十一世 法譽代〕  
備考…表地に昭和戦前期製作の丸帯地。  
表地…『薄白紅地苔家に松樹文様 錦』

b 下裳  
(綾地・絵緯・錦) 昭和戦前期製作の丸帯地。  
裏地…『白地平織木綿布』  
銘文…〔(省略) 平成十四年五月十四日 護念院二十一世 法譽代〕  
備考…表地に昭和戦前期製作の丸帯地を転用。

11 上・下衣  
a 上衣 表地…『薄鼠緑地松葉散し文様 錦』  
(綾地・絵緯・錦) 明治後期製作の丸帯地。

袖…赤紫地変り平絹・青地羽二重。  
裏地…『白地平織木綿布』  
銘文…〔(省略) 平成十一年五月十四日 護念院二十一世 法譽代〕  
備考…表地に明治後期製作の丸帯地を転用。  
b 下裳 表地…『紺地楓唐草小文様 錦』  
(変り平地・絵緯浮文・錦) 大正昭和戦前期製作の丸帯地。  
裏地…『白地平織木綿布』

銘文…〔(省略) 平成八年五月十四日 護念院二十一世 法譽代〕  
備考…表地に大正昭和戦前期製作の丸帯地を転用。

12 上・下衣  
a 上衣 表地…『白地陵花に御車菊文様 錦』  
(綾地・絵緯・錦) 昭和戦前期製作の丸帯地。

袖…萌葱地平絹・紫地平絹。  
裏地…『白地平織木綿布』  
銘文…〔(省略) 平成十年五月十四日 護念院二十一世 法譽代〕  
備考…表地に昭和戦前期製作の丸帯地を転用。  
b 下裳 表地…『白地葵地紋に文箱扇鼓文様 錦』  
(綾地・絵緯・錦) 昭和戦前期製作の丸帯地。  
裏地…『白地平織木綿布』

銘文…〔為 成願家先祖代々位 施主 泉南市岡田五ノ三十二ノ一 成願光子〕

備考…表地に昭和戦前期製作の丸帯地を転用。  
13 上・下衣  
a 上衣 表地…『薄鼠茶地竹桐菊松に雲文様 錦』  
(平地・絵緯・錦) 明治後期製作の丸帯地。

袖…鼠紫地平絹・萌葱地縮緬。  
裏地…『白地平織木綿布』  
銘文…〔(省略) 平成十年五月十四日 護念院二十一世 法譽代〕  
備考…表地に明治後期製作の丸帯地を転用。  
b 下裳 表地…『濃緑茶地松竹梅文様 錦』  
(縹子地・絵緯・錦) 明治後期製作の丸帯地。  
裏地…『白地平織木綿布』

銘文…〔(省略) 平成八年五月十四日 護念院二十一世 法譽代〕  
備考…表地に明治後期製作の丸帯地を転用。  
14 上・下衣  
a 上衣 表地…『薄白紅地火炎太鼓文様 錦』  
(綾地・絵緯・錦) 昭和戦前期製作の帯地。

袖…鼠地平絹・薄茶地平絹。  
裏地…『白地平織木綿布』  
銘文…〔(省略) 平成十年五月十四日 護念院二十一世 法譽代〕  
備考…表地に昭和戦前期製作の帯地を転用。  
b 下裳 表地…『薄白紅地御殿に松楓菊文様 錦』  
(綾地・絵緯・錦) 昭和戦前期製作の帯地。  
裏地…『白地平織木綿布』

備考…表地に昭和戦前期製作の帯地を転用。  
15 上・下衣  
a 上衣 表地…『薄茶地扇面に桐蘭文様 縹珍錦』  
(縹子地・絵緯・錦) 明治期製作の帯地。

袖…萌葱地平絹・白地羽二重。  
裏地…『白地平織木綿布』  
銘文…〔(省略) 平成十三年五月十四日 護念院二十一世 法譽代〕

b 下裳 備考…表地に明治期製作の帯地を転用。  
表地…『紺地裂地取り文様 錦』(16下衣と同裂)  
(平地・絵緯・錦) 大正期製作の帯地。

裏地…『白地平織木綿布』  
銘文…「(省略) 平成十一年五月二十四日 護念院二十一世 法譽代」  
備考…表地に大正期製作の帯地を転用。

16 上・下衣

a 上衣 表地…『茶地鶴波に亀甲文様 縹珍錦』  
(縹子地・絵緯・錦) 明治期製作の帯地。

袖…萌葱地羽二重・縹地羽二重。

裏地…『白地平織木綿布』

銘文…「(省略) 平成十一年五月十四日 護念院二十一世 法譽代」  
備考…表地に明治期製作の帯地を転用。

b 下裳

表地…『紺地裂地取り文様 錦』  
(縹子地・絵緯・錦) 大正期製作の帯地。

裏地…『白地平織木綿布』

銘文…「(省略) 平成十一年五月二十四日 護念院二十一世 法譽代」  
備考…表地に大正期製作の帯地を転用。

17 上・下衣

a 上衣 表地…『白鼠地鳳凰に牡丹松樹文様 錦』  
(経3枚綾地・絵緯全越地搦綾綴じ・錦) 大正昭和戦前製作の丸帯地。

袖…萌葱地平絹・青地羽二重。

裏地…『白地平織木綿布』

b 下裳 備考…表地に大正昭和戦前製作の帯地を転用  
表地…『白地格子に雲鶴丸宝波丸文様 錦』  
(緯3枚綾地・絵緯全越地搦綾綴じ・錦) 昭和戦前製作の丸帯地。

裏地…『白地平織木綿布』

銘文…「(省略) 平成十五年五月十四日 護念院二十一世 法譽代」  
備考…表地に昭和戦前製作の丸帯地を転用。

18 上・下衣

a 上衣 表地…『鳳凰牡丹菊文様 錦』  
(経3枚綾地・絵緯全越別搦綴じ・錦) 大正期製作の丸帯地

袖…鼠地平絹・萌葱地縮緬。

裏地…『白地平織木綿布』

銘文…「(省略) 平成十年五月十四日 護念院二十一世 法譽代」  
備考…表地に大正期製作の丸帯地を転用。

b 下裳

表地…『薄黄地羽团扇に菊花文様 錦』  
(経3枚綾地・地揚げ地紋・絵緯全越別搦綴じ・錦) 大正期製作の丸帯地。

裏地…『白地平織木綿布』

銘文…「(省略) 平成十六年五月十四日 護念院二十一世 法譽代」  
備考…表地に大正期製作の丸帯地を転用。

19 上・下衣

a 上衣 表地…『焦茶地尾長鳥に唐草文様 縹珍錦』  
(縹子地・絵緯全越別搦綴じ・縹珍錦) 明治期製作の丸帯地。

袖…鼠地平絹・白茶地平絹。

裏地…『白地平織木綿布』

b 下裳 備考…表地に明治期製作の丸帯地を転用。  
表地…『薄茶地酢漿草に蝶文様 錦』  
(平地・綾と縹子地紋絵緯全越浮文・錦) 大正期製作の帯地。

裏地…『白地平織木綿布』  
(綾地・絵緯・錦) 明治期製作の帯地。

備考…表地に大正期製作の帯地を転用。

20 上・下衣

a 上衣 表地…『御所車松樹文様 唐織錦』  
(経3枚綾地・絵緯全越浮文・錦) 昭和戦前製作の丸帯地。

袖…萌葱地平絹・白茶地平絹。

裏地…『白地平織木綿布』

銘文…「(省略) 平成十年五月十四日 護念院二十一世 法譽代」

b 下裳  
備考…表地に昭和戦前期製作の丸帯地を転用。  
表地…『白地鼓冊子御所車文様 唐織錦』

(経3枚綾地・絵緯全越浮文・錦) 昭和戦前期製作の丸帯地。  
裏地…『白地平織木綿布』

銘文…『(省略) 平成十五年五月十四日 護念院二十一世 法譽代』  
備考…表地に昭和戦前期製作の丸帯地を転用

(上衣) 表地…『白地扇面に御所車菊花鶴文様 錦』 (綾地錦)  
裏地…『白地平織木綿布』

銘文…『平成十年五月十五日 護念院二十一世 法譽代』  
備考…表地に昭和戦前期製作の丸帯地を転用。

(下裳) 表地…『薄白茶地桔梗八陵花文様 錦』 (綾地錦) 昭和中期製作の帯地。  
裏地…『白地平織木綿布』

備考…表地に昭和中期製作の帯地を転用

## 21上・下衣

a 上衣 表地…『濃緑地宝相華唐草文様 繻珍錦』

(繻子地・絵緯全越別搦綴じ・錦) 明治中期製作の丸帯地。  
袖…白茶地平絹・白地縮緬。

裏地…『白地平織木綿布』

銘文…『(省略) 平成十三年五月十四日 護念院二十一世 法譽代』  
備考…表地に明治中期製作の丸帯地を転用。

b 下裳 表地…『薄黄茶地母手文様 錦』

(平地・絵緯全越浮文・錦) 昭和戦前後製作の帯地。  
裏地…『白地平織木綿布』

銘文…『(省略) 平成十年五月十四日 護念院二十一世 法譽代』  
備考…表地に昭和戦前期製作の帯地を転用。

## 22上・下衣

a 上衣 表地…『薄白茶地几帳に鳳凰団扇文様 錦』

(綾地・絵緯・錦) 大正期製作の丸帯地。  
袖…鼠地平絹・茶地平絹。

裏地…『白地羽二重絹』

銘文…『(省略) 平成九年五月十四日 護念院二十一世 法譽代』  
備考…表地に大正期製作の帯地を転用

b 下裳 表地…『薄茶地州浜に秋草紋様 錦』  
(経3枚綾地・絵緯全越別搦平綴じ・錦)

明治後期製作の丸帯地。

裏地…『白地羽二重』  
銘文…『(省略) 平成八年五月十四日 護念院二十一世 法譽代』

備考…表地に明治後期製作の丸帯地を転用。  
五条袷袷から下衣(裳)に作り直す。

## 23上・下衣

a 上衣 表地…『紺地霞に小菊文様 繻珍錦』

(経5枚繻子地・絵緯全越浮文地搦綾綴じ・錦) 明治期製作の丸帯地。

袖…萌葱地平絹・焦茶地平絹。  
裏地…『白地平織木綿布』

銘文…『(省略) 平成十一年五月十四日 護念院二十一世 法譽代』  
備考…表地に明治期製作の丸帯地を転用。

b 下裳 表地…『紺地六陵花唐草文様 錦』 (同裂品あり)  
(変則平地・絵緯全越別弱平綴じ・錦) 明治期製作の丸帯地。

裏地…『白地平織木綿布』  
銘文…『(省略) 平成八年五月十四日 護念院二十一世 法譽代』

備考…表地に明治期製作の丸帯地を転用。

## 24上・下衣

a 上衣 表地…『白地霞に木立文様 錦』

(経3枚綾地・絵緯全越浮文・錦) 大正期製作の帯地。  
袖…臙脂地平絹・青地羽二重。

裏地…『白地平織木綿布』  
銘文…『(省略) 平成十一年五月十四日 護念院二十一世 法譽代』

b 下裳 表地…『茶地州浜に桜閣庭園文様 繻珍錦』

(経5枚縹子地・絵緯全越別弱綾綴じ・錦) 明治大正初期製作の丸帯地。

〔紫地唐草地紋 琥珀織〕

(平地・変り畦地紋・綾) 明治期製作の裂か。

裏地…『白地平織木綿布』

備考…表地に明治大正初期製作の丸帯地を転用。

## 25 上・下衣

a 上衣 表地…『白地扇面に菊松樹文様 錦』

(緯3枚綾地・絵緯全越地搦綾綴じ・錦) 昭和戦前製作の丸帯地。

袖…萌葱地平絹・焦茶地平絹。

裏地…『白地平織木綿布』

銘文…『(省略) 平成十年五月十四日 護念院二十一世 法譽代』

備考…表地に昭和戦前製作の丸帯地を転用。

b 下裳

表地…『白茶地蛤に吉祥文様 錦』

(経3枚綾地・絵緯全越別搦綾綴じ・錦) 昭和戦前製作の丸帯地。

裏地…『白地平織木綿布』

銘文…『(省略) 平成十四年五月十四日 護念院二十一世 法譽代』

備考…表地に昭和戦前製作の丸帯地を転用。

## 26 (無番) 上・下衣

a 上衣 表地…『焦茶地扇面鳳凰に松樹文様 縹珍錦』

(経5枚縹子地・絵緯全越別搦平綴じ・錦) 大正期製作の打掛裂。

袖…萌葱地平絹・白地縮緬。

裏地…『白地平織木綿布』

銘文…『(省略) 平成十三年五月十四日 護念院二十一世 法譽代』

備考…表地に大正期製作の打掛裂を転用。

b 下裳

表地…『茶地菊松竹梅文様 錦』

(経3枚綾地・絵緯全越別搦平綴じ・錦) 大正前期製作の丸帯地。

裏地…『白地平織木綿布』

銘文…『(省略) 平成九年五月十四日 護念院二十一世 法譽代』

備考…表地に大正前期製作の丸帯地を転用。

## 27 (無番) 上・下衣

a 上衣 表地…『萌葱地富士と浜に鳳凰文様 錦』

(平地・経地揚地紋・絵緯全越地搦綾綴じ・錦) 明治期製作の丸帯地。

袖…鼠地平絹・白茶地平絹。

裏地…『白地平織木綿布』

銘文…『(省略) 平成十三年五月十四日 護念院二十一世 法譽代』

備考…表地に明治期製作の丸帯地を転用。

b 下裳

表地…『濃紫地小花唐草文様 縹珍錦』(同裂品の袴あり)

(縹子地・絵緯・錦) 明治期製作の丸帯地

〔薄青鼠地州浜に松竹梅文様 錦〕(同裂品の袴あり)

(縹子地・絵緯・錦) 明治期製作の丸帯地

袖…鼠地平絹・白茶地平絹。

裏地…『白地平織木綿布』

備考…表地に明治期製作の丸帯地を転用。

## C 諸菩薩・袈裟

(各袈裟の形態は五条袈裟。また寸法は図解に準じる)

01 袈裟 田相・条葉…『薄赤茶地雲龍仙岳に宝尽し文様 錦』

(経3枚綾地・絵緯全越浮文・錦)

縁・大威儀…田相・条葉に用いる帯裂の無地部分。

裏地…小威儀…『白地平織綿布』

備考…田相、条葉、威儀に用いる裂は昭和戦前戦後期製作の六通帯裂。付記「9」。

02 袈裟 田相…『薄紅地花唐草文様 厚板錦』

(平地・絵緯半越地搦平綴じ・錦)

縁・条葉・大威儀…田相条葉に用いる帯裂の無地部分。

裏地・小威儀：『白地平織綿布』  
銘文…〔省略〕平成十四年五月十四日 護念院二十一世 法譽代  
備考…田相、条葉、威儀に用いる錦は昭和戦前戦後期製作の六通帯  
裂。化繊糸、エナメル箔を利用

#### 03 袈裟

田相…条葉…『赤茶地小花唐草文様 佐賀錦』  
（平地・地緯同口地揚げ紋・錦）  
縁・大威儀…『濃萌葱地縹子（経5枚）無地』  
裏地・小威儀…『白地平織綿布』  
備考…田相、条葉に用いる錦は昭和戦後期製作の佐賀錦帯裂。付記  
「15」。

#### 04 袈裟

田相…『萌葱地養老縹文様 錦』  
（経3枚綾地・地緯同口地揚げ紋・錦）  
条葉・縁・大威儀…『萌葱無地』  
裏地・小威儀…『白地平織綿布』  
銘文…〔省略〕平成十三年五月十四日 護念院二十一世 法譽代  
備考…田相に用いる錦は昭和戦後期製作の帯裂。付記「16」

#### 05 袈裟

田相…『薄紅地几帳に四季花文様 錦』  
（経3枚綾地・絵緯全越地搦浮文と緯3枚綾綴じ・錦）  
条葉・大威儀…『白黄茶色羽二重無地』  
裏地・小威儀…『白地平織綿布』  
備考…田相に用いる錦は昭和戦後期製作の帯裂。付記「13」。

#### 06 袈裟

田相…『薄茶地波に山波文様 錦』  
（経3枚綾地・絵緯全越地搦緯3枚綾綴じ・錦）  
条葉・縁・大威儀…『薄萌葱色綾（経3枚）無地』  
裏地・小威儀…『白地平織綿布』  
備考…田相、条葉に用いる錦は昭和戦後期製作の帯裂。付記「14」。

#### 07 袈裟

田相…『茶地鼎に丸紋文様 錦』  
（経3枚綾地・絵緯全越浮文・錦）

条葉・縁・大威儀…『薄黄色綾（経3枚）無地』  
裏地・小威儀…『白地平織綿布』  
備考…田相に用いる錦は昭和戦後期製作の帯裂。付記「15」。

#### 08 袈裟

田相…条葉…『薄白茶地メダリオン花松文様 錦』  
（経3枚綾地・絵緯全越地搦緯3枚綾と平綴じ・錦）  
縁・大威儀…『薄白茶色綾（経3枚）無地』  
（田相条葉に用いる帯裂の無地部分）  
裏地・小威儀…『白地平織綿布』  
銘文…〔省略〕平成十五年五月十四日 護念院二十一世 法譽代  
備考…田相、条葉に用いる錦は昭和戦後期製作の六通帯裂。付記「16」。

#### 09 袈裟

田相…『縹地格子に小花文様 厚板錦』  
（平地・絵緯全越地搦平綴じ・錦）  
条葉・縁・大威儀…『縹色平無地』  
（田相条葉に用いる帯裂の無地部分）  
裏地・小威儀…『白地平織綿布』  
備考…絵緯にエナメル、アルミ箔を利用。田相、条葉・縁・威儀に  
用いる錦は昭和戦後期製作の六通帯裂。付記「17」。

#### 10 袈裟

田相…『白茶地正倉院八陵花に鳳凰文様 錦』  
（経3枚綾地・絵緯全越地搦浮文と平綴じ・錦）  
条葉・縁・大威儀…『紺色綾（経3枚）無地』  
裏地・小威儀…『白地平織綿布』  
備考…田相に用いる錦は昭和戦前戦後期製作の帯裂。付記「18」。

#### 11 袈裟

田相…『銚色金地花唐草文様 厚板錦』  
（平地・地経地揚げ紋・絵緯全越浮文・錦）  
条葉・縁・大威儀…『白青地平織無地』  
裏地・小威儀…『白地平織綿布』  
銘文…〔省略〕平成十五年五月十四日 護念院二十一世 法譽代。  
備考…田相に用いる錦は昭和戦前戦後期製作の高級帯裂。  
付記「19」。

12 袈裟 銘文：「(省略) 平成十五年五月十四日 護念院二十一世 法譽代」。

備考：08 袈裟に同じ。付記「20」。

13 袈裟 備考：03 袈裟に同じ。付記「24」。

14 袈裟 田相：「萌葱地松葉海波文様 錦」  
(経3枚綾地・絵緯全越浮文・錦)

条葉・縁・大威儀：「萌葱色綾(経3枚) 無地」  
(田相条葉に用いる帯裂の無地部分)

裏地・小威儀：「白地平織綿布」

銘文：「(省略) 平成十三年五月十四日 護念院二十一世 法譽代」。  
備考：田相・条葉・威儀に用いる錦は昭和戦後期製作の六通帯裂。  
付記「21」。

15 袈裟 田相：「金紅地梅菊花文様 錦」  
(経3枚綾地・絵緯全越地搦平と緯3枚綾綴じ・錦)

条葉・縁・大威儀：「金紅色綾(経3枚) 無地」  
(田相条葉に用いる帯裂の無地部分)

裏地・小威儀：「白地平織綿布」

備考：田相、条葉に用いる錦は昭和戦前戦後期製作の六通帯裂。付記「22」。

16 袈裟 田相：「白茶地地紙に梅文様 繻珍錦」  
(経5枚繻子地・絵緯全越地搦緯5枚繻子綴じ・錦)

条葉・縁・大威儀：「白茶色平絹無地」

裏地・小威儀：「白地平織綿布」

銘文：「(省略) 平成十四年五月十四日 護念院二十一世 法譽代」。  
備考：田相に用いる錦は昭和戦前戦後期製作の帯裂。付記「23」。

17 袈裟 田相・条葉：「薄鼠地角牡丹唐草文様 大和錦」  
(緯6枚綾地・絵緯全越地搦緯6枚綾綴じ・錦)

縁：「薄鼠色綾無地」

田相条葉に用いる帯裂の無地部分

大威儀：「浅葱色繻子(経5枚) 無地」

裏地・小威儀：「白地平織綿布」

備考：田相、縁・条葉に用いる錦は昭和戦前期製作の六通帯裂。付記「25」。

18 袈裟 備考：17 袈裟に同じ。付記「5」。

19 袈裟 田相：「薄紅地山桜と菊松文様 錦」  
(緯6枚綾地・絵緯半越前越交替地搦緯8枚綾綴じ・錦)

条葉・縁・大威儀：「薄紅色綾(経3枚) 無地」

裏地・小威儀：「白地平織綿布」

備考：田相に用いる錦は昭和戦前戦後期製作の帯裂。付記「12」。

20 袈裟 田相：「鍔色金地連珠円紋に花唐草文様 厚板錦」  
(平地・地経地揚げ紋・絵緯全越浮文・錦)

11 袈裟に同じだが、連珠円紋の文様部を有する

条葉・縁・大威儀：「白青色平織無地」

裏地・小威儀：「白地平織綿布」

銘文：「(省略) 平成十五年五月十四日 護念院二十一世 法譽代」。  
備考：田相に用いる錦は昭和戦前戦後期製作の高級帯裂。付記「6」。

21 袈裟 田相：「紅地段に花文様 厚板錦」  
(平地・絵緯全越浮文・錦)

条葉・縁・大威儀：「薄紅色綾(経3枚) 無地」

裏地・小威儀：「白地平織綿布」

備考：田相に用いる錦は昭和戦前戦後期製作の帯裂。付記「9」。

22 袈裟 田相・縁：「濃赤地亀甲に花文様 錦」  
(経3枚綾地・絵緯全越地搦緯3枚綾綴じ・錦)

条葉・大威儀：「臙脂色綾(経3枚) 無地」

裏地：「白地平織綿布」

銘文：「(省略) 平成十五年五月十四日 護念院二十一世 法譽代」。

備考：田相、縁に用いる錦は昭和戦後期製作の帯裂。付記「8」。



## 23 袈裟

田相：『薄白紅地洋花文様 錦』

(経3枚綾地・絵緯全と半越地揃平綴じ 錦)

条葉・縁・大威儀：『薄白紅色綾(経3枚) 無地』

(田相に用いる帯裂の無地部分)

裏地・小威儀：『白地平織綿布』

備考：田相、条葉・縁などに用いる錦は昭和戦前戦後期製作の六通帯裂。付記「7」。

## 24 袈裟

田相：『薄赤茶地連珠円紋に鳳凰花文様 錦』

(経3枚綾地・絵緯全越浮文 錦)

条葉・縁・大威儀：『薄赤茶色綾(経3枚) 無地』

(田相に用いる帯裂の無地部分)

裏地・小威儀：『白地平織綿布』

備考：田相、条葉・縁などに用いる錦は昭和戦前戦後期製作の六通帯裂。付記「10」。

## 25 袈裟

田相：『紫海気色地花に鹿文様 経緯錦』

(平地・絵経緯・錦)

条葉・縁・大威儀：『濃萌葱色縹子(経5枚) 無地』

(田相に用いる帯裂の無地部分)

裏地・小威儀：『白地平織綿布』

銘文：「(省略) 平成十三年五月十四日 護念院二十一世 法譽代」。

備考：田相、条葉に用いる錦は昭和戦前戦後期製作の六通帯裂。付記「11」。

## 26 袈裟

田相：『茶地小菊に葡萄唐草文様 錦』

(平組織風通地・絵緯全越別揃平綴じ・錦)

条葉：『茶色平絹羽二重無地』

大威儀：条葉に同じ。

裏地：『白地平織木綿布』

銘文：「(省略) 平成十三年五月十四日 護念院二十一世 法譽代」。

備考：田相の錦裂は明治大正期製作の帯裂。

## 27 (無番) 袈裟

田相：『紺地雲鶴に菊梅文様 錦』

(平組織風通地・絵緯全越別揃平綴じ・錦)

条葉・縁・大威儀：(田相に同じ)

裏地・小威儀：『白地平織木綿布』

銘文：「(省略) 平成十五年五月十四日 護念院二十一世 法譽代」。

## D 諸菩薩装束・天衣

(各天衣の形態は狭巾带状紐、また寸法は未確認)

## 01 天衣

表地：『薄青鼠地雲鶴文様 紋紗』(片振紗地・平地紋・紋紗)

備考：表地の錦裂は江戸後期頃製作の裂。

## 02 天衣

表地：『紫地小紋柄幾何文様 錦』(変り組織地・絵緯全越地揃平綴じ・錦)

備考：表地の錦裂は大正昭和戦前期頃製作の裂。墨書番号「9」を改めて「6」。

## 03 天衣

表地：02天衣に同じ。

備考：墨書番号「10」

## 04 天衣

表地：02天衣に同じ。

備考：墨書番号「11」

## 05 天衣

表地：『茶地堯に霞文様 錦』(平地・絵緯全越地別揃平綴じ・錦)

銘文：「(省略)」。

備考：表地の錦裂は明治期製作の帯裂。

墨書番号「3」と「11」を改めて「13」。

## 06 天衣

表地：『平絹に七宝繋ぎ文様 捺染(型友禪染)』(平織縮緬地・捺染)

備考：表地の錦裂は昭和戦後製作の裂。墨書番号「25」か。

07 天衣 表地…06天衣に同じ。  
備考…表地の錦裂は昭和戦後製作の裂。

08 天衣 表地…『紺地亀甲繫ぎに雲文様 錦』（経3枚綾地・絵緯全越地地揃  
綾綴じ・錦）  
備考…表地の錦裂は明治大正期製作の帯裂。

09 天衣 表地…『白地紗綾型文様 綸子』（経5枚縹子地・緯5枚縹子地紋・  
綾）  
銘文…「平成二年五月（省略）」。  
備考…表地の錦裂は昭和戦前期製作の裂。墨書番号「14」。

10 天衣 表地…09天衣に同じ。  
備考…表地の錦裂は昭和戦前期製作の裂。

11（欠番）  
12 天衣 表地…『平絹に雲取り小花文様 捺染（型友禪染）』（経3枚綾組織地・  
捺染）  
備考…表地の錦裂は昭和戦前期製作の裂。

13 天衣 表地…12天衣に同じ。  
備考…表地の錦裂は昭和戦前期製作の裂。

14 天衣 表地…12天衣に同じ。  
銘文…「平成二年五月（省略）」。  
備考…表地の錦裂は昭和戦前期製作の裂。

15 天衣 表地…『縮緬地に松葉文様 小紋染（型友禪染）』（縮緬地・捺染）  
備考…表地の錦裂は近代期製作の裂。  
16 天衣 表地…15天衣に同じ。  
備考…表地の錦裂は近代期製作の裂。

17 天衣 表地…『縮緬地に松葉文様 小紋染（型友禪染）』（縮緬地・捺染）  
銘文…「（省略）」。  
備考…表地の錦裂は近代期製作の裂。

18 天衣 表地…『白地吉祥尽し文様 錦』（経3枚綾地・絵緯全越別揃平綴じ・  
錦）  
備考…表地の錦裂は昭和戦前期製作の帯裂。墨書番号「不明番号」  
を改めて「5」。

19 天衣 表地…12天衣に同じ  
備考…表地の錦裂は昭和戦前期製作の裂。墨書番号「16」。

20 天衣 表地…『白地段縞に花文様 錦』（経3枚綾地・絵緯全越別揃平綴じ・  
錦）  
備考…表地の錦裂は昭和戦前期製作の帯裂。墨書番号「不明番号」  
を改めて「9」。

21 天衣 表地…20天衣に同じ。  
備考…表地の錦裂は昭和戦前期製作の帯裂。

22 天衣 表地…20天衣に同じ。  
備考…表地の錦裂は昭和戦前期製作の帯裂。

23 天衣 表地…『鼠地破れ七宝繫ぎ文様 錦』（  
経3枚綾地・地緯揚げ地紋・絵緯半越地揃平綴じ・錦）  
銘文…「平成二年五月 辻井照子」。  
備考…表地の錦裂は昭和戦後期製作の帯裂。

24 天衣 表地…23天衣に同じ。  
備考…表地の錦裂は昭和戦後期製作の帯裂。

E 諸菩薩・腰飾

(各腰飾の寸法は未確認。また裏地についても無記載のものは未確認)

07腰飾 表地…『紫茶地微塵唐草文様 綾』(平地・地経浮地紋・錦)

垂布・紐…『白地カ文様 経錦』(平地・絵緯同口・経錦)

備考…表地は08腰飾り・07腰飾りに同じ。

08腰飾 表地…『紫茶地微塵唐草文様 綾』(平地・地経浮地紋・錦)

垂布・紐…『経縞地青海波に唐草文様 錦』

(平地・地経地揚げ・絵緯半越地揚平綴じ・錦)

備考…垂布・紐は昭和戦後製作の裂。

09腰飾 表地…『薄紅地几帳に四季花文様 錦』

(経3枚綾地・絵緯全越地揚浮文と緯3枚綾綴じ・錦)

紐…『薄白茶色平絹』

裏地…『白色平織木綿布』

銘文…『(省略)』

備考…表地は05袷の田相裂に同じ。ラメ箔糸を使用。

10腰飾 表地…『薄萌葱地切嵌めに吉祥文様 錦』

(経3枚綾地・絵緯全越浮文・別揚平綴じ・錦)

垂布…『縹縷小文様染裂』

紐…『白色平織木綿布』

11腰飾 表地…『白茶地花卉文様 錦』(経3枚綾地・絵緯全越浮文・錦)

垂布…『白地霞小文様 錦』(平地・絵緯全越別揚平綴じ・錦)

『濁紫地文様不明 錦』(経3枚地・絵緯全越別揚平綴じ・

金襴)

紐…垂布に同じ

銘文…『(省略) 平成十五年五月十四日 護念院二十一世 法譽代』。

備考…表地の裂は大正から昭和戦前期製作の裂。

12腰飾 表地…『茶地立涌に忍冬唐草文様 経錦』(経3枚綾組織・経錦)

垂布…『経縞地青海波に唐草文様 錦』

(平地・地経地揚げ・絵緯半越地揚平綴じ・錦)

紐…『白色平絹無地』

備考…表地と垂布の裂は昭和戦後製作の裂。

13腰飾 表地…『白地カ文様 経錦』(平地・絵緯同口・経錦)

垂布…『茶色綾絹無地』

紐…『白地カ文様 経錦』(緯6枚綾組織・倭錦)

備考…表地は07腰飾り・08腰飾り表地裂と同裂。

14腰飾 表地…『茶地立涌に忍冬唐草文様 経錦』(経3枚綾組織・経錦)

垂布…『萌葱色綾絹無地』(経3枚綾地)

紐…『白色平織木綿布』

備考…表地の裂は昭和戦後製作の裂。

15腰飾 表地…『薄鼠地切嵌めに小花文様 錦』(平地・絵緯全越別揚平綴じ・

錦)

垂布・紐…『鼠地吉祥紋切嵌め文様 鈍子』(緯縷子地・経縷子地紋・

綾)

銘文…『(省略) 平施十一年五月十四日』。

備考…表地の錦は昭和戦前期製作の裂。

16腰飾 表地…『黒地松に四季花文様 錦』(平地・絵緯全越浮文・錦)

垂布…『濁萌葱色平絹』

紐…『紅色縮緬地霞小文様 型染』(写糊友禪)

銘文…『渡辺大吉 サヨ子』。

備考…表地の錦に漆箔を使用。

17腰飾 表地…『白黄地小花文様 錦』(経3枚綾地・絵緯浮文、全越地揚平

綴じ・錦)

垂布…『紫地小花文様 錦』(経5枚縷子地・絵緯全越浮文・錦)

紐…『二色経養老縞地 綾』(経3枚綾地・二色経地落し文様・綾)

備考…表地の裂は大正から昭和戦前期製作の裂。

18 腰飾 表地…『紫地小花文様 錦』(経5枚襦子地・絵緯全越浮文・錦)

垂布・紐…『紫地経養老縞に小花文様 錦』

(平地・二色経交替地紋・絵緯全越地揃平綴じ・錦)

備考…表地の裂は大正から昭和戦前期製作の裂。

19 腰飾 表地…『白地雪輪に菊松雲幾何文様 錦』(経3枚綾地・絵緯全越別

揃平綴じ・錦)

垂布…『銀地亀甲繋ぎ文様 錦』(平地・風通・錦)

紐…『茶色平絹無地』

備考…表地は明治・大正期製作の丸帯裂。

20 腰飾 表地…『白地雲取りに亀甲文様 錦』(経5枚襦子地・絵緯全越別

平綴じ・錦)

垂布…『平絹地唐草小文様 型染』(写糊友禪)

紐…『鼠色平絹無地』

備考…表地の錦に平金糸と色糸を使用。

21 腰飾 表地…『白地雪輪に菊松雲幾何文様 錦』

(経3枚綾地・絵緯全越別揃平綴じ・錦)

紐…『平絹に臈纈染』

銘文…(省略) 平成十年五月十四日 護念院二十一世 法譽代]

備考…表地は明治・大正期製作の丸帯裂。漆箔糸を使用。

22 腰飾 表地…『茶紅地花卉孔雀文様 経錦』(平組織・経錦)

垂布・紐…『小豆色平絹無地』

備考…表地の裂は昭和戦後製作の裂。

23 腰飾 表地…『紫茶地微塵唐草文様 綾』(平地・地経浮地紋・錦)

垂布…『鼠地菊文様 経錦』(経5枚襦子地・絵緯全越別揃平綴じ・

錦)

〔金通し地菊唐草文様 金欄〕(経5枚襦子地・絵緯全越浮文・

錦)

〔白地唐草文様 銀欄〕(平地・絵緯全越別揃平綴じ・錦)

紐…『紫地平絹無地』  
備考…表地は08腰飾りと07腰飾りに同じ。

24 腰飾 表地…『白茶地洋花文様 錦』(経3枚綾地・絵緯全越別揃綾綴じ・

錦)

垂布・紐…『薄紫地波文様 錦』(経3枚綾地・絵緯全越別揃平綴じ・

錦)

備考…表地の錦は昭和戦前期製作の裂

25 腰飾 表地…『白茶地蜀江文様 錦』(平地・風通・錦)

垂布…『萌葱地養老縞文様 錦』(経3枚綾地・地緯同口地揚げ紋・

錦)

紐…『白色平織木綿布』

備考…表地の錦は昭和戦前期製作の裂。

26 腰飾 表地…『薄白青地雪輪二菊松雲文様 錦』(経3枚綾地・絵緯全越別

揃平綴じ・錦)

垂布…『地七宝繋ぎ文様 錦』(平地・絵緯\*越\*揃\*綴じ・錦)

紐…『平絹臈纈染』

備考…表地は明治・大正期製作の丸帯裂。(番号文字不明瞭)

27 (無番) 腰飾

表地…『紫茶地微塵唐草文様 綾』(平地・地経浮地紋・錦)

垂布…『薄紫色無地』(経3枚綾無地)

紐…垂布に同じ。

28 (無番) 腰飾

表地…『薄萌葱金地扇面に花卉文様 錦』(経3枚綾地・絵緯全越別

揃綾綴じ・錦)

垂布…『薄茶地丸小紋様 臈纈染』(平絹地に臈纈染)

紐…『薄萌葱地花文様 錦』(経3枚綾地・絵緯全越別揃綾綴じ・

錦)

29 (無番) 腰飾

表地：「紺地色紙散し文様 錦」(経3枚綾地・絵緯全越地搦綾綴じ・

錦)

垂布：「紺綾無地」

紐：表地に同じ。

30 (無番) 腰飾

表地：「赤茶地蔦文様 錦」(平地・絵緯半越別搦平綴じ・錦)

垂布：「白黄地小花文様 錦」(経3枚綾地・絵緯浮文・全越地搦平

綴じ・錦)

紐：垂布に同じ。

F 諸菩薩・その他

(各装束の寸法は未確認。また裏地についても無記載のものは未確認)

01 24白衣(肌着)

表地：「白色無地 木綿布」(平組織)

寸法：未確認

仕立：単仕立

銘文：「(省略)」。

G 地藏・天童(上衣・袴)

01 十徳

表地：「蘇芳色無地 羽二重」(平組織)

裏地：「白色無地 羽二重」

寸法：丈・115.0cm. 桁：86cm

仕立：おめり仕立。裾に24cm丈の欄部を設けている。

帯地：上衣表地に同じ。

寸法：巾：8.5cm

備考：垂領仕立の地藏装束。

畳紙に「御地藏様 御衣」と墨書があり、「製作は大阪市天

王寺区東平野町五丁目 御袈裟衣調進所 松栄澤井義陽商店」

の印字がある。

02 上衣

表地：「萌葱地紋様 綾」

裏地：「赤色平織無地」

備考：円領仕立、欄を作らず。調査時に存在せず未確認、その後の

練供養に確認。

03 袴

表地：「白色平織無地」

備考：地藏菩薩の「01十徳」の中に着用する。

04 裁着袴と作業衣

表地：「薄紅地小花文様 型染」(平織木綿布に捺染)

備考：地藏菩薩の「02上衣」の内に着用する。

05 上衣

表地：「濃鼠地梅樹文様 銀欄」(お召地・絵緯半越地搦綾綴じ・錦)

裏地：「赤色平織無地」

備考：天童衣装。大正昭和戦前期製作。

06 上衣

表地：「黒地唐花文様 銀欄」(平地・絵緯半越地搦平綴じ・錦)

裏地：「薄黄色平織無地」

備考：天童衣装。昭和戦前戦後頃製作の織着尺。

07 袴

表地：「紫色綾織無地」

備考：天童衣装。

08 袴

表地：「紫色綾織無地」

備考：天童衣装。

09 上衣

表地：「紺地幾何柄大島紬」

裏地：「薄朱色平織無地」

備考：用途不明の衣装。昭和戦後製作の織着尺。

10 上衣

表地：「青地井桁文様 織着尺」

裏地：「白色平織無地」

備考：用途不明の衣装。昭和戦前製作の織着尺。

(2) 旧用装束の類(二〇一八年現在保管品)

\* 既報『当麻寺来迎会民族資料緊急調査報告書(昭和50年刊)』に加筆、転載。

\* 装束類の番号は既報告書に従う。

\* 備考に記された、付記「数字」は、昭和年に記された整理用番号。

A 上・下衣(上衣、下裳)

01 上・下衣

a 上衣 表地…『紅地瑞雲に孔雀羽文様 繡珍錦』

(経5枚縹子地・絵緯全越別搦緯3枚綾綴じ・錦)

(文カマ: 13.5cm, 文丈: 47.0cm)

裏地…『白地平織粗麻布』

寸法…身丈: 69.5cm, 袖丈: 26.2cm, 袖巾: 53.3cm, 衿: 84.0cm,

衿周: 59.2cm, 襟巾: 5.5cm。

銘文…「観音并 迎接會菩薩装束 右自當年講中一人分以百胴宛之

施入 調造之 峇文化十四年丑四月」。

備考…袖口に襷飾り(紅地縹珍に紅地金襴・紅地縹子の接ぎ合せ)。

雲に暈しの手法が用いられた特色のある文様。付記「3—3」。

b 下衣

表地…上衣と同じ。

裏地…上衣と同じ。

寸法…丈: 83.4cm, 腰廻: 128.6cm。

銘文…「くわをんぼまつん」。

備考…付記「3—3」。

02 上・下衣

a 上衣 表地…『萌葱地波濤に雲龍梅花段文様 繡珍錦』

(経5枚縹子地・絵緯全越別搦緯3枚綾綴じ・錦)

(文カマ: 11.2cm, 文丈: 28.4cm)

裏地…『白地平織粗麻布』

寸法…身丈: 81.4cm, 袖丈: 28.0cm, 袖巾: 52.0cm, 衿: 81.4cm,

衿周: 54.5cm, 襟巾: 6.5cm。

銘文…「せしまつん」。

b 下衣

表地…上衣と同じ。

裏地…上衣と同じ。

寸法…丈: 84.4cm, 腰廻: 139.0cm。

備考…付記「12」。

03 上・下衣

a 上衣 表地…『萌葱地波濤に雲龍梅花段文様 繡珍錦』(02と同じ)

(経5枚縹子地・絵緯全越別搦緯3枚綾綴じ・錦)。

(文カマ: 11.2cm, 文丈: 28.4cm)。

裏地…『白地平織粗麻布』(02と同じ)。

寸法…身丈: 72.4cm, 袖丈: 22.3cm, 袖巾: 53.6cm, 衿: 84.2cm,

衿周: 51.0cm, 襟巾: 6.0cm。

備考…袖口に襷飾り(紅・納戸縮緬の接ぎ合せ)。

表面が擦り切れて下地の紙が散見。付記「3—1」。

b 下衣

表地…上衣と同じ。

裏地…上衣と同じ。

寸法…丈: 84.1cm, 腰廻: 132.6cm。

備考…付記「3—1」。

04 上・下衣

a 上衣 表地…『濃紺地雲龍に稲妻文様 繡珍錦』

(経5枚縹子地・絵緯全越別搦緯3枚綾綴じ・錦)

(文カマ: 11.4cm, 文丈: 24.4cm, 絵緯: 胴3艇と箔)

裏地…『白地平織粗麻布』

寸法…身丈: 77.9cm, 袖丈: 22.1cm, 袖巾: 53.0cm, 衿: 82.5cm,

衿周: 52.30cm, 襟巾: 6.0cm。

銘文…「ふげんぼまつん」。

備考…袖口に襷飾り(紅地縹珍・紫紋紗の接ぎ合せ)。

付記「16を消して3—2」。

b 下衣

表地…上衣と同じ。

裏地…上衣と同じ。

寸法…丈：88.8cm, 腰廻：149.5cm。  
銘文…「ふげんぼるつ」。  
備考…付記「16を消して3—2」。

05 上・下衣

a 上衣 表地…『紅地鳳凰と唐花丸に唐花唐草文様 繡珍錦』

(経5枚縹子地・絵緯全越別搦緯3枚綾綴じ・錦)。  
(文カマ：13.8cm, 文丈：30.0cm, 絵緯：胴3艇と箔)。

裏地…『白地平織粗麻』

寸法…身丈：69.9cm, 袖丈：26.7cm, 袖巾：51.5cm, 桁：80.5cm, 衿周：48.2cm, 襟巾：5.6cm。

備考…袖口に襷飾り(白地金襴・綸子紗の接ぎ合せ)。

箔系の箔剥落が顕著。付記「6」。

b 下衣 表地…上衣と同じ。

裏地…上衣と同じ。

寸法…丈：83.7cm, 腰廻：137.0cm。

備考…付記「6」。

06 上・下衣

a 上衣 表地…『紅地龍丸に稲妻文様 銀襴』

(経5枚縹子地・絵緯全越別搦緯3枚綾綴じ・繡珍錦)。  
(文カマ：11.0cm, 文丈：38.6cm, 絵緯：胴3艇と箔)。

裏地…『白地平織粗麻』

寸法…身丈：69.2cm, 袖丈：23.5cm, 袖巾：55.9cm, 桁：86.4cm, 衿周：48.3cm, 襟巾：4.8cm。

銘文…「護念院從中興十五主 忍譽音撤 戒譽義仰 中川平八 奉

寄進装束功德主御別当中 各為無諸障礙淨業増上 世話高崎

大信寺 願譽慈光上人 □山天□主 奉山上人 願以此功德

平等施一切同發菩薩 往生安樂国 寛政八辰年正月仕立所岩

城柵屋勘助 友七 逗留中宿 源□院民譽運海上人代」

(裏側仕立にて解説難)。

備考…袖口に襷飾り(紺・黄地金襴・紺地綾の接ぎ合せ)。

箔系の箔剥落が顕著。付記「4」。

b 下衣 表地…上衣と同じ。  
裏地…上衣と同じ。  
寸法…丈：82.8cm, 腰廻：130.5cm。

07 上・下衣

a 上衣 表地…『萌葱地龍と鳳凰丸に牡丹鉄線菊唐草文様 繡珍錦』

(経5枚縹子地・絵緯全越別搦緯3枚綾綴じ・錦)。  
(文カマ：11.0cm, 文丈：27.2cm)。

裏地…『白地平織粗麻』

寸法…身丈：73.0cm, 袖丈：27.5cm, 袖巾：53.5cm, 桁：83.6cm, 衿周：56.9cm, 襟巾：6.5cm。

備考…袖口に襷飾り(白綾・紅地金また銀入り縹子の接ぎ合せ)。

付記「2」。

b 下衣 表地…上衣と同じ。

裏地…上衣と同じ。

寸法…丈：82.2cm, 腰廻：135.9cm。

08 上・下衣

a 上衣 表地…『紅地雲龍と鳳凰丸に牡丹桐唐草段文様 繡珍錦』

(経5枚縹子地・絵緯全越別搦緯3枚綾綴じ・錦)。  
(文カマ：13.4cm, 文丈：47.7cm, 絵緯：胴3艇と箔)。

寸法…身丈：67.5cm, 袖丈：23.0cm, 袖巾：54.0cm, 桁：84.7cm, 衿周：58.0cm, 襟巾：4.6cm。

裏地…『白地平織粗麻』

備考…袖口に襷飾り(納戸平絹・白縹子の接ぎ合せ)。

付記「14」。

b 下衣 表地…上衣と同じ。

裏地…上衣と同じ。

寸法…丈：81.4cm, 腰廻：122.5cm。

備考…付記「14」。

09 上・下衣

a 上衣 表地…『紅地龍丸に雲牡丹文様 繡珍錦』

(経5枚縹子地・絵緯全越別搦緯3枚綾綴じ・錦)。  
(文カマ：11.4cm, 文丈：32.5cm)。

(絵緯の萌葱と白を同口に入れて暈し織をする)。

裏地…『白地平織粗麻』

寸法…身丈：69.5cm, 袖丈：22.6cm, 袖巾：55.0cm, 衿：85.0cm,

襟周：57.0cm, 襟巾：5.0cm。

備考…袖口に襷飾り(浅葱縮緬・茶平絹の接ぎ合せ)。

箔糸の箔剥落が顕著。付記「17」。

b 下衣

表地…上衣と同じ。

裏地…上衣と同じ。

寸法…丈：84.2cm, 腰廻：115.0cm。

10 上・下衣

a 上衣 表地…『紅地牡丹胡蝶文様 縹珍錦』

(経5枚縹子地・絵緯全越別搦緯3枚綾綴じ・錦)。

(文カマ：11.0cm, 文丈：41.2cm)。

裏地…『白地平織粗麻』

寸法…身丈：72.1cm, 袖丈：23.4cm, 袖巾：51.3cm, 衿：85.3cm,

襟周：65.3cm, 襟巾：6.0cm。

備考…袖口に襷飾り(白・浅葱縹子の接ぎ合せ)。

箔糸の箔剥落が顕著。付記「5」。

b 下衣

表地…上衣と同じ。

裏地…上衣と同じ。

寸法…丈：80.8cm, 腰廻：114.0cm。

11 上・下衣

a 上衣 表地…『紅地蜀江と龍鳳凰丸文様 縹珍錦』

(経5枚縹子地・絵緯全越別搦緯3枚綾綴じ・錦)。

(文カマ：16.6cm, 文丈：39.4cm, 絵緯：胴2艇と箔)。

(裏綴じ：経3枚綾組織)。

(絵緯の萌葱と黄また茶を同口に入れて暈し織をする)。

裏地…『白地平織粗麻』

寸法…身丈：69.0cm, 袖丈：24.5cm, 袖巾：51.0cm, 衿：81.5cm,

襟周：60.0cm, 襟巾：5.8cm。

備考…袖口に襷飾り(黒平絹・紺地銀欄の接ぎ合せ)。

箔糸の箔剥落が顕著。付記「6を消して九」。

b 下衣

表地…上衣と同じ。

裏地…上衣と同じ。

寸法…丈：81.9cm, 腰廻：133.0cm。

備考…付記「6を消して九」。

12 上・下衣

a 上衣 表地…『萌葱地中蜀江文様 縹珍錦』

(経5枚縹子地・絵緯全越別搦緯3枚綾綴じ・錦)。

(文カマ：10.2cmX2, 文丈：11.4cmX2, 絵緯：胴2艇と箔)。

裏地…『白地平織粗麻』

寸法…身丈：71.5cm, 袖丈：27.2cm, 袖巾：53.0cm, 衿：83.5cm,

襟周：51.6cm, 襟巾：5.5cm。

銘文…「装束一式 右菩薩講中臺人分以青胴百文宛之施入調之者也

願此功德講中 各々無諸障礙皆得吉祥 現世安穩後世浄土矣

維持文政十有一奈戊子夏四月 引接院理鏡 知法院智榮縫之」。

備考…袖口に襷飾り(紅縮緬・紺綾の接ぎ合せ)。

箔糸の箔焼が顕著。付記「15」。

b 下衣

表地…上衣と同じ。

裏地…上衣と同じ。

寸法…丈：80.0cm, 腰廻：148.0cm。

13 上・下衣

a 上衣 表地…『紺地宝相華鳳凰文様 縹珍錦』

(経3枚綾地・絵緯全越別搦緯3枚綾綴じ・錦)。

(文カマ：11.0cm, 文丈：26.4cm, 絵緯：胴2艇と箔)。

裏地…『白地平織粗麻』

寸法…身丈：72.2cm, 袖丈：25.4cm, 袖巾：53.3cm, 衿：82.5cm,

襟周：55.6cm, 襟巾：5.4cm。

銘文…「迎接會菩薩装束 右去天保五年甲午以講中一人分百胴宛之

施財調造之 願以此勝益講中衆等存者豊楽福壽增長亡者離苦



得生浄土 維持天保六年乙未孟夏佛誕生日法誉 引接院智教

知法院昌壽 ふげん 裁縫之。

備考…袖口に襷飾り(紺地縹珍に紫平絹・白綾の接ぎ合せ)。

箔糸の箔剥落が顕著。付記「21」。

b 下衣

表地…上衣に同じ。

裏地…上衣に同じ。

寸法…丈：83.5cm, 腰廻：133.5cm。

銘文…「ふげん ふげんさん」。

備考…付記「21」。

14 上・下衣

a 上衣 表地…『萌葱地含綬鳥丸に唐花文様 縹珍錦』

(経3枚綾地・絵緯全越別搦緯3枚綾綴じ・錦)。

(文カマ：16.9cm, 丈：31.2cm, 絵緯：胴2艇と箔)。

裏地…『白地平織粗麻』

寸法…身丈：68.8cm, 袖丈：25.0cm, 袖巾：50.6cm, 衿：81.8cm,

衿周：50.9cm, 襟巾：5.0cm。

銘文…「御装束七鉢之内 東都前魚籃寺□□ 大塔上人三昧還阿善

秀大和尚 佛果満足為願順説和尚運海 和尚親類中繁栄無諸

障礙延 年転壽後生浄土者也 呉服所東都岩城榭屋友七勘助

仕立當山引接院并尼 福智院知法院 浄雲院 取縁山遺弟地

徳院善妙上人 源宝院運海上人 乃至法界平等善涅 功德主

遺弟中 親類中 寛政八辰正月 護念院從中興十五主 念譽

御徹 弟子戒譽義仰 中川平八」。

備考…袖口に襷飾り(紫縹子・白平絹の接ぎ合せ)、箔糸の剥落顕著。

b 下衣

表地…上衣に同じ。

裏地…上衣に同じ。

寸法…丈：80.3cm, 腰廻：120.5cm。

銘文…「くいんのんぼさッ」。

15 上・下衣

a 上衣 表地…『紅地龍鳳凰雲菊紫陽花文様 縹珍錦』

(経5枚縹子地・絵緯全越別搦緯3枚綾綴じ・錦)。

(文カマ：11.2cm, 丈丈：35.2, 絵緯：胴2艇と箔)。

裏地…『白地平織粗麻』

寸法…身丈：72.3cm, 袖丈：24.0cm, 袖巾：49.0cm, 衿：82.7cm,

衿周：51.8cm, 襟巾：5.6cm。

備考…袖口に襷飾り(紫縹子・白綾の接ぎ合せ)。

箔糸の光沢なし。付記「10」

b 下衣

表地…上衣に同じ。

裏地…上衣に同じ。

寸法…丈：86.6cm, 腰廻：136.4cm。

16 上・下衣

a 上衣 表地…『紅地宝珠牡丹文様 縹珍錦』

(経5枚縹子地・絵緯全越別搦緯3枚綾綴じ裏浮・錦)。

(文カマ：11.2cm, 丈丈：39.3cm, 絵緯：胴1艇と箔)。

裏地…『白地平織粗麻』

寸法…身丈：77.0, 袖丈：22.0, 袖巾：55.5, 衿：84.5, 衿周：51.1,

襟巾：6.0。

備考…袖口に襷飾り(白平絹・紺地牡丹唐草金また銀欄の接ぎ合せ)

箔糸の箔剥落が顕著。付記「3」。

b 下衣

表地…上衣に同じ。

裏地…上衣に同じ。

寸法…丈：84.0cm, 腰廻：136.0cm。

17 上・下衣

a 上衣 表地…『紅地鶴亀宝尽し文様 縹珍錦』

(経5枚縹子地・絵緯全越別搦緯3枚綾綴じ・錦)。

(文カマ：8.4xcm, 丈丈：24.5cm, 絵緯：胴2艇と箔)。

裏地…『白地平織粗麻』

寸法…身丈：71.5cm, 袖丈：23.0cm, 袖巾：53.5cm, 衿：83.0cm,

衿周：55.0cm, 襟巾：4.5cm。

銘文…「観世音菩薩御装束七鉢之内東都前魚籃寺 為大塔上人三昧

還阿善秀大和尚浄土 又願法孫繁栄親族中無諸障礙浄業増上  
佛 満足也呉服所東都岩城榊屋友七勘助 仕立當山引攝知現  
尼 福智院尼知法院尼 浄雲院惠岳尼 願以此功德平等施一  
切 同發菩提心往生安樂国 護念院從中興十五主 寛政八辰  
年二月佛滅日忍譽音撤戒譽義仰 中川平八」。

備考…袖口に襷飾り(白・紺地金また銀欄の接ぎ合せ)。

箔糸の箔残存良。付記「7」。

b 下衣

表地…上衣に同じ。

裏地…上衣に同じ。

寸法…丈：86.5cm、腰廻：148.5cm。

備考…付記「7」。

18 上・下衣

a 上衣 表地…『紺地雲龍宝尽し文様 繻珍錦』

(経5枚縹子地・絵緯全越別搦緯3枚綾綴じ・錦)。

(文カマ：11.3cm、丈：28.7cm、絵緯：胴2艇と箔)。

裏地…『白地平織粗麻』

寸法…身丈：69.6cm、袖丈：25.4cm、袖巾：50.8cm、衿：84.2cm、

衿周：44.9cm、襟巾：70cm。

備考…袖口に襷飾り(白地7枚縹子の一段仕立て)。

地緯糸が劣化して殆ど残らず。

絵緯2色を同口に入れて暈し表現をする。付記「1」。

b 下衣

表地…上衣に同じ。

裏地…上衣に同じ。

寸法…丈：83.4cm、腰廻：134.9cm。

備考…付記「1」。

19 上・下衣

a 上衣 表地…『濃紺地梅籠都牡丹百合文様 繻珍錦』

(経5枚縹子地・絵緯全越別搦緯3枚綾綴じ・錦)。

(文カマ：6.7cm、丈：16.2cm、織巾：70cm、

絵緯：胴2艇と箔)。

裏地…『白地平織粗麻』

寸法…身丈：73.5cm、袖丈：28.2cm、袖巾：52.0cm、衿：81.6cm、

衿周：50.5cm、襟巾：61cm。

備考…袖口に襷飾り(白平絹・萌葱切天鷲絨の接ぎ合せ)。

箔糸の箔剥落が顕著。地緯糸が劣化して殆ど残らず。

絵緯2色を同口に入れて暈し表現をする。付記「19」

b 下衣

表地…上衣に同じ。

裏地…上衣に同じ。

寸法…丈：85.1cm、腰廻：139.8cm。

備考…付記「19」。

20 上・下衣

a 上衣 表地…『萌葱地雲龍宝尽し文様 繻珍錦』

(経5枚縹子地・絵緯全越別搦緯3枚綾綴じ・錦)。

(文カマ：11.3cm、丈：28.5cm、絵緯：胴2艇と箔)。

裏地…『白地平織粗麻』

寸法…身丈：74.0cm、袖丈：24.0cm、袖巾：53.8cm、衿：84.4cm、

衿周：56.0cm、襟巾：54cm。

銘文…「奉寄進大勢至菩薩御装束七鉢之内 東都前魚籃寺 大蓮社

塔誉上人三昧還阿善秀大和尚莊嚴浄土 又翼願説和尚運海和

尚親族中無諸障礙浄業増上也 又攝縁山池徳院灌頂上人善妙

和尚 呉服所東都岩城榊屋友七勘助 宿源審主民譽連海和尚

仕立當山引攝院 知法院浄雲院惠岳尼 功德主遺弟中親類

中 世話遺弟池徳善妙上人 願以忒功德平等施一切 同發菩

提心往生安樂国 寛政八辰年二月 護念院從中興十五主 忍

譽音撤 戒譽義仰 中川平八」。

備考…袖口に襷飾り(白・紅地金また銀欄の接ぎ合せ)。

箔糸の箔残存良好。付記「18」。

b 下衣

表地…上衣に同じ。

裏地…上衣に同じ。

寸法…丈：85.5cm、腰廻：153.0cm。

銘文…「せしむる」。

備考…付記「18」。

21上・下衣

a 上衣 表地…『紺地波濤雲龍宝尺し牡丹文様 繻珍錦』

(経5枚縹子地・絵緯全越別搦緯3枚綾綴じ・錦)。

(文カマ：11.3cm, 丈：31.7cm, 絵緯：胴2艇と箔)。

裏地…『白地平織粗麻』

寸法…身丈：71.5cm, 袖丈：23.0cm, 袖巾：54.5cm, 桁：84.0cm,

衿周：51.0cm, 襟巾：6.5cm。

銘文…「護念院 法譽 迎接會聖衆裝束一衣 右菩薩講中各々以青

胴十疋宛之施入調之 願此功薰存者豊楽福壽無量亡者離苦超

生浄土矣 時は文政十有二年己丑夏四月 知法院知栄 浄雲

院智教 智善 同共裁縫之」。

備考…袖口に襷飾り(紅地金入り縹珍・白縹子の接ぎ合せ)。

付記「16」。

b 下衣

表地…上衣に同じ。

裏地…上衣に同じ。

寸法…丈：84.5cm, 腰廻：125.5cm。

備考…付記「16」。

22上・下衣

a 上衣 表地…『紅地大蜀江文様 繻珍錦』

(経5枚縹子地・絵緯全越別搦緯3枚綾綴じ・錦)。

(文カマ：33.2cmX2, 丈：32.0cm, 絵緯：胴2艇と箔)。

裏地…『白地平織粗麻』

寸法…身丈：72.5cm, 袖丈：25.7cm, 袖巾：48.3cm, 桁：81.7cm,

衿周：44.0cm, 襟巾：7.0cm。

銘文…「明治十四年四月十四日 薦正蓮社真譽上人定阿実門賢道和

尚菩提 同法屋貞樹信士菩提 同梅林貞寶信女菩提 當麻寺

護念院住職 念譽定旭納之 せ志ぼさつ」。

備考…袖口に襷飾り(白縹子・紫平絹の接ぎ合せ)。「13」

b 下衣

表地…上衣に同じ。

裏地…上衣に同じ。

寸法…丈：85.4cm, 腰廻：136.7cm。

銘文…「明治十四年四月十四日 薦正蓮社真譽上人定阿実門賢道和

尚菩提 同法屋貞樹信士菩提 む梅林貞寶信女菩提 當麻寺  
護念院住職 念譽定旭納之 せ志ぼさつ」。  
備考…付記「13」。

23上衣

表地…『紅地丸龍牡丹立涌文様 繻珍錦』

(経5枚縹子地・絵緯全越別搦緯3枚綾綴じ・錦)。

(文カマ：11.3cm, 丈：27.2cm, 絵緯：胴2艇と箔)。

裏地…『白地平織粗麻』

寸法…身丈：72.7cm, 袖丈：25.5cm, 袖巾：52.8cm, 桁：82.0cm,

衿周：50.5cm, 襟巾：6.1cm。

備考…袖口に襷飾り(紺地金入り縹珍・白平絹の接ぎ合せ)。

幕糸の箔剥落が顕著。付記「20」。

24上衣

表地…『臙脂地桜唐草地紋に切箔野毛散文 錦』

(経3枚綾地・絵緯全越地搦緯6枚綾綴じ・錦)。

(絵緯…箔)。

裏地…『白地平織粗麻』

寸法…身丈：70.8cm, 袖丈：20.4cm, 袖巾：52.1cm, 桁：82.0cm,

衿周：45.5cm, 襟巾：5.5cm。

備考…袖口に襷飾り(白縹子)襟・袖口裏のみ白縹子。

表地は昭和前期頃の丸帯裂を利用。付記「8」。

25下衣

表地…『紺地唐花唐草文様 金また銀襷』

(経3枚綾地・絵緯全越地搦緯6枚綾綴じ・錦)。

(文カマ：11.2cm, 丈：19.3cm, 絵緯：胴1艇と箔

織巾：68.5cm)。

裏地…『白地平織粗麻』

寸法…丈：80.8cm, 腰廻：136.0cm。

備考…付記「8」。

26 下衣 (2019年の調査日に残存せず)

表地…『紅地蜀江に龍都鳳凰丸文様 繡珍錦』  
寸法…丈：84.5cm, 腰廻：149.7cm。

27 十徳 (地藏用) (2019年の調査日には残存せず)

表地…『紅梅地 平絹』(詳細未調査)  
裏地…身の裏は付かず  
寸法…身丈：82.0cm, 袖丈：66.7cm, 袖巾：54.0cm, 衿：85.0cm,  
下襷：32.3cm

銘文…「施主大阪安堂寺橋 骨屋町 井村重助倅庄吉 地藏尊衣鉢  
明治十五年四月十四日 護念院十八世念譽代」(襟裏)  
備考…袖口・襟・裾に白平絹の裏裂

28 十徳 (地藏用)

表地…『鉄鼠地菊と牡丹に双葉葵と霞丸文 平地錦 (朝鮮錦)』  
(平紗地・絵緯全越地搦綾綴じ・錦)  
(文カマ：10.5cm, 文丈：42.0cm, 絵緯：胴1艇と箔)  
(表地平紗地錦の箔は裏切、絵緯は縫取)  
裏地…紅絹 (袖口裏、裾裏、襟付裏)  
寸法…身丈：98.3cm, 袖丈：63.2cm, 袖巾：49.7cm, 衿：78.5cm,  
下襷：24.7cm  
備考…袖口は毛抜仕立て、襟・裾はおめり仕立

29 衣 (天童用)

表地…『萌葱地雲鶴地紋様 顕紋紗』  
(三振紗地・平様地紋・紋紗)  
(文カマ：12.8cm, 文丈：18.0cm)  
(織巾：61.5cm)  
寸法…身丈：101.2cm, 袖丈：69.3cm, 袖巾：60.0cm, 衿：93.0cm,  
備考…袖口裏に紅縮緬が細く付けてある。  
綿入り縫い包み蜻蛉玉あり、単仕立て

30 衣 (天童用)

表地…『紫地雲鶴地紋様 顕紋紗』  
(三振紗地・平様地紋・紋紗)  
(文カマ：12.0cm, 文丈：21.2cm)  
(織巾：60.0cm)  
寸法…身丈：112.0cm, 袖丈：71.7cm, 袖巾：60.9cm, 衿：91.6cm  
備考…衿なしの円衿、共裂で略式の蜻蛉玉あり、脇は千鳥がけ、  
綿入り縫い包み蜻蛉玉あり、単仕立て

31 袴 (天童用) (2019年の調査日には存在せず)

表地…『紫地綾織 木綿布』  
裏地…『白地平織木綿 (裾回り)』  
寸法…前丈：88.5cm, 前巾：30.5cm, 腰板：30.0cm, 腰板巾：5.8cm  
備考…腰板共裂

32 袴 (天童用) (2019年の調査日には存在せず)

表地…『紫裾濃染平織麻地に四季花丸文様胡粉描繪』  
裏地…『紅地平絹』  
寸法…前丈：79.4cm, 前巾：29.4cm, 腰板：25.4cm, 腰板巾：7.9cm  
備考…腰板後 (白繻子・上差しあり) 前 (白平絹)

## B 袈裟

01 袈裟

表地…『水浅葱地鳳凰花丸蜀江文様 繡珍錦』  
(経5枚繻子地・絵緯全越別搦緯3枚綾綴じ・繡珍錦)  
(文カマ：不明、文丈：11.2cm, 絵緯：絹糸2艇と箔)  
裏地…『白地平織粗麻』  
寸法…丈：30.0cm, 巾：116.6cm  
銘文…「袈裟功德主 縁山源寶院民譽連海 上人無諸障礙延年轉  
壽浄業増上 為無始以来師僧父母 歴代上人及以法界衆 生  
祈除三障同得往生 阿弥陀仏国靈位品位 増進 仕立所岩城  
柝屋 友七 勘助 宿縁山 源寶院 民譽上人代 寛政八辰  
二月 護念院十五主 忍譽音徹 戒譽 義仰 中川平八 及  
至普益」

備考…田相・条葉共裂。付記「3—1」。

紐の端先を赤地菊葵文様錦裂で修理補填（江戸期のもの）

### 02 袈裟

表地…『紅地宝尽し文様 繡珍錦』

（経5枚縹子地・絵緯全越別搦緯3枚綾綴じ・繡珍錦）

（文カマ…不明、文丈：11.2cm、絵緯…絹色糸と箔）

裏地…『白地平織粗麻』

寸法…丈：30.2cm、巾：116.0cm

銘文…『薩州御隠居公之 御部屋君就御参拜而 従御供中奉納之

右趣意者御両所御方 御壽長久各々現在安 全當来之世即得  
往詣 無量壽佛所満足佛果 廻入生死為度人天奉 寄附之者

也 仕立所岩城枅屋友七 代勘助 滞留中宿三縁山源寶院

民譽連海上人代 願以此功德平等施一切 同發菩薩心往生安

樂國 護念院從中興十五主 寛政七乙卯天 十一月吉辰 忍

譽音徹 戒譽義仰 中川平八』

備考…田相・条葉共裂。付記「3」。

### 03 袈裟

表地…『紺地鳳凰丸桐唐草文様 金襴』

（経3枚綾地・絵緯全越別搦緯3枚綾綴じ・金襴）

（文カマ…6.8cm、文丈…7.6cm、絵緯…箔）

裏地…『白地平織粗麻』

寸法…丈：30.3cm、巾：116.6cm

銘文…『東都有信中 右者先祖代々一家精霊 三界萬靈礙平等普潤

者也 願以此功 德平等施一切 同發菩薩心往生安樂國 寛

政七乙卯年十一月吉日 仕立所岩城枅屋友七 勘助 逗留中

宿三縁山源寶院 民譽連海上人代 護念院從中興十五主 忍

譽音徹 戒譽義仰 中川平八』

備考…田相・条葉共裂、箔糸に漆箔利用。付記「13」。

紐の端先を白地亀甲牡丹文様錦裂で修理補填（江戸期のもの）

### 04 袈裟

表地…『茶地変り巴に入子菱の段文様 錦』

（経3枚綾地・絵緯全越浮文裏綴じ・錦）

（文カマ…5.7cm、文丈…7.5cm、絵緯…絹色糸1艇）

裏地…『白地平織粗麻』

寸法…丈：31.2cm、巾：120.0cm

銘文…『發起人 堺市之町 阿弥陀寺一代 恵光滅罪 全南半町

三好久壽全甲變町東壺町 榊原りく 全東式町 坂上多以

全南半町 泉こう 施主 堺甲變町東式丁 為先祖代々坂上

多以 三界萬靈有無両縁 當麻寺護念院一代 念譽 明治十

九年戊四月 くいんのんぼさツ』

備考…田相・条葉共裂、紐の端先を紫色平絹裂で修理補填。付記「15」。

### 05 袈裟

表地…『紅地菊唐草文様（金入）繡珍錦』

（経5枚縹子地・絵緯全越別搦綴じ・繡珍錦）

（文カマ…12.0cmX2、文丈…8.5cm、絵緯…絹色糸2艇と箔）

裏地…『白地平織粗麻』

寸法…丈：30.5cm、巾：114.9cm

銘文…『紀伊中納言公 御老女芳村殿 酬 先祖累代佛果満足 又

\*延年轉壽盡除一切諸障礙面 見彼佛阿弥陀即得 往生安樂

刹寄附之者也 仕立所尾張町恵比須屋 兵助 藤蔵 藤三郎

逗留中宿縁山源寶院 民譽連海上人代 願以此功德平等施一

切 同發菩提心往生安樂國 護念院從中興十五主 寛政

七乙卯冬 十月吉辰 忍譽音徹戒譽義仰 中川平八』

備考…田相・条葉共裂、紐は別裂（茶地羽二重）で付替える。付記「17」。

### 06 袈裟

表地…『九種錦裂接ぎ合せ』

（紅地菊唐草文様繡珍錦、萌葱地花文様平地金襴、萌葱地雲

文様縹子地金襴、茶地菱繫ぎ文様平地金襴、紫地亀甲文様平

地金襴、萌葱地亀甲繫ぎ変則平地金襴、白地亀甲繫ぎ平地金

襴、紅地亀甲繫ぎ平地金襴、白地菊水文様繡珍錦）

裏地…『白地平織粗麻』

寸法…丈：31.4cm、巾：109.4cm

銘文…『施主堺區甲斐町東四町 池田喜三郎 蓮葉妙瑤童女 本融

覺全居士徳全曜英居士 慈光寶珠禪定門 清屋教意禪定尼

梅本壽光信女 釋真源 釋真正 釋英信 釋光明遵信女 □

岸浄光信士 先祖代々 秋吟童子 貞実妙光信女轉光童子  
蓮譽華開明珠禪定尼 寒月知法禪定門 喜法德源信士 木下  
童三郎先祖代々 住吉屋先祖代々 万代善三郎先祖代々 俗  
名五郎兵衛 上村惣平先祖代々 西口□衛先祖代々 真寿信  
女 海野傳平先祖代々 俗名小きん全志奈 全志う 全亀治  
助 先祖代々 矢先屋先祖代々 吉村伊平先祖代々綿利先祖  
代々 明治十九年四月廿九日死ス 圓應光譽信女 釋妙知俗  
名さと調玄水女 真光正光信女 義童信士 向西童子林傳三  
郎 先祖代々 明治十九年戌四月 轉光童子 蓮譽華開明珠  
禪定尼 碓屋妙厭信女 先祖代々覚念發起人 堺市之町 阿  
弥陀寺一代 惠光 全南半町 三好久壽 全甲斐町東巷丁  
榊原リク 全東貳丁 坂上エイ 全南半町 泉コウ 清慶浄  
華信士 清岳智浄信女 清祐得山禪定門 河名かつる 先祖  
代々 清譽頓岳信士 俗名ハツ 通譽禪達禪定門ハラ氏 先  
祖代々 俗名たけ 池田屋先祖代々 當麻寺護念院一代 念  
譽 堺區九間町東巷町 周旋人吉村伊平」

備考…田相に4裂を用いる。また上縁・下縁・条葉・四葉、紐にも  
異なつた錦裂を用いる。繻珍錦以外の金襴裂は幕末から近代  
初頭にかかる粗雑な織物のように推される。紐の端先を青色  
平絹裂で修理補填。

#### 07 袈裟 (2018.12.3の再調査の時に現存せず)

表地…『紺地入子菱地に小牡丹唐草文 金地金襴』

裏地…『白地平織粗麻』

寸法…丈：28.7cm、巾：115.0cm

銘文…「江都有信中 右者酬 先祖歴代 家精靈 一界万靈 願以  
此功德 平等施一切 同發菩提心往生安樂國 仕立所岩城榊  
屋 友七 代勘助 逗留中宿三縁山源寶院 民譽連海上人代  
寛政七乙卯年十一月吉辰 護念院從中興十五主 忍譽音徹戒  
譽義仰 中川平八」

備考…上縁と紐は別裂で仕立てる(鉄色平織地銀箔などの絵緯を用  
いる。芒・蝶文様)、表地の金襴裂の剥落が著しい。

#### 08 袈裟

表地…『金茶地入子菱地に桜唐草文様 金地金襴』  
(経3枚綾地・絵緯全越別搦綾綴じ・金襴)  
(文カマ：68cm、文丈：5cm、7絵緯：箔)

裏地…『白地平織粗麻』

寸法…丈：30.3cm、巾：121.0cm

銘文…「御閑居滿空大僧正 善光寺本願上人 深川法善寺白栄上人  
三田大松寺諦玄上人 同林泉寺上人 善光寺勸慶寺上人 仕  
立所岩城舛屋 友七 代勘助逗留宿三縁山源寶院 民譽連海  
上人代 寛政七乙卯年十月 護念院從中興十五主 忍譽音徹  
戒譽義仰 中川平八」

備考…田相・条葉、紐共に同裂。付記「7」を消して「3-2」。

#### 09 袈裟

(2018.12.3の再調査の時に現存せず)

表地…『椽地梅桜散文様 壁縮緬』

裏地…『白地平織粗麻』

寸法…丈：29.2cm、巾：116.0cm

銘文…「瑞蓮院隱居觀阿上人 真乘院現在智海上人 一山御寮司現  
堂上人 安立院當主大義上人 仕立所岩城舛屋 友七 代勘  
助 滞留宿三縁山源寶院 民譽連海上人代 願以此功德平等  
施一切 同發菩提心往生安樂國 護念院從中興十五主 寛政  
七乙卯年十一月吉辰 忍譽音徹 戒譽義仰 中川平八」

備考…田相・条葉共裂、箔糸の箔の剥落が著しい。

#### 10 袈裟

表地…『萌葱地小花唐草文様 金襴』

(平地・絵緯全越地搦綾綴じ・錦)

(文カマ：117cm、文丈：11.3cm、絵緯：箔)

裏地…『白地平織粗麻』

寸法…丈：29.3cm、巾：115.0cm

備考…表地は古風な格調を持った江戸中から後期の織物と推される。  
田相・条葉共裂、箔糸の箔の剥落が著しい。付記「21」。

#### 11 袈裟

表地…『萌葱地小花唐草文様 金襴』

(平地・絵緯全越地搦綾綴じ・錦)

(文カマ：11.8cm, 文丈：16.2cm) (絵緯：箔)

裏地…『白地平織粗麻』

寸法…文：30.5cm, 巾：114.4cm

銘文…「雲州 本壽院殿無諸障礙 水野一御奥方无諸障礙 御壽命  
延長後生證 浄土 黒田於喜和殿浄業増上 同幾尾殿 願以  
此功德平等施一切 同發菩提心往生安樂國 寛政第八丙辰年  
仕立所舩屋 友七 代勘助 取次御宿坊 源寶院 逗留中  
宿源寶院 民譽上人代 護念院從中興 十五主 忍譽音徹戒  
譽義仰 中川平八」

備考…表地は古風な格調を持った江戸中から後期の織物と推される。

田相・条葉共裂。付記「3—3」。

### 12 袈裟

表地…『萌葱地桐唐草文様 金襴』

(経3枚綾地・絵緯全越別搦綾綴じ・錦)

(文カマ：6.4cm, 文丈：6.8cm, 絵緯：箔)

裏地…『白地平織粗麻』

寸法…文：30.1cm, 巾：117.8cm

銘文…「江戸有信中 為無諸障礙浄業増上 為法□眼士一峯貞雲女  
菩提 伊澤壽生 先祖代々十九日亡者伊年老母 先祖菩提春  
木氏 雪根如□居士登與女 為 聲甚蓮童女 梅香智薫童女  
先祖歴代精霊 小西弥兵衛 内室 為 安説法壽信士 養專  
了正信女 菩提 浄誉心 岸壽光法尼浄業増上 為光誉明順  
往生極楽也恵世 為西誉迎岸法子 莽橋屋 慈光尼 仕立所  
岩城舩屋 友七勘助 逗留中宿源寶院 民譽上人代 護念院  
十五主 忍譽音徹 戒譽義仰 中川平八」

備考…田相・条葉、紐共裂。付記「4」。

### 13 袈裟

表地…『紅地菊唐草文様 縹珍錦』(05袈裟と同裂)

(経5枚縹子地・絵緯全越別搦綴じ・縹珍錦)

(文カマ：12.0cmX2, 文丈：8.5cm, 絵緯：絹色糸2艇と箔)

裏地…『白地平織粗麻』(05袈裟と同裂)

寸法…文：30.2cm, 巾：116.5cm

銘文…「薩州豊後守公 之御奥方就御参拜 御供中奉納焉 右趣意

者擬 御壽等長久々無諸 障礙來果無此衆 又冀\*先祖累

世父母等 因此功德而脱却生死 證得無生願以此功德 平等

施一切同發菩提 心往生安樂國 惟時寛政七乙卯天 十一月

廿二日 仕立所尾張町夷子屋 兵助 藤藏 藤三郎 逗留守

宿縁 山源寶院 民譽連海上人代 護念院從中興十五主

忍譽音徹 戒譽義仰 中川平八」

備考…田相・条葉共裂、紐は小花文様錦(平地絵緯別搦綴じ錦)と  
橘唐草文様緞子(紅色地経糸と萌葱色地緯糸の経5枚縹子  
昼夜組織)で作る。

### 14 袈裟

表地…『赤黄茶段地龍丸に宝相花唐花文 縹珍錦』

(経5枚縹子地・絵緯全越別搦綾綴じ・錦)

(文カマ：11.0cm, 文丈：21.0cm, 絵緯：絹色糸2艇と箔)

裏地…『白地平織粗麻』

寸法…文：30.3cm, 巾：116.9cm

銘文…「中将尼公尊影乙卯十月二十 有七日入御黒田 真會院殿御  
帰依異子陀拜瞻屢移時而及平西刻獻備之黄 金香\*供物之  
品誌別牒而傳于後代御饗應之珍味 剩黄金孔泉之恵施 御老  
女中 嚴浄院殿清雲院殿 實相院殿貞樹院殿 為無諸障礙浄  
業増上 願以此功德平等施一切 同發菩提心往生安樂國 仕  
立所岩城舩屋 友七 勘助 逗留守宿縁山源寶院 民譽上人  
代 寛政七卯年十一月 護念院從中興十五主 忍譽音徹 戒  
譽義仰 中川平八」

備考…田相・条葉共裂、紐は現代製錦と付け替えている。付記「8」。

### 15 袈裟

表地…『紅地薬玉文様 錦』(経3枚綾地・絵緯全越別搦平綴じ・錦)

(文カマ：11.5cm, 文丈：39.5cm, 絵緯：絹色糸2艇と箔)

裏地…『白地平織粗麻』

寸法…文：32.1cm, 巾：121.6cm

銘文…「發起人 堺市之町 阿弥陀寺一代 為阿見だ寺代々比丘尼  
恵光 仝南半町 三好久壽 仝甲斐町東志町 榊原りく 仝  
東式町 坂上エイ 仝南半町 泉こう 為先祖代々施主堺南  
旅籠町 三好宗治郎宗宅寺代々上人 三界万靈無縁法界 堺

市之町東二丁 尾上伴造為 到誉清岸淨智禪定門 真譽唯心  
淨土禪定尼 無量淨称冷壽信士 為蓮生童子甚玉童子 先祖  
代々 祐譽加角淨觀禪定門松谷妙門 妙譽加祐清觀禪定尼先  
祖代々 聲譽愛蓮妙香禪定尼聲室梅薫 信女 秋山柳月信士  
當麻寺護念院代 念譽 明治十九年戌四月」  
備考…田相・条葉共裂、金箔が僅かに入る。紐も同裂。付記「1」。

16 袈裟

表地…『金茶地入子菱地に桜唐草文様 金地金襴』

(経3枚綾地・絵緯全越別搦綾綴じ・金襴)

(文カマ：6.8cm, 文丈：5.7cm, 絵緯：箔)

裏地…『白地平織粗麻』

寸法…丈：30.4cm, 巾：120.0cm

銘文…『東都三田 越前屋弥兵衛 何某 小西氏何某 何某 為  
先祖歴代 靈魂證得無生 果 願以此功德平等施一切 同發  
菩提心往生安樂國 仕立所岩城舛屋 友七 代勘助 逗留止  
宿縁山源寶院 民譽連海上人代 寛政七卯年十月吉辰 護念  
院從中興十五主 忍譽音徹戒譽義仰 中川平八』

備考…田相・条葉共裂、紐も同裂。付記「11」。

17 袈裟 (2018.12.3の調査日には現存せず)

表地…『紅地宝尽し文様 (銀入) 繡珍錦』(02袈裟に同じ)

(経5枚縹子地・絵緯全越別搦綾綴じ・繡珍錦)

(文カマ：不明、文丈：11.2cm)

裏地…『白地平織粗麻』

寸法…丈：30.1cm, 巾：117.0cm

銘文…『ふげんぼさッ 御役中寛令上人 泉海上人 観智院 麗順  
上人 常行院 察道上人 仕立所岩城麻須屋 友七 代勘助  
逗留中宿三縁山源寶院 民譽連海上人代 願以此功德平等施  
一切 同發菩提心 往生安樂國 護念院從中興十五主 寛政  
七卯年 十月吉祥月 忍譽音徹 戒譽義仰 中川平八』

備考…田相・条葉共裂。付記「11」。

18 袈裟

表地…『赤黄紺段地龍丸に宝相花唐花文 繡珍錦』

(経5枚縹子地・絵緯全越別搦綾綴じ・錦)  
(文カマ：11.0cm, 文丈：21.0cm, 絵緯：絹色糸2艇と箔)  
紐…『白地亀甲牡丹文様 錦』

(平地・絵緯全越別搦平綴じ・錦)

(文カマ：不明、文丈：26.0cm) (絵緯：絹色糸2艇と箔)

裏地…『白地平織粗麻』

寸法…丈：29.9cm, 巾：117.0cm

銘文…『紀伊中納言公 御部屋君 富小路殿 御老女中 奉擬無始  
以来父母 佛果満足延年轉 壽當来無此樂 願以此功德平等  
施一切 同發菩提心往生安樂國 仕立所岩城舛屋 友七代  
勘助 逗留中宿三縁山源寶院 民譽連海上人代 寛政七乙卯  
年十一月 護念院從中興十五主 忍譽音徹 戒譽義仰 中川  
平八』

備考…田相・条葉共裂、紐は03と同裂。

19 袈裟

表地…『薄萌葱地紗綾形地紋に小花唐草文様 金襴』

(経3枚綾地・絵緯全越別搦綾綴じ・錦)

(文カマ：6.8cm, 文丈：9.2cm, 絵緯：箔)

紐…『青地亀甲に菊文様 錦 (11重緞子)』

(経5枚縹子地・地緯交替地揚げ文・錦)

(文カマ：6.8cm, 文丈：9.2cm) (絵緯：箔)

裏地…『白地平織粗麻』

寸法…丈：30.6cm, 巾：116.6cm

銘文…『海林貞法信如 水戸常福寺 智嚴上人 大和尚 下小堀常福  
寺 鏡譽周保上人 為無諸障礙淨業僧上 釈妙壽尼往生淨土  
辰年五月六日往生実母 乃至沙界普潤 呉服仕立供舛屋友七  
勘助 宕源宝院 連海上人 護念院從中興十五主 寛政八辰  
正月 忍譽音徹 弟子戒譽義仰中川平八』宿坊 護念院』  
備考…田相・条葉共裂、紐が途中で別裂(青地亀甲に菊文様 錦)  
に代る。箔糸の箔の剥落が著しい。付記「5」。

20 袈裟

表地…『金茶地入子菱地に桜唐草文様 金地金襴』(08袈裟の表地同  
裂)



裏地…『白地平織粗麻』  
寸法…丈：30.4cm、巾：119.4cm

銘文…『信州善光寺町 右信中 右為 各々壽命長久 後生善生  
先祖歷代菩提 願以此功德平等施一切 同發菩提心往生安樂  
國 仕立所岩城舩屋 友七 代勘助 逗留中宿永井伊助方  
護念院從中興十五主 忍譽音徹 戒譽義仰 中川平八』  
備考…田相・条葉共裂、08袈裟に寛政7年を記す。付記「18」。

### 21 袈裟

表地…『薄萌葱地紗綾形地紋に小花唐草文様 金襴』  
(19)袈裟の表地と同裂) (経3枚綾地・繪緯全越別搦綾綴じ・  
錦)

(文カマ：6.8cm、文丈：9.2cm、繪緯：箔)

裏地…『白地平織粗麻』

紐…『朱紅地小花文様 綾』

(平地・地経地緯浮地紋・綾) 現代の裂。

寸法…丈：30.2cm、巾：117.6cm

銘文…『袈裟功德主 安部駿州大守御内 長谷川五左衛門 栄壽院  
為先祖歷代靈觀明院月庭照欄大姉 圓智院本室貞快大姉 吉  
村芝田両家祈禱 住吉町裏河岸 大津屋藤十郎 本町三丁目  
伊勢屋市兵衛 右大津屋伊勢屋世話人 下目黒壽專尼 右功  
徳主先祖歷代靈魂為 品位昇進寄附之者也 仕立所岩城舩屋  
友七 代勘助 逗留中宿三縁山源寶院 民譽連海上人代 願  
以此功德平等施一切 同發菩提心往生安樂國 護念院 從中  
興十五主 寛政七卯十月 忍譽音徹 戒譽義仰 中川平八』  
備考…田相・条葉共裂、紐先別裂。付記「10」。

### 22 袈裟

表地…『金地紫陽花文様 金襴』  
(経3枚綾地・繪緯全越別搦綾綴じ・錦)

(文カマ：6.8cm、文丈：11.4cm、繪緯：箔)

裏地…『白地平織粗麻』

紐…『紅地葉玉文様 錦』(15袈裟表地に同じ)

寸法…丈：30.0cm、巾：117.4cm

銘文…『淀 稲葉御家中 田村氏 為先祖累代精靈 専求院良月不  
退居士 岡田氏 為先祖代々精靈 演暢院了義信士 為嶋崎  
先祖両親 菩提且為 淨國院載誉正玄信士 正覚院到誉教岸  
信士 威徳院輪誉泰善信士 為江澤氏先祖代々一切精靈 為  
小林氏先祖代々一切精靈 十一日佛 四日佛為 ヲキヨ并ヲ  
イヨ菩提 為芝代氏先祖代々 為中村弥五郎先祖累代 両親  
釈妙入信女 尺妙圓信女九月廿五日 教應智鑑信士 為 進  
藤氏先祖代々并 ヲナヲ并 為三十日佛 為中村家祈禱』  
備考…田相・条葉共裂、紐別裂(紅地糸錦)、箔糸の箔剥離が著しい。  
付記「2」。

### 23 袈裟

表地…『萌葱地桐唐草文様 金襴』  
(経3枚綾地・繪緯全越別搦綾綴じ・錦)

(文カマ：6.4cm、文丈：6.8cm、繪緯：箔)

紐…表地に同じ

裏地…『白地平織粗麻』

寸法…丈：30.7cm、巾：117.6cm

銘文…『安心町伊勢屋仁兵衛母 同町西野惣八内 本町何某 室町  
二丁目伊豆屋長五郎内 同一丁目綱嶋智光 同永來清六母  
南傳馬町大黒屋九平母 大和屋与四郎母 住吉屋治兵エ母  
何某 右者為先祖歷代精靈菩提 世話人下目黒邑 本譽壽專  
比丘尼 仕立所岩城舩屋半兵衛 友七 代勘助 滞留中宿縁  
山源寶院 民譽連海上人代 護念院從中興十五主 寛政七乙  
卯冬十月吉祥月 忍譽音徹 戒譽義仰 中川平八 敬白』  
備考…田相・条葉共裂。付記「16」。

### 24 袈裟

表地…『紺地蝶芒文様 縹珍錦』  
(平地・繪緯全越別搦平綴じ・錦)

(文カマ：8.5cm、文丈：不明、繪緯：絹色系1艇と箔)

裏地…『黄土地牡丹文様 金襴』

(経4枚綾地・絵緯全越別搦平綴じ・錦)  
〔文カマ：107cm, 文丈：不明〕(絵緯：箔)

裏地：『白地平織粗麻』

寸法…丈：29.8cm, 巾：114.4cm

銘文…「京極加賀守殿御隠居 京極能登守殿御奥方 各々壽命長久  
後生無比楽 溝川氏為涼室如熏信女 乘真院本源明達 華開  
院精誉妙進 蔡華院妙誉好善 酉年女為罪障消滅」  
備考…田相に二種裂を用いる、紐なし。付記「17」。

\*既報告書記載の報告以外に、3領の旧用袷姿を見る。「別01袷姿」、「別02袷姿」、「別03袷姿」として次に記しておく。

#### 別・01袷姿

表地：『薄萌葱地紗綾形地紋に小花唐草文様 金襴』

(19, 21袷姿の表地に同じ) (経3枚綾地・絵緯全越別搦綾綴じ・錦)

〔文カマ：6.8cm, 文丈：9.2cm, 絵緯：箔〕

裏地：『白地平織粗麻』

寸法…丈：30.6cm, 巾：116.6cm

銘文…「嶋崎氏為相誉地清雲信士 十月廿六日仏父婦菩提 嶋崎氏  
為先祖代々且為沖太郎祈禱 福島三郎兵衛内方 為 諦譽深  
入信士 復光妙照信女 先祖代々精霊出離 生死 者馬家中  
妙林院 為 先祖歴代□ 界群靈後生 無比楽 奇襲御屋形  
画何某 寛政八辰年正月 仕立所 岩城舛屋 友七 勘助逗  
留中宿縁山源寶院 民誉連海上人代 護念院從中興十五主  
忍譽音徹 戒譽義仰 中川平八」  
備考…田相・条葉共裂、紐端部は別裂(茶地華唐草文様経錦：現代製)で付替える。付記「22」を消して「2」。

#### 別・02袷姿

表地：『茶地雲文様 金襴』(経3枚綾地・絵緯全越別搦綾綴じ・錦)  
〔文カマ：6.8cm, 文丈：4.7cm, 絵緯：箔〕

裏地：『赤地飛鶴文様 金襴』(経3枚綾地・絵緯全越別搦綾綴じ・錦)

(絵緯：箔)

裏地：『白地平織粗麻』

銘文…「發起人 堺市之町阿弥陀寺一代 尼惠光滅罪 全南半町  
三好久壽 全甲變町東老町 榊原理空 全東貳町 坂上恵以  
全南半町 泉光宇 養誉立甫信士 花屋清心信女 教誉圓清  
禪定門 眞月清圓禪定尼 理室安智信女 清誉圓徹法師 見  
誉惠光法尼 輪道圓穢居士 貞山惠正法尼 □岸圓誠居士  
光屋惠林大姉 空山圓純禪士 誠誉惠純法尼 圓誉戒光淨頓  
禪定門 光誉到阿見明智蓮圓覺惠照大姉 照誉到阿惠光禪定  
尼 法誉種戒惠須禪定尼 信誉戒阿惠壽大姉 宗岳圓立禪士  
心光清華信女 寶誉清林法尼 法誉照光清蓮信女 莊誉 宗  
巖信士 行誉立悦信士 一法立二信士 □誉休慶信士 天誉  
惠眞信尼 秋月惠讚信女 默誉道翁居士 一甫□亭童子 惠  
光智幻童子 容顔□夢童子 蓮迎智生童女 智光清蓮童女  
白宝蓮宿童女 梅舍智光童女 徳水童女 蓮光梅生童子 惠  
光智幻童子 法□惠戒童女 順光明音童子 惠玉智光童子  
□生善散童女 随願遊池童子 雪堂猶夢童子 清室智英童  
女 光應復圓童子 先祖代々一切菩提 仁誉義真元壽禪定門  
義誉量岳清壽禪定尼 專誉稱壽禪定門誓誉本壽禪定尼 稱誉  
誓本禪定尼 禮道義亭信士 善教童子 雲誉光月常園禪定門  
覺誉壽光智園禪定尼 津ね譽豊夫行心禪定門 心誉貞雲 覺  
壽禪定尼 端心行善信士 清誉哉友淨海大徳 大雲院棄誉  
紫迎接壽居士 釋妙還 妙壽 儀廣政貞 儀勝 智慶 頭瑞  
□暢 施主 堺 間中久右衛門 當麻寺護念院一代 念譽  
明治十九年四月十四日」  
〔せ志ぼさッ〕

備考…紐は茶地雲文様金襴裂。付記「9」。

#### 別03袷姿

表地：『縹地鳳凰丸桐唐草文様 金襴』

(平地・絵緯全越浮文・錦) 近代製作の織物  
〔文カマ：10.3cm, 文丈：12.7cm, 絵緯：絹色糸1艇と箔〕  
裏地：『白地平織粗麻』

紐…『茶菊葵唐草文様 金襴』

(経5枚縹子地・絵緯全越別搦綾綴じ・錦) 現代製作の織物  
(文カマ・不明、文丈:104cm) (絵緯:箔・金糸)

銘文…「三好楠先祖代々一族諸精霊 三輪太七先祖代々一族精霊  
為見能浄得禪定門各位菩提 俗名佐登霊 蓮光智白童女霊  
和泉國堺區南半町西巷丁 寄附造主 三好楠女 為 俗名千  
賀霊 俗名喜兵衛追善 俗名典子霊 發起人 堺市之町 阿  
弥陀寺一代 恵光 全南半町 三好久壽 全甲斐町東老町  
榊原リク 全東式町 坂上エイ 全南半町 泉コウ 三界萬  
霊無縁法界 當麻寺護念院一代 念譽 明治十九年戊辰四月」

### C 天衣

01天衣 表地…『紅地菊紗綾形地紋に桜唐草文様 縹珍錦』(縹子地・絵緯・  
錦)  
寸法…丈:518cm, 巾:40cm

02天衣 表地…『紅地紗綾地紋に桜唐草文様 金襴』(地・絵緯・錦)  
寸法…丈:466cm, 巾:40cm

03天衣 表地…02天衣と同裂  
寸法…丈:456cm, 巾:40cm

04天衣 表地…天衣と同裂  
寸法…丈:525.8cm, 巾:40cm

05天衣 表地…02天衣と同裂  
寸法…丈:518.0cm, 巾:42cm

06天衣 表地…02天衣と同裂  
寸法…丈:560.0cm, 巾:42cm

07天衣 表地…『紺地亀甲繫ぎ文様 風通錦』(平地・絵緯・風通錦)  
寸法…丈:552.0cm, 巾:40cm

08天衣 表地…『紅地宝相華唐草文様 緞子』(縹子地・縹子地紋・綾)  
寸法…丈:586.4cm, 巾:35cm

09天衣 表地…『焦茶地裂地寄せ文様 縹珍錦』『焦茶地松葉雪輪散し文様  
厚板縹』  
寸法…丈:422.0cm, 巾:38cm

10天衣 表地…『紅地変り石畳文様 金襴』  
寸法…丈:536.0cm, 巾:43cm

11天衣 表地…10天衣と同裂  
寸法…丈:544.0cm, 巾:45cm

12天衣 表地…『金茶地変り石畳地紋に花丸散し文様 錦』『焦茶地胡蝶文様  
綾』  
寸法…丈:482.0cm, 巾:45cm

13天衣 表地…『紅地橘唐草と宝尺し文様 緞子』(経:紅・緯:萌葱)  
寸法…丈:616.0cm, 巾:40cm

14天衣 表地…13天衣と同裂  
寸法…丈:638.0cm, 巾:39cm

15天衣 表地…13天衣と同裂  
寸法…丈:596.0cm, 巾:39cm

16天衣 表地…13天衣と同裂  
寸法…丈:642.0cm, 巾:35cm

17天衣 表地…『萌葱地雲鶴文様 顕紋紗』  
寸法…丈:600.0cm, 巾:37cm

18 天衣 表地…17天衣と同裂

寸法…丈：408.9cm, 巾：37cm

19 天衣 表地…『白地牡丹に蝶文様 厚板錦』『紺地扇子散し文様 厚板錦』

寸法…丈：558.0cm, 巾：35cm

備考…裏裂を用いている。

20 天衣 表地…『焦茶地菊芒鼓胴小田巻文様 繻珍錦』

寸法…丈：540.0cm, 巾：40cm

21 天衣 表地…『紺地唐草文様 銀欄』『白地唐草文様 錦』

寸法…丈：500.0cm, 巾：40cm

備考…損傷が著しい

22 天衣 表地…『萌葱地小花唐草と紗綾菱形文様 金欄』

寸法…丈：676.0cm, 巾：40cm

備考…19天衣と同文様あり

23 天衣 表地…『紫地雲鶴文様 顕紋紗』

寸法…丈：548.0cm, 巾：42cm

24 天衣 表地…『淡黄地変り格子文様染絵 縮緬』

寸法…丈：526.8cm, 巾：41cm

3-2, 8, 12, 15, 4. 表地…『紅茶地紗綾形に小紋 金欄』（経3枚綾地・絵緯全越浮文・

錦）

3, 6, 無番 表地…『赤茶地橘唐草地紋 緞子』（経5枚縹子地・緯5枚縹子地紋・

綾）

無番 表地…『赤茶地小花唐草地紋 緞子』（経5枚縹子地・緯5枚縹子地

紋・綾）

33. 表地…『紅地髷格子文様 金欄』（経3枚綾地・絵緯全越浮文・錦）

D 腰飾り

10 腰飾・17 腰飾・18 腰飾・22 腰飾は2019年調査時に該当品は無く、また大半の旧腰飾は昭和50年（1975）の既報告書後に修理が行われており、相応の改変が見られる。

01 腰飾 表地…『紅地蜀江文様 錦』（装束22と同裂）

（経8枚縹子地・絵緯全越別搦緯3枚綾綴じ・繻珍錦）

裏地…『萌葱地平織木綿』

寸法…丈：60.5cm, 巾：91.9cm

02 腰飾 表地…『紅地蜀江文様 錦』（22装束の裂に同じ）

（経5枚縹子地・絵緯全越別搦平綴じ・錦）

『金茶地小花散文様 糸錦』

（経3枚綾地・絵緯全越別搦綴じ・錦）

裏地…『紅地平絹』

寸法…丈：65.4 cm, 巾：92.4cm

銘文…「當麻寺護念院 十八世 明治十八年西四月念譽代」

備考…表地に2種裂を用いる。

03 腰飾 表地…『紅地丸龍瑞雲文 繻珍錦』

（経5枚縹子地・絵緯全越別搦緯5枚縹子綴じ・錦）

『紅地蜀江文様 錦』

（経5枚縹子地・絵緯全越別搦綴じ・錦）

裏地…『濃萌葱地平絹』『紫地文様不明緞子』

寸法…丈：58.5 cm, 巾：97.5cm

備考…表地は主に2種裂を用いるが、他裂もあり。

04 腰飾 表地…『焦茶地籬に菊芒鼓胴秋草文様 繻珍錦』05、06 腰飾と同じ

（経5枚縹子地・絵緯全越地搦緯4枚綾綴じ・錦）

条飾…『紅地蜀江文様 錦』

(経5枚縹子地・絵緯全越別搦3枚綾綴じ・錦)

『紅地草花文様 厚板錦』

(平地・絵緯全越別搦平綴じ・錦)

『茶地梵文様 錦』

(経3枚綾地・絵緯全越別搦平綴じ・錦)

腰紐…『鼠平絹地霞小紋 型染』

裏地…『淡焦茶地平絹』

寸法…丈：57.0cm、巾：96.5cm

#### 05 腰飾

表地…『焦茶地籬に菊芒鼓胴秋草文様 縹珍錦』04、05腰飾と同じ

(経5枚縹子地・絵緯全越別搦緯4枚綾綴じ・錦)

『紅地蜀江文様 錦』

(経5枚縹子地・絵緯全越別搦緯3枚綾綴じ・錦)

裏地…『淡焦茶地平絹』04と同じ

寸法…丈：60.5cm、巾：97.0cm

#### 06 腰飾

表地…『焦茶地菊芒鼓胴秋草文様 縹珍錦』04、05腰飾と同じ

(経5枚縹子地・絵緯全越別搦緯4枚綾綴じ・錦)

条飾…『茶地唐草地紋 緞子』

(経5枚縹子地・緯5縹子地紋・綾)

『黒綸子地に小花文様 刺繡(慶長裂)』

『紅地菊花文様 錦』

(経5枚縹子地・絵緯全越別搦緯4枚綾綴じ・錦)

『紅地樹花文様 金襴』

(経5枚縹子地・絵緯全越別搦平綴じ・錦)

『紅地割付文様 錦』

(経5枚縹子地・絵緯浮文・錦)

腰紐…『平絹に花樹文様 捺染』(現代のもの)

裏地…『紅地平絹』

寸法…丈：42.5cm、巾：98.5cm

備考…飾紐の「黒白染分に菊唐草紋・宝尺紋定紋く縫」裂は江戸時代前期の裂地を使用。

#### 07 腰飾

表地…『焦茶地菊芒鼓胴秋草文様 縹珍錦』04と同じ

(経5枚縹子地・絵緯全越別搦\*綴じ・錦)

『白地亀甲に蝶牡丹文様 錦』09腰飾に同じ

(経3枚綾地・絵緯全越別搦平綴じ・錦)

条飾…『白地亀甲に蝶牡丹文様 錦』表地に同じ

『紅地不明文様 錦』

(経5枚縹子地・絵緯全越浮文・錦)

裏地…『色替地不明文様 縹珍錦』04と同じ

寸法…丈：56.7cm、巾：84.0cm

#### 08 腰飾

表地…『赤地雲鶴文様 銀襴』

(経5枚縹子地・絵緯全越別搦緯4枚綾綴じ・錦)

『白地牡丹蝶文様 厚板錦』

(平地・絵緯全越別搦平綴じ・錦)

条飾…『紫地雲に小花文様 倭錦』09、12腰飾に同じ

(緯6枚綾地・地絵緯同口交替・緯錦)

腰紐…『紺地雁木縞文様 風通錦』09腰飾に同じ

(平地・地絵緯交替二重織・錦)

裏地…『紅地平絹』

寸法…丈：58.3cm、巾：92.5cm

銘文…『發起人 堺市之町 阿弥陀寺一代 恵光 南半 三次久壽

甲斐町東老丁 榊原リク 東式丁 坂上エイ 南半丁 泉コ

ウ 當麻寺護念院一代 念譽 明治十九年 戊四月』

備考…飾紐は「紫地雲に柳桜文様 緯錦」を用いる。

#### 09 腰飾

表地…『赤地雲鶴文様 銀襴』08、12と同じ

(経5枚縹子地・絵緯全越別搦緯4枚綾綴じ・錦)

『白地亀甲に蝶牡丹文様 錦』07腰飾に同じ

(経3枚綾地・絵緯全越別搦平綴じ・錦)

条飾…『紫地雲に小花文様 倭錦』08腰飾に同じ

(緯6枚綾地・地絵緯同口交替・緯錦)

腰紐…『紺地雁木縞文様 風通錦』

(平地・地絵緯交替二重織・錦)  
『濃紫地幾何紋に鶏頭文様 錦』  
(経3枚綾地・絵緯全越浮文・錦)

裏地…『紅地平絹』08と同じ

寸法…丈：59.2cm、巾：94.0cm

銘文…「發起人 堺市之町 阿弥陀寺一代 恵光 南半丁 三好久壽 甲斐町東壺丁 榊原リク 東式丁 坂上エイ 南半丁 泉コウ 當麻寺護念院一代 念譽 明治十九年 戌四月」

#### 10 腰飾 (2019年の調査時に本該当品なし)

表地…『白黒染分地島に菊唐草と宝尽し文様 綸子』

『白地菊水文様 厚板錦』

裏地…『紅地綸子・白地綸子』

寸法…丈：71.7cm、巾：74.0cm

銘文…「寛政十年戊午十二月 釈宗心施主」(飾紐にあり)

備考…「白黒染分地縞に菊唐草と宝尽し文様 綸子」は寛永・寛文頃の裂。  
裏裂(二か所に)慶長裂「紅白染分菊花文」を、飾紐に元禄頃の袖裂を使用する

#### 11 腰飾

表地…『赤地雲鶴文様 銀襦』

(経5枚縞子地・絵緯全越別搦緯3枚綾綴じ・錦)

『紅地葉玉文様 糸錦』

(経3枚綾地・絵緯全越別搦平綴じ・錦)

条飾…『紺地不明文様 錦』

(経3枚綾地・絵緯全越別搦緯3枚綾綴じ・錦)

腰紐…『紺地雁木縞文様 風通錦』

(平地・地絵緯交替二重織・錦)

裏地…『紅地平絹』

寸法…丈：60.4cm、巾：93.0cm

銘文…「發起人 堺市之町 阿弥陀寺一代 恵光 南半 三次久壽 甲斐町東壺丁 榊原リク 東式丁 坂上エイ 南半丁 泉コウ 當麻寺護念院 一代念譽 明治十九年 戌 四月」

備考…2種類の裂を用いる。飾紐は各種裂を使用する

#### 12 腰飾

表地…『赤地雲鶴文様 銀襦』08、09、11腰飾と同じ

(経5枚縞子地・絵緯全越別搦緯4枚綾綴じ・錦)

『淡紅地牡丹萩蝶文様 厚板』

(平地・絵緯全越別搦平綴じ・錦)

条飾…『紫地雲に小花文様 倭錦』08腰飾に同じ

(緯6枚綾地・地絵緯同口交替・緯錦)

腰紐…『紺地雁木縞文様 風通錦』08、09腰飾に同じ

(平地・地絵緯交替二重織・錦)

裏地…『紅地平絹』

寸法…丈：64.2cm、巾：81.5cm

銘文…「發起人 堺市之町 阿弥陀寺一代 恵光 南半 三次久壽 甲斐町東壺丁 榊原リク 東式丁 坂上エイ 南半丁 泉コウ 當麻寺護念院 一代念譽 明治十九年 戌四月」

備考…表地に2種類の裂を用いる。飾紐は各種裂を使用。

#### 13 腰飾

表地…『萌葱地丸龍文様 頭紋紗』

(三振紗地・平様地紋・紋紗)

『紺地丸龍桐唐草文様 縞珍錦』

(経5枚綾地・絵緯全越別搦緯3枚綾綴じ・錦)

『紅地菊牡丹文様 金入縞珍錦』

(経4枚綾地・絵緯半越地搦緯3枚綾綴じ・錦)

条飾…『萌葱地小花文様 錦』

(平地・絵緯全越別搦緯3枚綾綴じ・錦)

『紅地平絹』

腰紐…『淡萌葱地飛燕文様 厚板』

(平地・絵緯全越別搦平綴じ・錦)

裏地…『紅地平絹』

寸法…丈：75.5cm、巾：93.0cm

銘文…「施主小山氏知高」(飾紐にあり)

#### 14 腰飾

表地…『紅地入子菱繋ぎに桜花散し文様 金襴』

(経3枚綾地・絵緯半越別搦緯3枚綴じ・錦)

条飾…表地に同じ

腰紐…表地に同じ

裏地…『平絹織色綾』

寸法…丈：89.0cm, 巾：97.0cm

### 15 腰飾

表地…『紅地変り菱繫文様 唐織』

(経3枚綾地・絵緯半浮文・錦)

『紅地梅文様 金入襦珍錦』

(経3枚綾地・絵緯全越別搦綴じ・錦)

『紺地雲に菊桐文様 錦』

(経3枚綾地・絵緯全越別搦緯3枚綾綴じ・錦)

『金茶地松竹鶴亀丸に三つ葉葵散し文様 金襴』

(経4枚綾地・絵緯全越別搦緯3枚綾綴じ・錦)

条飾…『紅地飛鶴文様 金襴』

(経5枚襦子地・絵緯全越別搦綾綴じ・錦)

『黒綸子地小花宝尽し文様 刺繍』

『白色平絹地に花稜文様 捺染』(現代のもの)

『紺地不明文様 金襴』

裏地…『紅地平絹・萌葱地平絹』

寸法…丈：97.0cm, 巾：82.5cm

備考…表地に4種類の裂を用いるが損傷が著しい。条には各種裂を使用するが、中に江戸時代前期の慶長裂と呼ばれる裂もあり。

### 16 腰飾

表地…『紅白染分綸子地菊花文様 刺繍』

『紺地丸龍桐唐草文様 襦珍錦』

(経5枚綾地・絵緯全越別搦緯3枚綾綴じ・錦)

『萌葱地檜垣に吉祥文様 錦』

(経5枚襦子地・絵緯全越別搦平綴じ・錦)

条飾…『黒地小花文様 刺繍』(慶長裂)

『白地牡丹蝶文様 厚板錦』

(平地・絵緯全越別搦平綴じ・錦)

『紅地孔雀羽根文様 錦』

裏地…『紅地平絹・萌葱地平絹』

寸法…丈：65.7cm, 巾：79.2cm

備考…表地に3種類の裂を用い、その中に慶長裂(綸子・紅白染分・菊花文)を使用する。飾紐は各種裂を使用する。

### 17 腰飾

(2019年の調査時に本該当品なし)

表地…『萌葱地雷文崩しに宝相華唐草文様 金襴』

『白地吉祥文襦珍錦・赤地宝尽し文様 襦珍錦』

裏地…『織色(紅・紺)平絹(海絹)』

寸法…丈：65.2cm, 巾：97.5cm

備考…表地に3種類の裂を用いる。飾紐は各種裂を使用。

### 18 腰飾

(2019年の調査時に本該当品なし)

表地…『紅地入子菱繫文様 唐織』

『金茶地松竹鶴亀丸に三葉葵紋散文様 金襴』

『金茶地網代に桜文様 金襴』

『紅地桜文様 金襴』

裏地…『紅地平絹』

寸法…丈：76.0cm, 巾：97.5cm

備考…表地に4種類の裂を用い、中に江戸時代前期の唐織裂がある。飾紐は各種裂を使用。

### 19 腰飾

表地…『紅地鳳凰雲菊宝尽し文様 襦珍錦』

(経5枚襦子地・絵緯半越別搦緯3枚綾綴じ・錦)

条飾…表地に同じ

腰紐…『萌葱地平絹・紫地平絹』

裏地…『萌葱地平絹』

『萌葱地牡丹文 頭紋紗』(三振紗地・平様地紋・紗)

寸法…丈：69.2cm, 巾：107.4cm

備考…裏地に2種類の裂を用いる。飾紐は各種裂を使用。

### 20 腰飾

表地…『紺襦子無地地紙に桐唐草文様 金糸刺繍』(経5枚襦子)

『紅地亀甲鳳凰文様 襦珍錦』(経5枚襦子地・絵緯全越別搦綾綴じ・錦)

腰紐…『紅地幸い菱繋ぎ文様 唐織』(経3枚綾地・絵緯半越浮文・錦)

裏地…『白地菊花に波文様』

寸法…文：67.6cm、巾：82.8cm

備考…表地に3種類の裂を用いる。条紐は各種裂を使用。

21腰飾 表地…『紅地菊唐草文様 錦』(経3枚綾地・絵緯全越別搦平綴じ・錦)

### 21腰飾

裏地…『白地牡丹蝶文様 厚板錦』(平地・絵緯全越別搦平綴じ・錦)

寸法…文：75.6cm、巾：118.5cm

備考…表地に2種類の裂を用いる。飾紐は各種裂を使用。

江戸前期の裂(綸子・白黒染分・縞に菊唐草と宝尽文)を使用。

22腰飾 (2019年の調査時に本該当品なし)

表地…『白黒染分綸子地縞に菊唐草と宝尽文様 綸子』

裏地…『紅地橘唐草文紅地紋 緞子』

寸法…文：53.0cm、巾：102.5cm

備考…表地に2種類の裂を用いる。飾紐は各種裂を使用。

江戸前期の裂(綸子・白黒染分・縞に菊唐草と宝尽文)を使用。

23腰飾 表地…『萌葱地牡丹文様 頭紋紗』(三振紗地・平様地紋・紋紗)

裏地…『萌葱地網代に吉祥文様 繻珍錦』

寸法…文：61.0cm、巾：96.0cm

備考…表地に4種類の裂を用いる。飾紐は各種裂を使用。

24腰飾 表地…『赤地雲鶴文様 銀襦』(経5枚縞子地・絵緯全越別搦緯3枚綾綴じ・錦)

裏地…『紅地薬玉文様 糸錦』(経3枚綾地・絵緯全越別搦平綴じ・錦)

寸法…文：62.4cm、巾：81.4cm

備考…表地に3種類の裂を用いる。飾紐は各種裂を使用。

25腰飾 表地…『薄茶綸子地松樹文様 刺繻』(紺地丸龍桐唐草文様 繻珍錦)

裏地…『薄茶縞子地松樹文様 刺繻』(紺地丸龍桐唐草文様 繻珍錦)

寸法…文：61.0cm、巾：96.0cm

備考…表地に3種類の裂を用いる。飾紐は各種裂を使用。

25腰飾 表地…『薄茶縞子地松樹文様 刺繻』(紺地丸龍桐唐草文様 繻珍錦)

裏地…『薄茶縞子地松樹文様 刺繻』(紺地丸龍桐唐草文様 繻珍錦)

寸法…文：61.0cm、巾：96.0cm

備考…表地に3種類の裂を用いる。飾紐は各種裂を使用。

25腰飾 表地…『薄茶縞子地松樹文様 刺繻』(紺地丸龍桐唐草文様 繻珍錦)

裏地…『薄茶縞子地松樹文様 刺繻』(紺地丸龍桐唐草文様 繻珍錦)



備考…表地に3種類の裂を用いる。飾紐は各種裂を使用。

## E その他

01 菩薩下着(24着)(2019年の調査時に該当品なし)

表地…『白地平織木綿布』

寸法…丈:72.0cm, 袖丈:22.2cm, 巾:31.0cm, 桁:67.7cm

備考…単仕立, 24着。

02 地藏菩薩下着(上)(2019年の調査時に該当品なし)

表地…『臙脂木綿地小花小紋 型染』

寸法…丈:66.2cm, 袖丈:42.0cm, 巾:37.5cm, 桁:69.5cm

備考…単仕立

03 地藏菩薩下着(上)(2019年の調査時に該当品なし)

表地…『臙脂木綿地小花小紋 型染』(02下着と同じ)

寸法…身丈:67.7cm 袖丈:40.0cm, 巾:36.4cm, 桁:69.0cm

備考…単仕立

04 地藏菩薩下着(下)(2019年の調査時に該当品なし)

表地…『臙脂木綿地小花小紋 型染』(02下着と同じ)

寸法…前丈:85.0cm 前巾:21.5cm, 腰板:21.0cm

備考…単仕立

05 地藏菩薩下着(下)(2019年の調査時に該当品なし)

表地…『臙脂木綿地小花小紋 型染』(02下着と同じ)

寸法…前丈:87.0cm 前巾:23.7cm, 腰板:20.0cm

備考…単仕立

06 汗とり(2019年の調査時に該当品なし)

表裏…『藍色地粗麻布』

寸法…丈:30.5cm, 巾:172.0cm

備考…28枚。

07 襪(2019年の調査時に該当品なし)

表裏…『白色平織木綿布』

寸法…長丈:22.4cm, 爪先上り:8.4cm, 踵深 $\phi$ :12.0cm

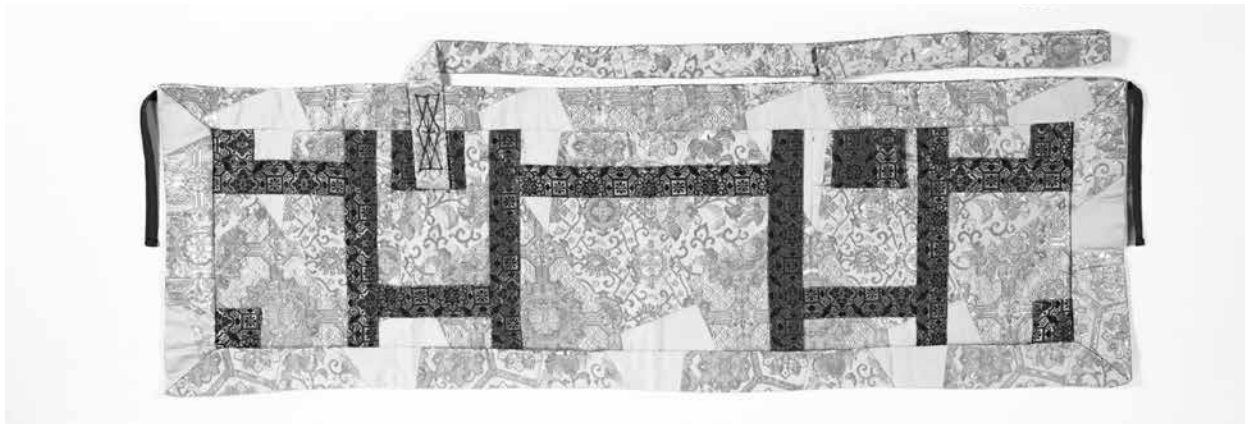
備考…紐付き, 28枚。



現用装束（上衣・A02a）



現用装束（下裳・A02b）



現用装束（袷姿・A06）



現用装束（腰飾・A16）



旧用装束（上衣・A01a）



旧用装束（上衣・A01a・銘文）



旧用装束（下裳・A01b）



旧用装束 (袈裟・B01・上：表面・下：裏面・銘文)



旧用装束 (腰飾・D01)



旧用装束 (天衣・C09)